

---

# 不覚の運命

Traitor

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不覚の運命

### 【Zコード】

N5773E

### 【作者名】

Traitor

### 【あらすじ】

毎日の生活に退屈を感じていた桐谷耕介に、ある日、一本の電話がかかってくる。それは、彼の友人、黒川隼人が行方不明になつたという通告だった。その通告者、私立探偵の白崎竜輔と名乗る男と面会し、訳あって桐谷は黒川の家に一人で行くことになる。だが、そこで見たものは想像を絶する恐ろしいものだつた……。その日から、退屈で当たり前だつたはずの日常が、大きく歪みはじめる。そしていつしか、彼の人生をも左右する、大きな出来事へと発展していった。

## 第一章 不覚 1（前書き）

評価や感想をいただければ、光榮です。

その日も、いつもと同じ何ら変哲もない一日だった。

夕日もそろそろ沈むころで、辺りのビルやその他の建物は鮮麗な橙色に染まっている。車の流れる音の他に、巣へと帰るだらうカラスの鳴く声が遠くの方で聞こえていた。

桐谷耕介は、部屋の窓から沈みゆく夕日をぼんやりと眺めていた。高層マンションの上層部から眺める景色は確かに格別なものではあつたが、大都市であるここ東京では人工的に植えられた緑がその大部分を占めている。この高さから眺めてでもビルなどの建物が視界を妨げ、その間から遠方に霞む山々がどうにか見えるくらいだった。

田舎育ちだった桐谷にとってそれは少し不愉快なものではあったが、それでも都会の便利さというものを知ってしまったから、その生活に離れられなくなっていた。といっても桐谷は作家であり、毎日必ずしも外に出るということ習慣はない。どちらかといえば、一日中家で過ごすことの方が多い。それでも、できる限り外に出ようとしていた。

何せ、毎日が退屈だった。作家という仕事柄のせいか、それとも性格の問題か、何も変わらず坦々と流れしていく毎日にストレスを感じていたのである。

当然、仕事はしている。だが、それだけではその膨大な時間を潰せるほど忙しくはないのだ。だから、時折外に出て気分転換を図る。そうしないと、自分の中の何かが弾けそうで怖かった。

とにかく、どうにかして今の日常を変えたい。そう思つただが、そんな簡単なことではないのもまた事実だった。

夕日も見えなくなつて、だんだんと暗くなつていく空を眺めながら、桐谷はひとつ溜め息をついた。

これで今日も終わり。そして、また今日のような明日がやつ

てくる。

そう思つと、辛かつた。生きている意味、それが何なのか、今の桐谷に答えることなど到底できるはずもなかつたのである。

空が完全に暗くなつたのを確認すると、桐谷は部屋の明かりをつけた。ソファに腰かけ、テレビのリモコンを握る。

今は三月の下旬で、上旬にもなれば桜が咲き始めるころだつた。テレビでは、桜が開花する日を予測するニュースなども取り上げられている。桐谷は、特に桜について興味があつたわけではなかつたが、そんなニュースをただ呆然と見ながら、たまには花見もいいかな、などと考えていた。

すると、一本の電話を知らせる音が部屋中に響き渡つた。久々に鳴つた電話に桐谷は少し驚いたが、所詮大したことではないだろうという思いで受話器を取る。

「すみません。桐谷耕介さんですか？」

受話口から聞こえてきた声は、意外にも若々しい男の声だつた。だが、その声に聞き覚えはない。

「……どちら様ですか？」

「私立探偵をやつてゐる、白崎竜輔と言います」

探偵が作家に一体何の用だろつかと思つたのも束の間、彼は妙なことを口にする。

「黒川隼人さんは、お知り合いですよね？」

「……はい。そうですけど」

桐谷はその名を聞いて少し驚いた。それは、黒川隼人というのは桐谷の友人だつたからである。

また、桐谷にとつて黒川は無一の親友と言つても良いほどの存在だつた。彼とは、悩みがあれば率先して相談し合う仲であつたし、何より互いに本音を語り合つことができた。それは、彼とは幼い頃からの付き合いで今までずっと仲良くやつてきたからこそのことである。

互いに社会人になつてからも、何度か食事をしたり遊びに行つたり

していった。ただ、最近は忙しいことこの上もあり連絡を取つていな  
い。

「隼人が、どうかしたんですか？」

桐谷が思つたままに聞くと、白崎は何やら深刻そうな声で返事を  
した。桐谷も思わず息を呑み、続く言葉に耳を傾ける。

「実は彼、現在行方不明になつていてまして」

瞬間、桐谷は彼の言葉を遮つて叫ぶよつに驚きの声を上げた。

「 行方不明？ それは本当ですか？」

短い沈黙のあと、「はい」と白崎は小さく答える。

「 昨日の夕暮れから、行方がわからなくなつていて……。何  
か知つていることがあれば聞きたかったのですが、その様子だと無  
理のようですね」

「すみません。彼とは最近、連絡を取つていなかつたので

「 そうでしたか……」

再び、数秒間の沈黙が流れる。

「 そういうえば、あなたは彼と大変仲が良かつたと聞いておりま  
すが」

「はい。彼とは幼馴染だったので」

「一体誰に聞いたのだろうかと思ったが、別に気にはしなかつた。

「 そうですか。では今度、お話を伺つてもよろしいでしょうか？  
こちらとしても、聞きたいことがたくさんありますし」

「はい。構いませんけど……」

そう答えると、白崎は待ち合わせの場所や時間などを指定してき  
た。その日は特に予定もなく、何せ毎日が退屈だった桐谷にとつて  
は外に出る良い機会である。

何より、彼は黒川のことが心配だった。最近、連絡を取つていな  
かつたこともある。

電話を切つたあと、念のため黒川に電話をしてみたが彼は出なか  
つた。

それから一日。その日は、白崎と面会する日だった。

待ち合わせた場所は、最近新しくできた質素な造りの喫茶店だった。内装は白色を基調としていて、空間にゆとりを感じられる落ち着いた雰囲気である。

桐谷の住むマンションからは少し離れているため、車で行かなけばならなかつたが、それほど面倒なことでもない。近くの駐車場に停めて、少し歩けばいいだけのことだつた。

その日も暇だつた桐谷は予定された時刻よりもだいぶ早く来て、一人でゆつたりとブラックコーヒーを楽しんでいた。というより、本当は黒川の現状を早く知りたかったのである。

それも、あれ以来何度か黒川に連絡を試みたのだが、すべて空振りに終わつたからだつた。不安はつのる一方である。

桐谷は胸ポケットからタバコを取り出し、テーブルの上にライターを置いた。その内の一本をくわえて火をつける。自宅以外では、久しぶりの一服だつた。

でも、どんな人なんだろうな。

と、黒川のことへの心配以外にも、その白崎との面会に対しても少し楽しみにしている自分もいたことを悟り、思わず苦笑してしまつた。

それから数分、桐谷が一人でタバコにふけつていると不意に後ろから声がした。

「あの、すみません」

反射的に振り返ると、そこには整えられた黒いースーツを身にまといい、清純そうな黒髪をした若い男の姿があつた。

「桐谷さんですか？」

一瞬、きょとんとした表情になつた桐谷だつたが、次の瞬間にはあつと声を上げた。

「……白崎さん？」

「はい。改めまして、白崎竜輔と言います」

彼は会釈すると、そのまま「失礼します」と言つて桐谷と対面に

なる席に座った。店の係員が来ると、彼は「ブラックコーヒーをひ

とつ」と注文する。

「すみません。お忙しいところを……」

「いえ。いつも毎日暇なんで」

と、桐谷は笑った。白崎も微笑んでいたが表情は硬いままだった。

「では、早速お話を伺つてもよろしいでしょうか？」

そう言つて、彼は手帳とペンを取り出した。桐谷は少し緊張した面持ちで領き、白崎の顔に改めて目を向ける。

整つた顔立ちに、その目はすべてを見透かしているかのように鋭い。その態度、雰囲気はまさに名探偵でもやつていそうな、秀才といつ言葉がぴつたりだった。だが、それにしても随分と若々しく見える。

「先週の水曜日は、何をしていましたか？」

彼に見入っていた桐谷は、その言葉で我に返つた。そして、先週の水曜日とはいつだつたかと考え出す。

今日は日曜日、あの電話が金曜日だったので、水曜日は黒川が行方不明になつたと言われた日だった。

桐谷は、いきなりアリバイのことかと思つたが、仕方のないことだと解釈した。黒川の友人であれば、疑われるのは当然だろう。

「一日前、家にいましたね。何せ作家なんですね……」

桐谷は、頭をかきながら苦笑した。これでは疑われても無理はない、と自分の日常の単純さに改めて呆れ果てる。

「一度も外には出でていませんですか？」

桐谷は小さく頷いた。白崎も、聞きながら手帳にペンを走らせている。

「……では、黒川さんと最後に会われた日のことは憶えていますか？」

その質問に、彼の行方不明と何の関係があるのだろうと思ひながら、桐谷は腕組みをして、懸命に記憶を辿つてみる。

思いのほか、その記憶は容易に思い出せた。

「確かに、二ヶ月くらい前だったと思います。街へ買い物に行つていたときに、偶然、彼に会つたんです。」

だが、会つたということは憶えていたが、そのときの記憶は漠然としていてはつきりと内容までを思い出すことはできなかつた。

「それは、何時ごろのことでしたか？あと、そのとき何か話しました？」

「正確にはわかりませんが、昼過ぎだつたと思います。それで、久しぶりに会つたので近くの喫茶店に寄つて、一時間ほど話をしたんです。彼も暇だつたらしいので」

「その喫茶店の名前は、憶えています？」

「いえ、そこまでは……」

と、桐谷は首を横に振る。白崎も、小さく唸るだけだつた。

それからも白崎は黒川についての質問を繰り返し、すでに三十分が経とうとしていた。

「では、次の質問に」

そのとき、不意に携帯電話の着信音が彼の胸の辺りから聞こえた。白崎は携帯電話を開くと、何やら意味深な表情を浮かべる。それから桐谷に「すみません」と言つて電話に出た。

「もしもし、星野さん？どうしました？」

すると白崎は、一瞬はつとした表情になつたかと思うと、次の瞬間には桐谷を睨めつけるような目で見ていた。なんだ？と桐谷が思う間にも、彼は一度携帯電話を耳から離し、再び「すみません」と言つて席を立つた。そのまま、トイレの方へ歩いていく。

桐谷は、彼がトイレに入つていくのを確認すると大きな吐息をついた。タバコを取り出し、火をつける。

三十分も質問を続けられ、桐谷もさすがに参つていた。それに加えて、彼にはしっかりとアリバイがない。実際、黒川の件とは無関係であったが、それでも変なことを言つてしまい、ますます疑

われては困る。そんなことを意識しながら答えていた桐谷は、すでに限界にまで疲れ切っていた。

黒川のことも心配だったが、それ以上にあとびのくらいうちの質問が続くのだろうか、という方が恐ろしかった。

タバコが吸い終わったのとほぼ同時に、白崎はトイレから出てきた。「すみません」と言いながら席へ戻ってくる。

彼に目を向けると、その表情が先ほどまでの硬い印象とは違う、多少の柔らかさを含んでいるように感じた。その変わりように、桐谷は少なからず妙な印象を受ける。

「少し情報が掴めました。彼を叩いたという人の情報が入ったんですね」

それを聞いて、桐谷は期待するように身を乗り出した。疲れてはいたが、黒川が見つかってほしいというのは当然ながら本音であり、一方で、これで質問が終わるかもしれないという淡い期待も寄せていた。

「本当ですか？」

「はい。ですから、早速その人に直接会いに行こうと思いまして」言いながら、彼は席を立つ。桐谷は、質問が終わったことに喜びを感じると同時に、その開放感から、彼について行つてその本人から詳しく話を聞きたいという新たな欲も生まれていた。

「私も、行つていいですか？」

だが、桐谷の気持ちとは裏腹に、彼は「いえ」と手を使って制止した。

「あなたを連れて行くことはできません。これ以上、迷惑はかけられないのです」

「そうですか……」

と、桐谷はあからさまに不服そうな顔をする。

「まあ、そう気を落とさないでください。もし何かあれば、また連絡しますので」

そのとき、白崎ははじめて笑顔で答えた。

桐谷も残念ではあつたが、連絡してくれるのであればと無理に追求はしなかつた。

翌日、早速白崎から連絡が入った。

その日、桐谷は街へ買い物に出ていて、夕方近くに家へ帰ってきたちょうどそのときに電話が鳴っていたのだ。

「明日は、何か予定が入っていますか？」

突然の質問だったが、きっと黒川のことで話があるのだろうと思つていた。もちろん、特に予定はない。

「では、明日は一日中、自宅の方に待機しててはくれませんか？ 急に連絡することがあるかもしないので」

桐谷は落胆した。一日中待機とは、何とも面白みがない。だが、何より黒川のことであり、断るわけにもいかなかつた。

「……わかりました」

桐谷はしぶしぶ承諾する。続いて、白崎が「お願ひします」と言ったかと思うと、次の瞬間には電話が切れていった。

桐谷は、その電話にも多少の違和感を覚えた。どこか急いでいるように感じたのである。わずか、三十秒ほどの対話だつた。

それから夕食を済ませてシャワーを浴び、ベッドに横になつたとき、ふと疑問が浮かんだ。それは、先ほどの白崎との電話のことだつた。

「明日は一日中、自宅の方に待機しててはくれませんか？ 急に連絡することがあるかもしないので」

あるかもというのは、ない可能性をも指している。

例えば、黒川の所在がわかりそうな場合、見つかり次第連絡するということはあるだろう。だが、それをただの友人、つまり桐谷に急いで連絡する必要はないのだ。見つかつた次の日にでも構わない。その友人が、本当に急いで知りたがっている場合ならあり得るかもしれないが、少なくとも桐谷は、早く知りたいことは知りたいが一刻も早くという思いはない。白崎との会話でも、そんなことは言

つていなかつたはずだ。わざわざ家に閉じ込めて、連絡するまで待つていろと強制する必要はどこにもないのだ。

電話での違和感といい、何か妙だなと思う。

だが、白崎も桐谷のことを思つてのことかもしれない。不需要ではあるが、少なくとも非常ではないだろう。白崎の思い込みの可能性もある。

そんな思考にふけつているうちに、いつの間にか眠りこついていた。

朝は、いつもの機械的な行動から始まる。

まず洗面所に行って顔を洗い、歯を磨いてから朝食の準備をする。朝食を取つたら、すぐに食器を洗つてしまおうというのが日課だつた。そして、それが終わるとあとは暇になつてしまつ。

洗濯や買い物は昨日のうちに済ましておいたし、特にやりたいこともない。そこで、昨日はあまり仕事に手がつけられなかつたといふことで隣の部屋に行つた。そこには、仕事をするためのパソコンが一台置いてあり、桐谷はそこに座つた。

桐谷の家は2LDKで、その割に家賃はそれほど高くはないという好都合な、彼にとつても満足のいく家だつた。いつもはリビングルームで食事をしたり、テレビを見たりしていて、残り一つあるうちの一つは寝室、もう一つの部屋は仕事専用として設けていた。

また、桐谷はその仕事だけで暮らしていけるほど、有名な作家だつた。

彼の処女作が応募したところで最優秀賞となつたのが、作家としてのデビューのきっかけだつた。ベストセラーも一本書いたことがあり、雑誌などで取り上げられることが多かつた。

だが、あまり人前に出たくないという理由で、テレビなどの出演にも何度か呼ばれたことがあつたのだが、それらはすべて断つていた。以前はそんなことでそれほど退屈ではなかつたが、最近はあまり調子も乗らず、作品の売れも良いとは言い難くなつてきていた。そのせいで、たまにはテレビにも出演してみたい気にもなるのだが、以前のように呼ばれることもなくなり、ひどく退屈になつてきていたのである。

桐谷はパソコンの電源を入れると、早速作業に取りかかつた。さすが作家ということだけあって、続きを書こうと気合を入れるといづづけば毎近くになつっていた。

一段落したところで立ち上がり、大きく伸びをする。一息つくとそのまま台所へ向かつた。

昨日買つておいた食パン一枚をオーブンで焼き、バターを塗つてパソコンの前に持つていぐ。軽めの昼食だつた。

昼食後、再びパソコンに向かつてキーを叩く。きりのいいところまで終わらせると、ちょうど三時を回つたところだつた。  
なかなか連絡が来ないな、と思いながらベランダに出て外を眺める。

相変わらずの光景。そこで一服し、部屋に戻るとベッドに倒れこんだ。

長い間パソコンと向き合つていたので、目も疲れている。少し休憩するつもりで目を閉じたが、そのまま眠つてしまつた。

日も落ち、すっかり暗くなつたころ。

目が覚めたのは、突然かかつてきた電話のためだつた。

桐谷は半ば朦朧とした意識の中で、その電話に出る。相手が白崎だと名乗ると、わずかに意識が目覚め緊張した。だが、声の雰囲気やイントネーションが今までと少し違つように感じるのは、気のせいだろうか。

「すみません。今すぐ、黒川さんの自宅に行つてくれませんか？」  
時計を見ると、すでに八時を回つていた。

桐谷は、常識では考えられない時間帯ではないだろつかと思つ。  
寝起きのせいか、そんなことは面倒で仕方がなかつた。

「……俺が行くんですか？　あなたが行けばいいじゃないですか」  
「今、手が離せないんですよ。それに少し離れたところにいるので、あなたに行つてもらつた方が断然早いんです」

その言葉は、言い訳にしか聞こえなかつた。そもそも一般人を巻き込むこと 자체、非常識ではないだろつか。

「でも、行方不明なら家にいるはずがないのでは？」

桐谷も必死に抵抗する。だが、彼はそれでも引き下がらうとはし

なかつた。

「黒川さんが家にいるという情報が入ったんですよ。それで一刻も早く、その真偽を確認したいんです。お願ひします」

なぜそこまでこだわるのか、桐谷には理解できなかつた。

「わかりました。行けばいいんですね」

桐谷はそう吐き捨てる、電話を切つた。とにかく面倒だつたが、言つてしまつたものは仕方がないと身支度をはじめる。

昼ならまだしも、こんな夜遅くに頼むなんて失礼だと少し乱暴に玄関のドアを閉めたが、さすがに近所には迷惑をかけられないだろうと思い直し、静かに歩いて駐車場へ向かつた。

エレベーターを降りて外に出ると、夜風が少し冷たかつた。駐車場に停めてある見慣れた黒の軽自動車に乗り込み、エンジンをかける。

黒川の家はここから街の北にある林道を抜けた先にあり、そこは自然の残つたあまり人の住んでいない区域だつた。以前、何度か訪れたことがあつたので憶えている。

桐谷は車を運転しながら、携帯電話で黒川の家に連絡を入れてみた。

その行為自体交通法違反だが、今はそんなことを守らうという気分ではなかつた。黒川が家にいなければ、それこそ無駄足になつてしまつのである。せめて連絡さえつけば、行く意味も出てくる。行方不明になつた理由を聞くことができるからだ。

だが、黒川は電話に出ない。やはり、家にはいないのではないか。携帯電話にも連絡したが、それでも彼は出なかつた。

何とも気が進まないまま、それでも車は黒川の家へ少しずつ近づいていった。

街中を抜け、車通りの少ない林道に入る。電灯も少なくなつてきて、都会の街並みに慣れていた桐谷にとっては、どんどんと闇の中へ吸い込まれていくような感じだつた。

また、桐谷は車を運転している一方で、自分はもう少し固執する

ような性格にはなれないのかと考えていた。

先ほどの電話もそうだったが、今までを振り返っても断りたいとは思っているのだが、結局断りきれずに従ってしまうということは甚だ多かった。それが性格なのだから仕方がない氣もするが、それで後悔した経験は何度もある。日常を変える以前に、まず性格を変えなければいけないかもしない。

そんなことを考えているうちに、車は林道を抜け、少し解放的な道に出ていた。周囲を見渡すと、所々に民家が見当たるようになつてきている。

分岐する道を右に曲がれば、あとは一本道だつたはずだ。おぼろげだつた記憶も、見覚えのある道を進んでいくうちに、どんどんと鮮明になつてくる。間違いない、この道だと確信し、桐谷はなぜか嬉しくなつた。

それから数分。数少ない民家のひとつに、はつきりと記憶に残つている家があつた。電灯ひとつで照らされているその家は、さぞ不気味には見えたが、間違いなく黒川の家だつた。

薄い灰色を主体とした一般的な平家。たいして大きくて見えないが、それでも一人暮らしには十分なほど中は広かつたことを憶えている。また、家の前には車が一台止まつていた。

桐谷と同じ黒の軽自動車で、ずいぶん酷似しているように見える。きっと黒川の車なのだろうが、以前はワゴン車だったので不思議な気分だつた。

そしてもうひとつ、気にかかることがあつた。

それは、部屋の明かりがひとつもついていないことだつた。すでに寝ている可能性もあるが、時刻はまだ九時を回つたところで、一般的に考えてその可能性は低い。それでも車はあるのだからいるはずで……と、色々考えていると混乱しそうになるので、あまり深くは考えないようにした。

車を止め外に出ると、思った以上の寒さに身震いする。都会に比べて気温が低いのはもちろん、障害のないとこを真つ直ぐと吹く

風はもつと冷たかった。

玄関まで歩き、一息置いてからインター ホンを押す。だが、しばらく待つても返答はなかつた。携帯電話に電話しても、やはり出ない。

やはり、いないのではないか。そう思いながらも、何度か「ホール」を繰り返してみる。だが、出るような気配は全くなかった。最後に、黙黙もとでドアノブをひねつてみる。すると、予想外にもそれは回つた。

瞬間、はつとして息を呑む。嫌な予感がするのは、気のせいだろうか。

ゆつくりとドアを引いてみた。金属が擦れるきしんだ音が、辺りの静寂に鳴り響く。中は、真っ暗で何も見えなかつた。

そこで何度も、黒川の名を呼んでみる。だが、叫んでも返事はなく、余計に静けさの印象を強めるだけだつた。

確かめた方がいいのだろうか。桐谷は葛藤していた。第一、中に入ること自体相当なリスクを伴つのだ。不法侵入にもなつてしまつ。だが、その一方で只ならぬ予感がしていたのも事実だつた。夜の九時、全く連絡の取れないこの状況で、ドアが無造作にも開いている。明らかに妙ではないか。

まさか、黒川の身に何か起つたのでは……。

そう考へると、いても立つてもいられなくなつた。

意を決して中に踏み入る。幸い、照明のボタンは近くにあつたので、これで安心だとそのボタンを押した。だが、なぜか照明はつかない。

瞬間、身体が硬直し背筋に冷たいものが走つた。再び、嫌な予感が胸中に宿る。

ただ、偶然にブレーカーが落ちているだけかもしれない。不甲斐なくも、そんな無理な考えに走つてしまつ。だが、そんな単純なことではないという感じは、当の桐谷には嫌なほど伝わつていた。

仕方がないので、ドアを開けたまま微かに入つてくる電灯の光を

頼りに、奥の方へゆっくりと進んでいった。

暗闇の中、桐谷は一步一歩慎重に足を運んでいく。

一寸先は闇ということわざは、つまり今この状況を指しているのだな、と桐谷は思った。何も見えない暗黒の世界で、次の瞬間に一体何が起こるのかなど万人に知るよしもないのだ。

また、思考している他方で、桐谷はある異変を感じはじめていた。それは、奥へ進めば進むほどはつきりとしてくる。

腐臭……。

それは、生臭いを通り越したような強い吐き気をもよおす激烈な臭いだった。その根源さえわからなかつたが、彼の予感は確信に変わりつつあつた。

桐谷は、自分の心臓が大量の血液を全身に送り出していることこ気がついた。

極限の恐怖が、形を持つて自分の未来に訪れる。

それを頭だけではなく、身体でも感じていた桐谷は、引き返したいという気持ちでいっぱいだった。だが、真実を突き止めるべきだと反発の意識も働いている。

逃げ出したいという欲を振り払つて、扉の前まで一気に歩み寄る。ここまで来たからにはやるしかないだろ、と桐谷は自分自身に言い聞かせていた。

扉に手をかける。今にも心臓がはち切れそうな思いの中、氣合を入れてそのままゆっくりと押していく。

中の空気が入つてくると、途端に強烈な臭いが鼻孔を刺激した。

異様なまでに、静まり返つているような気がする。

中をのぞいた瞬間、桐谷はそう思った。では、先ほどまで静かではなかつたのかと言えば、もちろん静かだつた。だが、そのような聴覚の問題ではなく、感覚の部分で今までとは全く違う静寂の中にいるという錯覚を生み出していた。

勇気を出して、一步、二歩と踏み出していく。その度に強い恐怖が押し寄せてきて、半身まで浸かつた泥水の中を進むように、思う

よつに身体が前に進まない。それでも、懸命に前へと踏み出していく。

すると、足の先に何かが当たった。

身体が敏感に反応して、咄嗟に足を引っ込める。恐怖のあまり、そのままの姿勢で数秒間硬直していた。はつと我に返り、そのものを凝視する。だが、暗闇のせいで黒い塊にしか見えなかつた。

生理的におまり手に取りたくない。それが本音だつたが、身体は姿勢を降ろすこの方を恐れていた。

やむを得ず、手を伸ばす。

ゆつたりとした、永遠にも感じられそうな時間が自分の中を流れていだ。そして、心臓の鼓動も異様なまでにゆっくりと感じられた。

それは、妙な感触だつた。もつと硬い金属か何かだと思っていたが、柔らかくそして冷たかつた。だが、それはぬいぐるみなどとの感触とはまた違い、触つたことはあるのだが、それが何だったのか思い出せない。

結局何もわからないまま、そのものを掴む。

瞬間、全身に鳥肌が立ち、つかんでいた手が勝手に離れた。手が拒絶したのである。苦手な昆虫、例えば蜘蛛が知らぬ間に手の上にいたときのような、そんな反応、また気持ち悪さだつた。

気を取り直そうと、深呼吸をする。ものを取るという単純な行為も、場合によつてはこんなにも大変になるのか、と桐谷は痛感した。

嫌々ながらも、もう一度つかみ自分の顔の前に持つていく。心臓の鼓動は、先ほどとは打つて変わつて速まつていた。

驚愕、というより、それは困惑に近い状態だつた。

そのものが、なぜここにあるのか。どうしてこうなつていいのか。一瞬では判断しきれなかつた。数秒、数分、どれほどの時間が流れただなどわかるはずもなく、ただ固まつていることしかできなかつた。体が動かない、何もできない、時間さえも止まつたような、空白の

時間が流れる。

やがて、それが何であるかを認識したとき、身体の内側から溢れんばかりの恐怖が押し寄せてきた。自分で制御できないような、絶対的な恐怖に支配される。

気がつけば、桐谷は叫びながら、それを闇の中へ思い切り投げ捨てていた。

それは花瓶か何かに当たったようで、物が割れ、水が飛び散るという耳をつんざくような不快音が轟く。だが、桐谷はそんなことなど気にも留めず、そのまま振り返ると玄関に向かって走り出した。外に出ると、一旦散に車へ駆け込み、急いでエンジンをかけ発進させる。

そのすべてが、無意識の行動によるものだった。

帰り道も、長く果てしなかったように感じた。

それは、彼の意識が通常とは全く異なったところにあつたからかもしれない。だが、そのように自分を客観的に見ることもできなかつた桐谷は、その長い道のりをただ呆然と進み続けるだけだつた。やがて家に帰つた桐谷は、自分の意思とはほぼ関係なく洗面所へ向かつた。そして、住み着いてしまつた恐怖を洗い落とそうというふうに、懸命に手を洗う。

未だに頭の中はぼうつとしていて、思考することさえままならなかつた。

ふらふらとした足取りで、そのままベッドに倒れこむ。

それはかつて経験したことのない出来事、というより桐谷はその非常事態に対しても、完全に無力だつた。普通、警察に通報するはずのことが、脳裏にそんな考えは生まれてこない。これが夢であつてくれ、と願うだけだつた。思い出をうとするだけで、激しい頭痛が襲つてくる。

眠れない。

桐谷は一晩中、その現実の悪夢にうなされていた。

何やら外が騒がしい。そう思つた。

はつとして、ベッドから飛び起きる。時刻を確認すると、三時半だった。

一瞬、それが昼なのか夜なのか判断できなかつたが、周囲を見渡して明らかに昼の明るさだと氣付く。昨日は全く寝付けず、結局夜が明けてから眠つたのである。

一日を無駄にしてしまつた。そう思いながら、洗面所へ足を運ぶ。桐谷は、こんなことは久しぶりだと高校時代を思い出した。友人と一夜語り合つたとき、好きな人に振られた悲しみに眠れなかつたとき、テレビゲームに夢中になつて徹夜したとき、よく夕方近くに起きてしまい、一日を無駄にしたと嘆いたことを憶えている。あのころは楽しかつたな、と桐谷はほのぼの思った。

洗面所で顔を洗つていると、ふと、鏡に赤い液体が付着していることに気がついた。

突然、脳裏に昨夜の出来事が蘇つた。

瞬間、吐きそうになる口を押さえ、壁にもたれかかる。そのままずるずると床に落ちていき、膝をつくなづな格好になつた。

夢ではなかつた。

改めてそう実感する。身体の内側からは絶望が押し寄せると共に虚脱感が、それでもう駄目だという思想が生まれた。

あの現実が、自分の将来に多大な支障を来たす気がしてならない。皮肉にも、そんな考えを取ることしかできなかつた。

桐谷はゆっくり立ち上がると、再びベッドへ向かつて歩き出した。何も考えたくない。

それ一心で、とにかくそのためには寝るしかないと思つたのである。

そのとき、不意にもチャイムが鳴つた。

突然のこともあり、心臓が跳ね上がりそうになる。というより、嫌な気がしてならなかつた。

一瞬、居留守を使おうかと迷つたが、それではなお怪しいことになるので、嫌々ながらも玄関へ向かう。

扉を開けると、そこには一人の男が立つていた。

二人は、警察手帳を示す。

それを見せられた途端、彼は微かな希望さえも打ち砕かれたような気分になつた。

「警視庁刑事部、捜査一課の野田です」

「同じく、藤森です」

そう名乗つて、二人は桐谷を概観する。桐谷もまた、無意識のうちに一人を観察していた。

野田は優しそうな顔つきだつたが、どこか引き締まつた感じのある四十年代前半の男で、藤森は野田と比べると少しがつちりとした体格で、多少若そうに見えた。背丈は、一人ともあまり変わらない。

「桐谷耕介さんですね」

野田が確認のためか、そう聞く。桐谷は落ち着かない表情で頷いた。

「……寝起きですか？」

突拍子もない質問に、桐谷は少し困惑する。

「え？　あ、はい。昨日はあまり寝付けなかつたので……」

すると、「そうでしたか」と野田は言いながら、横目で藤森と目を合わせると、二人は何か納得するように頷いた。

桐谷も、その行動にはひどく動搖したが、とにかく何もせずに帰つてくれるることを祈りながら、できる限りの平然を装う。

「それで、警察が一体何の用なんですか？」

いかにも何も知らないというような口振りで、桐谷は聞いてみると、二人の表情が急に深刻になる。

「……それが、あなたの友人である黒川隼人さんが……昨日、亡くなりました」

数秒間の沈黙。

「え、隼人が？ それは本当ですか？」

だが、内心ではやはりと桐谷は納得した。昨日のあれは、明らかに黒川のものだつたと確信していたのである。

「そう、あれは手だつた。」

桐谷は、無意識のうちにその光景を頭の中に蘇らせていた。

手首から先を無残にも切り落とされた人間の手。そして、それを握り締めているのもまた人間の手、つまり自分の手だつた。

二つの手は、似てゐるようで似えない。それらは、生と死という全く異なつた環境に晒されているのだ。その両極端の手が、今自分の目の前に存在する。

そう思つた途端に、何も考へられなくなつていた。その理解し難い光景に、すべてを投げ出したくなつたのだ。

自分もいすれ、こうなる運命ではないのか。そんなふうにさえ思つた。

「どうしました？」

その言葉で、はつと我に返つた。桐谷は、自分がとても恐ろしいことを考へていたことに愕然とする。

確かに、あれは黒川の手だつた。そして、そのときは現実を見る余裕がなかつたのである。だが、その現実 つまり黒川が死んだということを改めて人の口から告げられると、急に心が痛くなつてくる。

いつの間にか、桐谷の目には涙が滲んでいた。

「いえ。少し悲しくなつてしまつて……」

桐谷は手で目元を拭つてから、そう言つた。

また、それは演技でも何でもない本心からによるものだつたが、それを彼らがどうかは受け止めるかはわからない。それが不安だつた。

「それで、何か心当たりはありませんか？」

厳しい質問だつた。一体、何と答えたらしいのだろうか。素直に

言つべきか、それとも嘘をつくのか。ふたつにひとつ、やはり素直に言つべきだつたのかもしれない。だが、そのときの桐谷は考えるよりも先に口が動いていた。

「いえ……。何も思い当たることはありますん

言い終えたあとに、しまつたと思つ。だが、それはもう後の祭り。その表情が出てしまつたのか、一人はいぶかしげな目で桐谷を見る。すると、野田の方が口を開いた。

「あなたが乗つてゐる車は、下の駐車場にあるナンバーが2478の黒い軽自動車ですよね？」

「……はい」

まさかとは思つた。だが、ナンバーさえも確認済みとなると、やはりそれが現実なのだらうと思つ。案外、人は知らぬ間に色々と見ているものである。

「その車が、昨日の夜九時過ぎに黒川さんの家の前に止まつっていた情報があるのですが……。それでも、何も心当たりはないど」

「

桐谷は、押し黙つてしまつた。もう嘘を通すことはできない。だが、今から本当のことと言つたとして、彼らが信じてくれるのどうか。

「では、その車にはあなたが乗つていたのですね？」

「はい……すみません」

桐谷はつづむき、唇を噛み締めた。嘘をついてしまつたことを改めて後悔する。すると、野田の表情から微かに安堵の色が見えた。

それを見て、桐谷は口惜しくなる。これではまるで、自分が犯人のようではないかと。

「あなたが、やつたんですか？」

野田は優しい声で言つた。今こそ核心に触れるべきだと思つたのだろう。だが、その質問には断じて首を縦に振る必要も理由もない。自分がどんなに怪しく映つたとしても、現実にはやっていないのだから無罪だ。そう思うと、少し楽になつた。

「いえ、私はやつていません。そこにいたのは事実ですけど」

彼らの目には、桐谷が開き直ったようにしか見えなかつたのかも  
しない。だが、それでも構わなかつた。今は、自分が無罪だとい  
うことを証明するしかないのだ。

「では、なぜ嘘をついたんです？」

その態度の変調、ふりに少し面倒さを感じたのか、今度は藤森が不  
機嫌そうに聞いてきた。

「それは、その……」

桐谷は言い返す言葉も見つからず、そのまま口籠つてしまつ。正  
直に言えば、なぜ嘘をついてしまつたのかも彼自身よくわかつてい  
なかつた。おそらく、無意識のうちに自分に疑いがかけられること  
を恐れていたのだろう。

「すみません、もう少し大きな声でお願いします。うまく聞き取れ  
ないので」

二人の間に、むつとするような居心地の悪い沈黙が続く。そ  
れを嫌つたのは、一人を見ていた野田の方だった。

「……まあ、藤森巡査も少し落ち着いてください。詳しくは、署の方で聞くことにしますから。いいですね？」

野田がうまく丸め込んだような形になつた。藤森は、仕方なしと  
いう感じで溜め息をつく。それを確認するか否か、野田は桐谷の方  
へと向き直つた。

「桐谷さん。署の方で詳しいことを聞かせてもらいます」「  
わかりました……」

ここまでこじれたのだから、もはや反論の術はない。  
事情聴取を受けるのははじめてだつたが、きっと正直に話せばわ  
かってくれるだろうと桐谷は期待していた。

野田から詳しい事件内容を聞くと、黒川一人ではなく四人も殺さ  
れていたとのことだつた。そのうちの一人は彼の両親であり、もう  
一人は彼の友人だと思われているが、その友人の身元だけはまだ特

定できていならしい。

ということは、と思う。桐谷が見た手は、もしかすると他の人間の手だったのかもしれないのだ。だが、そんな気味の悪い考えはしたくなかったので、それ以上は考えないようにした。

黒川は一人暮らしであるから、その日は偶然両親と友人が遊びに来ていて、一緒に殺されたと見て調査しているようだつた。

またその友人が特定できないのも、その死体と黒川隼人の死体だけがバラバラに切り離されていて、家中のあちこちに放置されたからであつた。

その上、顔の部分は無残にも切り刻まれ、すでに誰だと判断できる状態ではないらしい。それあって、はじめは黒川隼人も本人かどうかと悩まれたが、色々調べた結果彼で間違いないだろうと判断された。

また、野田によると犯人はまだ断定できていないとのことだつたが、唯一指紋が発見され、加えて彼の車を目撃したという情報から、桐谷を犯人だと見ていたことに間違いはなさそうだつた。

事情聴取がはじまつて、桐谷がすべてを話した次の日。

彼らも桐谷の話を信じ込んだわけではないが、それでも白崎竜輔という人物については当然調べてみる。彼らも聞いたことがあるなどと言つていたので、きっと有名な探偵なのだろうと桐谷は楽観的に考えていた。

だが、そんな考えもすぐに打ち崩されたのである。

「そんな……」

それは、藤森が持つてきた情報に対する反応だつた。

「はい。白崎竜輔という私立探偵は、確かに存在しました。テレビにも何度も出演経験のある比較的有名な探偵です。しかし、北海道ですよ？」それにここ一年間は、一度も道外に出でないことも確認されました」

有名な探偵だというのは間違つていなかつたが、他が明らかにお

かしい。だが、藤森はその情報に間違いはないと言っていた。

「そんな……でも、俺は確かに会ったんだ！ 信じてくれ！」

桐谷は叫んだが、「そう言われても」と野田は頭をかくだけで、藤森も腕組みをしながら「さすがに信じられませんよね」などと言つていた。

まるで理解できない。そう思つた。

きっと、藤森が持つてきた情報は誤つていたんだ。自分が会つたのは、確かに白崎竜輔なんだ。桐谷は必死になつて自分に言い聞かせる。だが、藤森はそんな淡い期待をも吹き飛ばす決定的な情報をも持つていた。

「あと、あなたは彼が二十代か、悪くて三十代前半と言つていましたよね？」

「はい、そう見えましたので……」

「では、この写真を見てください。右端に写つているのが白崎探偵です」

そう言つて、藤森は一枚の写真を取り出す。

それがまず野田の手に移ると、彼は眉間にしわを寄せて「なるほど」と呟いた。そして、桐谷にその写真が回つてくる。

桐谷は、何か嫌なものが喉に込み上げてくるのを感じながらも、恐る恐るその写真に写つている白崎を見た。

信じられない。それが率直な感想だった。

それは、自分の知つていた白崎竜輔ではなかつたのだ。明らかに四十代、良くて三十代後半がいいところ。誰が見ても決して二十代には見えないだろう。というより、顔からして全く違つていた。それはあの鋭い目つきを持つた青年などではなく、優しそうな目をした中年男だったのである。

「どうですか？ 彼に間違いありませんか？」

「……ええ、全く違います」

桐谷の中で何かが弾け崩れ落ちていった。そして、混乱にも似た感情が生まれてくる。

なぜだ？

桐谷は自問した。心臓の鼓動は速まり、手足が勝手に震える。

それが自分の置かれている状況に対しての不安なのか、あの日出会った見知らぬ男への恐怖心なのか、あるいは他の何かに対するものなのか、桐谷自身わかつていなかつたが、少なくとも理解しようとしてもできない絶対的な事実に対し、そのすべてを拒否したかった。

「では、あなたが会つた人は一体誰だったなんですか？」

藤森が、嫌みのように聞いてくる。

「……わかりません」

そう答えるしかできなかつた。一人の警察官は、じつと桐谷を見つめている。

「あなたは、嘘をついたのではないですか？」

今までずつと言つたかつたことを、ついに我慢が忍きたのか藤森は明言した。

「違う！ 嘘じゃない！」

桐谷も、当然のように反論する。だが、それ以上言葉が出てこない。

「やはり、嘘なんですね？」

言葉が詰まる。だが、桐谷はその言葉を無理やり無視して、一体あの人は誰だったのかと考えた。

いや……と、桐谷は思い直した。そして、今までの出来事の流れを頭の中で整理し、ゆっくりと反芻する。

そのとき、やつと理解した。

「どうか……騙されたんだ」

導き出された結論。桐谷は咳いて、苦笑する。

そして、自分のふがいなさに思わず机の上へ拳を打ちつけた。拳がびりびりと痺れるように痛い。だが、そんなことはすでに意識とは無関係だった。

「そうですね」

と、野田が彼の言葉を聞き入れる。

「あなたの話を信じるのならば、あなたは騙されたところだと思います」

だが、桐谷はその言葉から同情を感じられなかつた。やつと、まだ疑つているのだろうと失望する。だが、そつ簡単にあきらめるわけにはいかない。

「その、あなたの話を信じるなら、とこつまに方はやめてくませんか。それではまるで……」

「気持ちはわかります」

今度は、藤森がなだめるよつにいつた。

「しかし、我々の見解としては、あなたがやつたとしか考えられないんですよ。わかりますね？」

「はい……」

そんなことは、わかつていた。だが事実は違う。それを理解してもらいたいのだが、証明できるものが何もない。

「第一、指紋も出てしまつていてる」

「だからそれは……」

「わかつています。しかし、それが現実なんです。もうやめてください」

桐谷は、ついに何も言えなくなつてしまつた。

帰り道。桐谷は、一人絶望にふけっていた。  
このままで、まずい……。

そのことが、脳裏の中で延々と渦巻いている。そして、それが最悪の事態を想定する思考へと変わっていくのである。

つまり、それは逮捕だった。

それだけは、避けなければならない。だが、今日のやり取りを思い出すとその希望もどんどんと薄れしていく。

どうすれば……。

桐谷は、再び今まで起こった出来事を振り返っていた。

今考えれば、はじめから妙だつたのだ。

突然かかってきた電話。私立探偵の白崎竜輔と名乗る男。そして、黒川隼人が行方不明になつたという通告。

普通なら、誰かが行方不明になつた場合は警察に通報する。だが、警察はそれほど本気では捜そうとはしない、またはずっと捜してくれるわけではない。そうなれば私立探偵に頼むこともあるだろう。

そのことに特に問題はない。だが、たとえ私立探偵に頼んだとしても、そして仮にその捜査の一環として彼の友人である桐谷に連絡することがあったとしても、なぜ直接会う必要があつたのか。

桐谷は電話の中で、彼が行方不明になつたという事実を知らなかつたと言つてはいなかつたが、少なくとも会話の流れから察して理解できただけだった。それなら、それでこれ以上話すこともないはずである。

だが、彼は面会することを申し出た。そして桐谷も少しの疑いこそあつたが、特に気にもせずにその申し出に乗つてしまつたのだ。これは、完全に桐谷のミスだった。

そして、面会してからの質問の数々。これが、行方不明に一体何

の関係があるのかといふと、全くないのである。

妙な点は、他にもいくつも存在していた。

一日中家に待機し、夜に黒川の家に行け、などという暴言とも

言える命令が、その代表的な例である。

だが、桐谷はその疑いを確信には変えられなかつた。

そして、騙されたのである。

桐谷は、そんな現実と自分の無力さに落胆しながら到着した家の  
中へと入つた。

「どうして……」

桐谷はそう嘆いて溜め息をつくと、シャワーを浴びることにした。  
悪いものを洗い流して、すっきりしたかつたからである。

だが、そもそもいかなかつた。シャワーを浴びている間、桐谷はず  
つと消極的なことばかり考え、何度も落ち込んでいたのである。

シャワーを浴び終えて身体を拭き、バスタオル一枚という格好で  
居間に戻ると、桐谷は隣の部屋 つまり、仕事の部屋に入つてパ  
ソコンの電源を入れた。

桐谷はシャワー中のことあつてか、最悪の事態を想定して、その  
ことについて調べたかつたのである。

桐谷は、いつも使つてゐる検索サイトを開く。

まずは『殺人罪』と検索した。

何十万件と検索結果が出る中、その上のサイトから順に最もわか  
りやすそうなサイトを探していく。

良さそうなサイトが見つかり、その中の法定刑といつ項目を見て  
みる。

そこには、『法定刑は死刑、無期懲役、又は五年以上の有期懲役  
のいずれか』とあつた。

法定刑とは、ある犯罪に対しても科されるべきものとして、法令が罰  
則により規定している刑罰のことである。

桐谷はその死刑という文字を見た途端、目眩を起こしそうになつ  
た。それが、自分に関係することがあるかもしないと思うと、恐

ろしくて仕方がない。

だが、それを無視するわけにもいかなかつた。

桐谷は心を入れ替えて、次に『死刑』と検索する。サイトを開くと、その死刑に関する情報のうちその歴史や目的などについて書いてある部分は飛ばして、その量刑基準についての項目を探した。

それが今の桐谷にとって、最も知りたい情報だつたのである。そこには、日本が死刑判決を宣告する際には、現在では永山基準というのを参考にしている場合が多いと書かれていた。そして、その基準として次の九つの項目が提示されていた。

- 一、犯罪の性質
- 二、犯行の動機
- 三、犯行態様、特に殺害方法の執拗性、残虐性
- 四、結果の重大性、特に殺害された被害者の数
- 五、遺族の被害感情
- 六、社会的影響
- 七、犯人の年齢
- 八、前科
- 九、犯行後の情状

桐谷はその個々の項目に対しても詳しく調べてみたが、一般人である彼にはしつかり理解したという確信は持てない。だが、それでも特に三や四の項目に関しては、十分死刑に値するものであるということくらいは理解できた。

桐谷は身震いした。もし、本当に逮捕ということになってしまえば、そしてその最悪の事態は死刑ということになる可能性を秘めているのだ。

「そんな馬鹿なことがあるか……」

そう自分に言い聞かせ、パソコンの電源を切る。

居間に戻つて一服し、洗面所に行つて歯を磨く。用を足したあと、そのまま寝室に行きベッドに横になつた。

早く寝てしまおう。

そうすることで、少しでも現実から逃避したかつたのである。だが、彼はその夜も寝付けなかつた。

理由はきっと、その恐怖によるものだらう。

桐谷は、自分が無罪だという絶対的な事実がありながらも、その証拠がなく、逆に犯人だと思われる証拠しか見つからないというもうひとつ的事実を前にしては、前者の事実など、単なる気休めにしか感じられなかつたのだ。

そして、次の日……。

その日も桐谷は署に呼び出され、再び事情聴取という形になつてはいたが、明らかに彼の自白を待つてゐるような態度に変わつていだ。だが、確かに藤森はそんな態度だったが、野田だけは昨日とは少し違つた雰囲気を見せていた。

「まずいですね」

藤森が桐谷に白状させようとしているとき、突然、野田が何か考えるように呟いた。二人は、彼の方に振り向く。

「何が、まずいのですか？」

と、藤森が当然のように聞いた。

「こままで、桐谷さんが犯人ということになつてしまします」

一瞬の沈黙のあと、「え？」と藤森は目を丸くした。桐谷も、それが自分の立場を有利にする発言だとは理解できたが、彼の口からそんな言葉が出るとは微塵も思つてもいなかつたので、その予想外の発言に少し困惑していた。

「……野田警部。警部は、彼の話を信じているんですか？」

藤森は、両手を大きく広げて抗議した。

「現に、彼は白崎竜輔と会つたという嘘をついている。私たちとはじめて会つたときにも、嘘をつきました。それに、その話 자체あま

りに不自然ではありませんか？ 私には到底信じられません

すると野田は、まるで独り言のように静かに言った。

「私もはじめ、そう思っていた。しかし、昨日よく考えて、わかつたんだ」

「何が、わかつたんですか？」

「桐谷さんが、犯人ではないという可能性が高いということが……」

藤森は無言になる。野田は、座つていた椅子からゆっくりと腰を上げた。

「なぜ、彼は白崎竜輔に会つたという嘘をついたと思つ？」

野田が、窓の外を見ながらそう問う。いつのまにか、彼は敬語ではなくなつていた。

「それは、自分の罪を隠すためではないかと……」

「では、わざわざ北海道にいる人間を。それに、年齢も間違えて答えたのは、なぜだと思う？」

藤森はその質問に対し、あらかじめ用意しておいた答えを見るよつの感じですらすらと説明をはじめた。

「おそらく、彼は衝動的に黒川を殺してしまつたんだと思います。だから、考える余裕があまりなかつた。そこで、どうにかして考えようとしたときに、テレビか他の何らかの形で白崎竜輔という人物を知つた、または知つていた。ある程度有名な方ですから、知ることに難はなかつたと思います。しかし、住んでいる場所、年齢までは知らなかつたので、そこは適当に言つたんでしょう。あとは適当にこじつけて、指紋が残つてしまつたということにすればいいんです」

「……なるほど。しかし、それでは妙だと思わないのか？」

藤森は、何がというような眼差しで彼を見た。

「なぜ、彼は指紋を残したんだ？」

瞬間、藤森はあつと声を上げる。野田は振り向くと満足そうに頷いた。

「そうだ。もし、彼が本当に黒川を衝動的に殺してしまい、全く指

紋も拭かずに帰ってしまったのなら、私もそれで疑わなかつた。しかし、指紋が残っているのはごく一部のところだけだ。わざわざその指紋だけを拭かず、なおかつそれを知つていながら帰るなんて、普通では考えられない。指紋を残さないのなら全部拭くはず、拭き忘れなら、彼はそんな発言はしない、というより知らないはずなんだ。それに、指紋については彼の話に矛盾はない

なるほど、と藤森は納得した。桐谷はといつと、一人のやり取りをただ黙つて見ているだけだった。

「それに、どうも私には彼が嘘をついているようには見えないんだよ。長年の勘という奴かな。それに彼は一般人だ。こちらの知識もあまり詳しくはないはず。それなら、騙されても無理はないだろう。まあ、詐欺と似たようなものかもしれないな」

藤森は、感心するように野田を見た。

事件の状況をしつかりと把握し理解していなければ、彼のようないくつかの判断は下せない。藤森は自分の甘さを、そして彼との警察官としての差を改めて感じた。

だが、そうなれば当然のようにひとつつの疑問が浮かんでくる。

「では、一体誰が真犯人なんでしょうか？」

「そこなんだ……」

野田は腕を組んで、考えるように唸つた。

「桐谷さん、そのことで何か心当たりはないですか？」

藤森が聞いてくる。先ほどまで白状させようとしていた彼が、違うとわかれば急に態度を変えてきたことに桐谷は少し気分が悪くなつた。だが、疑いが晴れたことには満足している。当然のことながら。

「いえ、ないです……」

特に思い当たることもなかつたので、そのまま素直に答えた。

「やはり、まことに」

野田が再び呟く。藤森は「そうですね」と相槌を打つた。

「いや、そういうことではない。桐谷さんのことだ」

「私のことですか？」

桐谷は、意味がわからないといつぱりに首をかしげた。

「そうです。私は、もはやあなたを疑ってはいません。藤森巡査もそうだと思います。しかし、上の連中はそうはいかないでしょう。もし、真犯人が見つからないとなれば、あなたを犯人にする、というより必然的になつてしまふ恐れがあります。指紋を残してそう発言したのも、すべて自分の罪から逃れるために行つたことなどということになつてね」

「そんな……。無罪の人間を裁くなんて、それでも日本を守る警察なんですか？」

「事件が未解決のまま終わるよりはましなんです。現実とは、ひどいものなんですよ。それに、その可能性がないわけではないでしょう？だから、そう言つても何の支障もない。むしろ、他に誰もないのだからそれが正しくなつてしまふ。今だつて、本当は私たちの方が騙されているかもしれない。そういうものなんです」

桐谷はその事実に幻滅した。今や日本の警察、いや社会は、すでに自分の思い描いていたものとは大きく異なつているのだろう。だが、そうだとしても本当にそこまでやるのだろうか。桐谷は疑問に思つたが、彼は警察としてそのことはよく理解しているはずだから、間違いないのだろうと思つた。

「しかし、あなたが無罪だという証拠があれば、それはもちろん無罪になります。しかし、私たちが今まで調べたところでそれは見つかりませんでした。むしろ、あなたが犯人だという証拠しか出てきません。先ほどの指紋を残したという不可解な事実があつたとしても、それが犯行の手口と言われば……」

そこまで言い終えたところで、桐谷は昨日まではないにしても、未だに自分の立場が危ういということを改めて思い知つた。

「じゃあ、もっと調べて、早く無罪の証拠を探してください！」

「当然、そのつもりです。しかし、そう簡単にはいかないと思います。私たちも手は尽くしたつもりでしたから。その結果、あなたが

犯人だと思つたんですよ」

と、野田は困つた顔をした。

「じゃあ、どうすれば……」

「もちろん、証拠も探しします。しかし、それが薄いとなると真犯人を探す方が早いかもしませんね。あなたは、その白崎竜輔と名乗る男に会つたんですね。彼が事件に関係していることは間違いないですから、その男を探しましよう。顔は憶えてますか?」

「ほんやりとなら……」

「ではまず、その男の似顔絵でも書いてもらいましょうか。あとで似顔絵技能員の方に来てもらいますから、憶えている範囲ができる限り答えてくださいね」

そう言つて野田が藤森に田で合図を送ると、彼は領き部屋を出ていった。一人になつたところで、野田が再び口を開く。

「では、もう一度詳しくお話を聞かせてもらいますか。話している途中にでも、何か思い出したことがあつたら、遠慮なくいつてくださいね」

それから、三日たつた。

だが、依然として桐谷が無罪だという証拠は見つからず、真犯人の手掛かりも皆無だつた。似顔絵は完成し、桐谷なりに手応えはあつたのだが一向に情報は入つてこない。前科者のリストも調べたらしいが、特に怪しい人物はいなかつたとのことだった。

署の取調室には、野田と藤森の一人だけが残つていた。

「それにしても、あのときは言い過ぎたかな」

野田が、タバコに火をつけながらそつ痛言する。

「言い過ぎですか?」

「ああ。この間、桐谷さんに言つたことだよ。私たちは疑つていなが、上の連中はそうはいかない。そして現実はひどいものだ、と私は言つたよな。しかし、たとえ上の連中としても、無実の人間を裁くことはできないし、むしろ許されない。現実としても、実際に

無実だとわかっている人間を無理に裁くわけがないんだ。しかし、私は彼らをまるで悪人のように扱ってしまった。無礼極まりないよ」「しかし、それで桐谷さんが自分の立場に危機感を抱いてくれたんですから、大丈夫ですよ」

藤森がそう言つと、野田は少し微笑んだ。

「まあ、そういうことにしておくか」

だが、またすぐに表情が真剣になる。

「しかし、このままでは本当に桐谷さんが犯人ということになつてしまふな」

「さすがにここまで手がかりがないと、厳しいですよね」

「ああ。しかし、その白崎と名乗る男は必ずどこかに身を潜めているはずなんだ」

「海外に逃げたかもしだれませんよ？」

いや、と野田は否定した。

「その可能性は低いな。犯人は、現場で金銭の方も漁つているんだ。つまり、奴はそれほど裕福ではないということになる。裕福なら、黒川を殺した時点でいつ誰が来るかわからない状況の中、指紋やその他の証拠も残さないという作業もある中で、そんな行動を取る必要はないだろう？ 危険過ぎる。そして、そこで得た金も黒川の家の事情からして、大した額にはならないはず。そんな金で、わざわざ仕事をやめて海外に行くことは自殺行為になつてしまふ。必ず日本の中、いや都内にいると思う」

「しかし、それが正しいとは言い切れないのでは？」

「ああ、確かに言い切れない。しかし仮に海外へ逃げられたとなれば、ひととしても打つ手がなくなってしまう。今は、私たちのできる限りの範囲で捜査を進めていくべきなんだ」

すると藤森は、それで十分だという感じで頷いた。

「そうですね。そう考えないとやつていけませんよね。今回の事件の解決は、なかなか難題だと思いますが、期待していますよ、野田

「ああ。必ず、真犯人を捕まえてみせるわ」

桐谷はベッドに倒れこむと溜め息をついた。疑いが晴れたことはいいが、まだ犯人として逮捕されないと決まったわけではない。だが、たとえ逮捕されたとしても、最悪の事態つまり、死刑だけは逃れられる可能性が高くなつただらうと、安堵しているのも事実だつた。

「そう言えば、あの電話からだつたんだよな……」

と、桐谷はまた過去を振り返っていた。

すべては、好奇心からはじつた。毎日の退屈を少しでも晴らしててくれると思い、行動したのである。

不覚だつた。

そして何度も思ったことだが、もう少しは警戒できたのではないが、と桐谷は自分の未熟さを悔やみ、そして思い知つた。

桐谷は、自分はもう立派な大人だと思っていたのである。だが、事実は違つていた。警察のことはあるか、社会の仕組み、いや、身の回りのことについても全く知らないではないか。作家という仕事のせいにはしないが、あまりにも無関心で自分勝手だつたのである。それが仇となつてしまつた。

「これから、どうなつてしまふんだ？」

桐谷は、天井に向かつて呟いた。

どこかで、今の状況から脱することができた機会はなかつたのか。変えられるわけのない過去を色々とシミュレートしている自分が、そんな無駄なことを考えてしまつ自分が、ひどく情けなく感じた。

そのとき、白崎のある言葉を思い出した。

「もしもし、星野さん？　どうしました？」

桐谷は、はつとしてベッドから飛び起きる。

星野……。

確かに白崎はそう言つていた。もしそれが偽名ではなかつたとしら、いや、あの感じは、偽名を使つたようには見えなかつた。あま

りにも自然な対応だつたのだ。

もしかすると、犯人は見つかるかもしれない。

桐谷は急いで受話器を取ると、野田に連絡を入れた。

翌日署に行くと、野田と藤森の他に一人の若い女性が一緒にいた。背は、一人より少し低いくらいだ。

よく見ると、髪は肩にかかるくらいで整った顔立ちをしている。「二十代なのは間違いなさそうで、桐谷は、綺麗な人だなと思つた。

「こちら、婦警の澤田皐月さんです」

桐谷はその名前に聞き覚えがある気がしたが、彼女が「はじめまして」と挨拶してきたので、気のせいだらうと解釈した。

「彼女、黒川隼人の古い友人でしてね。今まで他の捜査に当たつていたんですが、今日からは我々と一緒に行動することになります。あと、事件の概要は伝えましたので」

彼女が再び会釈したところで、野田が話を切り出す。

「それで、昨日の電話であつた星野という人のことですが……」「何かわかりました?」

「いえ……。しかし、その情報は大きいと思います。おそらく、それは偽名ではないでしょから」「なぜですか?」

藤森が聞いた。

「彼は、星野からの電話を出る直前に表情を曇らせたそうです。ということは、あらかじめ連絡すると伝えていなかつた可能性が高くなります。つまり、突然の電話だつたんです。そして、彼は迷いもなく星野さんと言つた。そして、そのときもはつとした表情で桐谷さんを見たそうです。それなら、思わず星野という名前を口に出してしまい、しまつたと思つたことが考えられます。そのあとトイレに行つたのは、話の内容を聞かれたくなかったからでしょう」

「はじめから、星野という偽名をその男に教えていたことは考えら

でも、と今度は澤田が言つた。

れませんか？ それなら、自然に口に出しても不思議じゃないですね？ はつとしたのも、たまたまだと考えられますし

そうですね、と野田は賛同する。

「その可能性もあります。しかし、そうだと言つてしまえば、一向に犯人には辿り着けません。今は、それが本名だと考えていくしかありません。犯人の手掛かりとなる大きな情報ですからね」

澤田も、まだ不服なのだろうが頷いた。

「それならきっと、その星野という人は比較的地位の高い人物でしょうね。大きいか小さいかはわかりませんが、どこかの会社の社長クラスでしょうか？」

と、藤森は新たな手掛かりを得たためか少しやる気が出たようだつた。

「それはまだわかりませんが…… そうですね、まずはその辺りから調べていくことにしましょう。もしかすると、暴力団関係の類もあるかもしれませんね」

野田がそう付け加えると、澤田は少し戸惑ったような表情になる。「暴力団……ですか？」

「ええ。動機を考えると、個人的なものも考えられますが、複数の人間が絡んでいるとなると、何かの団体にとつて、不都合が生じたことによる殺人も考えられます」

「なるほど。黒川隼人が、何か極秘の情報を握つてしまつた。もしくはどこかの団体に対して、何らかの裏切り行為があつたということですか？」

「そうです。そちらの可能性も考えて、調べていきましょう」

すると、野田は桐谷へと振り向く。

「桐谷さん。必ず、真犯人を捕まえてみせます」

桐谷は、その言葉に少なからず安心した。

星野という名字の人は、都内でも限りない数に上ったので、各警察署に協力してもらつて調査は進められていた。その間に野田たちは新たな手がかりを探していかなければならぬ。

三人は今車に乗つっていて、ある場所へと向かつていた。

「これは、なかなかの体力勝負になりそうですね」

藤森が、後部座席からのん気な声で言う。そんな彼に呆れた表情になる澤田には、ひとつ気にかかることがあつた。藤森では當てにならないので、隣で運転している野田に聞いてみる。

「殺害された四人のうち、隼人の友人だという方の身元はわかつたんですか？」

「いえ、依然として不明のままなんですよ。何せ、あの有様ですからね。彼の知り合いには現在も当たつていますが、簡単には見つからないと思います。はつきり言つてしまえば、黒川隼人も本人だとは断定しにくいんですよ。一応DNA鑑定も行い、同じく殺害された両親とも血縁関係がありましたし、血液型も一致していたので間違いないとは思うのですが」

「それなら、間違いないでしょうね。でも、なんでその友人は隼人の家にいたんでしょうか。両親もいたというのに」

「そこもまた、不可解なんですよね。一応、遊びに来ていたとして調査していますが、そんな単純なことではない気もします。もしかすると、犯人は黒川隼人だけではなく、その友人も狙つていたとうことも考えられますからね」

野田は、内心深刻だつた。

「それに、黒川隼人だけを殺すつもりだつたのならば、わざわざ大勢いるときではなく、一人でいるときを狙えばいいはずなんです」

「つまり、その日にやらなければ駄目だつたってことですか？」

と、澤田は妙に鋭いところを突く。野田は、そんな彼女に少し感

心した。

「そういうことになりますね。今回の事件は、不可解なことが多過ぎます」

珍しく弱気な発言をする野田に対して、彼を元氣付けるためか、藤森は後部座席の方から顔を前にのぞかせる。

「大丈夫ですよ。星野という人さえ見つかって、捕まえられれば、必然的に白崎と名乗る男も捕まえられます。彼らが実際に手を下した犯人でなかつたとしても、その犯行に絡んでいるのは確かなんですから、すぐに犯人も捕まえられますよ」

「そうだな」と野田は微笑み、意気込んだ。

しばらくすると、車は街から北の方角にある林道へと入った。目的地は、黒川隼人の家である。澤田がまだ現場を見ていなかつたので、そのためにやつてきたのだ。

「あと、時間はどのくらい残っているんでしょうか？」

突然、藤森が謹厳に言った。

「桐谷耕介が犯人ではない可能性がほぼ間違いないとは言つても、断固とした証拠はありません。その星野という人についても、全く手がかりが見つからなければ、やはり、彼が嘘をついていたことになりますよね？」

「そうですね。正直言つて、私もまだその可能性が全くないとは思つていません」

「そなんですか？」  
と、澤田が驚いた。

「ええ。彼を信じてあげたいのは山々なんですが、警察官として、個人の情を入れるわけにはいきません。現在では、残念ながら最も怪しい容疑者ですからね」

「でも、警部は彼に全く疑つていないと言つていましたよね？」

藤森は、疑問に思つたようだつた。

「ええ、言いましたよ。しかし、それはもしかすると油断して口を滑らすのではないかと期待してのことです。人間というものは安心

すると気が抜けてしまい、言つてはいけないことを思わず口に出してしまったことがありますからね。まあ、そうは言つても、私は彼が犯人ではないとほぼ思つてゐるんですけどね」

「私もそう思います」

と、澤田も同意した。そこで、野田が一息入れる。

「まあ、その可能性があるにしても、もし彼が本当に無罪で全て本当の話だとしたら、彼を逮捕することは絶対にあつてはならないことです。そのためにも、今は彼の話を信じて行動するしかありません」

そうですね、と澤田が賛成する。だが、藤森はそれではまだ不服のようだった。

「しかし、やはり証拠が見つからないとなれば、彼を逮捕するんですよね？」

藤森が、不安そうな表情で聞く。

「そうですね。それしか方法はありません。私たちとしても、事件の解決が最も重要なことですから、確かな証拠が見つからない限り、そうするつもりです」

そこで彼は、「よかつた」と息を吐いた。

「私は、他に何の手立てもなくなつても、それでも警部は彼を犯人として逮捕しないかもと、少し心配していたんですよ」

一瞬、野田が睨むように振り返つたが、またすぐに視線を前に戻した。

「そんなことはしません。私も以前、自分の大切な友人が罪を犯したとき、彼が犯人ではないと必死になつて捜査しました。しかし、結局何も見つからず、彼の犯行を裏付ける証拠しか出できません。私は自分の思いを断ち切つて、彼を逮捕しました。今回は、桐谷さんが犯人ではない可能性が高いとはいえ、手が尽きれば逮捕しますよ」

野田が言い終え溜め息をつくと、数秒間、感じの悪い空気が漂つた。

「それで、どれほどの時間が残されているんですか？」

「どうにかしようと、澤田がとりあえず話を最初に戻す。

「そうですね。一応上の方には、第一容疑者は見つかったがまだ確信は得られず、他にも気になる点や不明な点が数多く存在するので、早急に事件を解決することは難しいと判断し、引き続き捜査を行っていくつもりと伝えてありますので、時間は結構あると思います。しかし、その前にこちらの手が尽きた」との方が早いかもしてくれませんね」

「ですね。今のところ、その星野という人が見つからなければ、打つ手がほぼなくってしまいますからね。見つかればいいのですが……」

「じゃあ、彼を探す捜査の範囲が都内だけというのは、狭くないですか？」

澤田が、そう意見する。だが、野田は首を横に振った。

「いや、珍しい名字ならともかく、星野が多いですからね。範囲を広げることができればいいのですが、それこそ時間がなくなってしまう。それに、黒川隼人はあまり積極的に外に出るような性格ではないという話なんです。それなら、都内で何かがあつて殺人に結びついたと考えることができます」

その言葉に、もう不服の声は上がらなかつた。

車は林道を抜け、その先にある分岐点を右に曲がる。黒川の家までは、あと少しだつた。三人は無言になつて、それぞれ何か考えているようだつた。

「さつき、隼人はあまり外に出るような性格ではないって言つていましたけど、昔は、そんな人じゃなかつたんですよね……」

突然、澤田が呟いた。

「そうだつたんですか？」

と、藤森は興味を持つたようだつた。野田も「私も聞きたいですね」と彼女を見る。

「はい。昔はやんちゃで、私とも一緒に遊んでいました。たまにち

よつかいも出してきて、どちらかというと社交的でしたね。でも、人は変わるって言いますしね」

「なるほど。何か変わる原因があつたのかもしませんね。しかし、彼の過去について知っている人間、つまり両親は一緒に殺されましたし、そこを探るのは難しいかもしませんね」

「桐谷さんなら、知っているんじゃありませんか?」

「そうですね。幼馴染だったのですから、あとで詳しく聞いてみましょうか」

すると、そこで藤森が疑問を抱いた。

「そういうえば、澤田さんは桐谷さんとは知り合いではないんですか?」

「いえ……。なぜですか?」

「彼女は、不思議そうに聞いた。

「彼が黒川隼人の幼馴染で、それも特に仲が良かつたと言つていましたから、いつも一緒に行動しているはずですよね。それなら、澤田さんが黒川隼人と一緒に遊んでいたときも、いたはずではないかと……。もし遊んではいるなくても、そんな存在なら必ずどこかで会つているはずだと思つたんですよ」

「そう言えば、そうですね」

澤田は、彼が本当に記憶にないのか、今一度考え方直してみる。だが、やはり思い出せなかつた。

「……でも、やっぱり知りませんね。名前にも憶えがないですし」

「なら、あとでそのことも一緒に聞いてみますか?」

藤森がそう言つたところで、車は黒川の家の前に到着した。すでに家の捜査は終わつていいようで、今は立ち入り禁止のテープが周囲に張り巡らされている。

三人は外に出ると、早速家の中へ入つた。

玄関から真っ直ぐと続く廊下を抜けて、実際の殺人現場である部屋に入ると、三人は思わず鼻を覆つた。あの事件から結構な時間が経つているとは言え、未だにあの異臭は残つている。

加えて、壁や床には血の染み付いた跡が残っていた。特に、床はその量のせいか、もとから赤褐色だったのではないかと思えるほどだつた。

三人が中を一通り見回したあと、藤森は澤田に感想を聞いた。

「どうですか？ ひどいでしょ？」

彼女は、血痕で染まつた床を見ながら吐息をつく。

「はい、ぞっとしますね。事件の残酷さが見るだけで想像できます」

だが、そこで彼女の目付きが急に鋭くなつた。

「でも、変じやないですか？」

その発言に、二人は彼女に視線を向ける。

「何が、変なんですか？」

野田が聞いた。

「事件当時、犯人は家に急に押しかけてきて四人を殺害したんですね？」

と、澤田は聞き返す。

「一応、そう考えて捜査していましたが……」

その質問に、野田はあいまいに答えた。それを見て澤田は、自分の考えに自信がついたようだつた。

「なら、やっぱり変ですよ。急に知らない人が押しかけてきたとなれば、当然、四人はパニックに陥るはずです。あと、凶器はナイフで四人の死亡推定時刻は四時から六時でしたよね。それなら、四人も起きているはずで、一度で一気に殺すことは不可能ですから、必然的に一人ずつ殺していくことになります。若い男が一人もいるんですから、もしかすると、捕まえられた可能性もありますよね。少なくとも、彼らは何かしらの抵抗はしたはずなんですね。それなのに、この部屋には争つたような跡が何一つ見受けられません。明らかに変じやないですか？ 一人ならともかく、四人相手にそんな芸ができるとは思いません」

澤田が言い終えたとき、一人は驚きの目で彼女を見ていた。まさか、このまだ若い彼女が、ここまで冷静に分析できるなどとは思つ

ていなかつたのだろう。

澤田は二人の表情を見て、「なんですか」と怪訝に言つた。「いえ」と野田が答える。

「確かにそうですね。周囲に傷跡一つ残さず、四人の人間を殺害することは不可能に近いです。警察に連絡しようと受話器を取つたような跡も、助けを求めて外に逃げようとした形跡もありません」「逃げようとすれば、一人くらいは外に出れたんじゃないですか?」「そうですね。しかし、現実には跡形もなく綺麗に殺されている…」

…  
またひとつ謎が増え、野田は表情を曇らせた。

「なら、少なくとも四人いることは最初から知つていたということになりますね」

「それに間違いはないと思います。しかし、いくらその事実を知つても、不可能でしょうね」

すると、藤森は何か閃いたようで手を叩いた。

「犯人は、はじめからこの家に潜伏していたんじゃないですか?そして、入つてくるのを見計らつて、次々と殺していくんですよ」  
彼は、ナイフで何か切りつけるようなジェスチャーをした。「しかし」と野田は言つ。

「確かに、彼の留守中に家へ侵入して、帰つてくるところを狙えばうまくいくかもしれません。もしくは、最初に一人でいる黒川隼人を殺して、次からは家に来る順に殺すこともできます。しかし、前者では、四人が同時に家に入つてくることも考えられますよね。後者の方も可能性はありますが、それでも三人同時となれば、難しいでしょう。あと、両者ともその方法では、死亡する時刻がどうしてもズれてしまいます。しかし、四人の死亡推定時刻は、ほぼ同時刻です。偶然そうなつたかもしれないが、やはり可能性は低いですね。いずれにしても、それらの方法では、失敗するという可能性があります。しかし、犯人がそんなリスクを背負うような真似をするでしょうか。指紋も、髪の毛一本さえも綺麗に取つていくような奴

「…………」

「しませんね」

藤森は、少し気落ちしたようだつた。

「じゃあ、犯人はどうやって犯行をこなしたんでしょうか?」

澤田が、当たり前の疑問を投げかける。三人はそれぞれ考えてみたが、特に有望なものは出てこなかつた。

数分経つたところで、野田が口を開く。

「まあ、ここであれこれ考えるのもあれですし、今日のところはもう帰りましょうか。桐谷さんに聞くことも、色々と出てきましたしね」

一人も疲れていたようで、「そりしまじょう」と快く頷いた。

翌日、桐谷が署に赴くと、野田たちは即刻昨日の質問をすることにした。

まずは、黒川の性格が変わったことについて何か知っているか。三人は、知っているかどうかは五分の確率だと思っていたが、桐谷はその質問に対して特に迷つた様子もなく、すぐに話しあじめた。話によると、彼の性格が変わった主な原因は中学時代にあつたいじめだという。

彼は、もともとは温和な性格の持ち主で、誰に対しても優しく、その上勉強もスポーツもできるという俗にいう優等生だった。だが、そんな彼にも唯一の欠点があつたのである。

それは、母親が風俗嬢をやっていたという過去だった。そして、それは自分ではえることもできない定められた運命だったのである。

彼が家に友人を呼んだとき、偶然にも両親が深刻そうに話しているのを目撃して、二人で盗み聞きしたことがはじまりだった。その友人がそのことを言い振り回すと、周りの人間も中学生という多感な時期であつたため、その事実を知ると途端に態度を変えて彼を罵倒し、しまいには高等ないじめにまで発展した。

彼自身はじめは抵抗していたが、それでも周りの人間はいじめるなどをやめず、そのいじめを教師が知るまでの約半年間、彼はいじめられ続けた。

桐谷は、そんな彼に対して毎度優しく声をかけ、元気付けようと呼べるよくな仲になつたといつ。

だが、いくら桐谷が親友になつたとは言え、彼の心に二度と消えない深い傷が刻まれていたことに変わりはなかつた。人を恐れ、誰とも口を利こうとしない。桐谷と親友になつたそのときに、彼はま

た対人恐怖症にもなつていた。

それから、彼は唯一信頼できる親友である桐谷と、行動を共にすることになった。桐谷も、彼に対する同情は強く、どうにかして彼を救つてあげたいと思っていた。

桐谷は様々な方法で、彼の症状を治そうと努力したが、はじめは当然うまくはいかない。それでも桐谷はあきらめず、何度も繰り返すうちに、彼の心はだんだんと快方に向かつていった。

そして、彼はついに対人恐怖症という枠から出ることに成功した。だが、それでも完全に治つたというわけではない。恐怖には至らなくはなつたものの、彼は異常なまでの人嫌いになつっていた。彼が自然に囲まれた人の少ない地域に住んでいるのはその証拠である。さすがに人嫌いまで治せることはできなかつたが、それでも人に話しかけることはあつたし、それで笑うこともあつた。桐谷は、それで十分だつた。

互いに就職し、彼もうまくやつてているようなので桐谷も安心し、自分の仕事にも熱が入るよくなつたといつ。

そして、今に至つてゐる。

「……なるほど」

三人は、彼の生い立ちに同情を寄せたのか、しみじみと頷きながら桐谷の話を聞いていた。桐谷も、彼らの態度に謝意を表する。

「隼人も、とても苦しかつたんでしょうね。やっぱり、いじめは許せません」

澤田が、強く主張した。

「そうですね。今やいじめは、立派な社会問題の一つです。これからは、彼のような不幸な人間を増やさないためにも、もっと努力していかなければなりませんね」

「しかし、その教師も、もう少しは早く気がつけたんじゃないですかね？」

「いや、いじめが社会問題として見られ出したのは最近のことですからね。そのころは、まだ特に注意して見てもらなかつたんでしょ

う。まあ、その教師を責めないわけにはいきませんが、どちらかといつと、国の教育方法を責めるべきでしょうね」

「まあ、そうですね」

「今は昔と比べて、いじめは減っているんでしょうか?」

澤田は、疑問に思つた。今や社会問題と見られ出したのだから、国の方も対策を打つているのだろうという考え方からの疑問である。「詳しくはわかりませんが、あまり変わっていないと思いますね。いじめを調査した統計上では、はじめは少しずつ減少している傾向にあつたらしいのですが、最近になって、また増えたらしいですかね。まあ、いじめはそれ自体発見するのが難しいので、実際には増えているのか、減つているのか、わかりませんよ」

「そうですね。あとは個人が意識するかしないか、でしょうか?」

「……と言つても、いじめはたちが悪いですからね」

と、藤森が哀れむように言つた。「そうですね」と野田が返す。「いじめというのは、一人がはじめるとき周囲の人間をも巻き込んでしまいますからね。そのいじめられている人に対して、それまでは嫌いだという感情がなかつたとしても、そうしているうちに無意識に嫌いだという錯覚が生まれてしまいます。そうなつてしまえば、もう止まりませんよ」

藤森と澤田は、思わず溜め息をついていた。そこで、野田が口を開く。

「……まあ、こんな話はもうやめましょうか。私たちも、時間がありませんし」

藤森が「そうですね」と同意したところで、その話については打ち切りとなつた。そして、もう一つの質問を聞いてみる。

「そう言えば、桐谷さんは澤田さんとはお知り合いでないんですね?」

桐谷は、少し意外だといつよつな顔をする。

「……いえ、知っていますよ」

桐谷は笑顔で答えたが、三人は「え」と呆気にとられたようだ、

互いに顔を見合せていた。特に澤田は、まさに鳩が豆鉄砲を食つたような表情で、目を丸くしている。

「知っているんですか？ 私を……」

その中でも真っ先に口を開いたのは、その本人である澤田だった。「はい。この間会ったとき、何か名前に聞き覚えがあるなと思って、ちょっとと考えたんですよ。そうしたら、すぐに思い出せました。確か、同じ小学校でしたよね」

だが、彼女はまだ思い出せないようで、必死になつて考え込んでいた。

「すみません。私、憶えていないようで……」

彼女は、苦しい表情で自分の過失をわびる。だが、そこで桐谷は「そうだ」と何か思い出したよつだつた。

「そう言えば、あの時は名字が違っていました。若本です。若本耕介という名前に、憶えはないですか？」

彼女は一瞬悩んだかと思うと、はつとした表情になり口に手を当てた。

「え？ まさか、若本耕介って……あの耕介くん？」

「やつと、思い出してくれましたか」

と、桐谷は少しほっとした。あそこまで断言しておいて、本当は人違いだったということになつたら、合わせる顔がなくなつてしまふ。

「うん。そつか、あの耕介くんか。じゃあ、名字が変わったのはなんで？」

澤田は、何気なく聞いた。彼女は、もう敬語で話す気はないらしい。それに桐谷も呼応することにした。

「いや、俺が高校生の時に両親が離婚しちゃってね。それで名字が変わったんだよ」

彼女は、自分の不甲斐なさに憮然とした。名字が変わった理由など、考えようと思えば考えられたではないか。それを、彼の悲しい過去まで思い出させることになった。彼は笑っているが、きっと心

根ではその時の哀傷が蘇つているはずだ。先ほどのこともあり、彼に對して失礼極まりない。

「……ごめん。変なこと聞いて」

「いや、いいつて。もうあのことは氣にしてないし、再びこうして会えたんだから、今は再会を祝おうよ。と言つても、澤田さんたちは捜査もあるよね」

彼の寛容な態度に澤田は安心し、同時に感謝する。見た目は男らしく変わっていたが、中身は昔と変わらない寛大で人間のできた人だった。

「そうね。なら、この事件が解決して耕介くんが犯人じゃないつてことがしつかり判明してから、一杯やりましょう?」

「そうだね。そのためにも、早く犯人を捜してもらわないと」

二人は、意氣投合とした感じで、笑った。

桐谷が署から帰ったあと、三人は事件について、もう一度最初から整理して話し合っていた。

「それにしても、本当に桐谷さんと知り合いだつたんですね」

突然話を変えたのは、藤森だった。

「はい。まさか、あの人人が耕介くんだとは思つていませんでした」「どんな人だつたんです?」

藤森が質問すると、澤田は少し唸るように考えた。

「小学校の時の友人ですから、しつかりとは憶えていませんが、いい人だつたつてことは憶えていますね。優しくて、誰にも恨まれないような人でした」

「なるほど。まあ、あなたからすれば、彼を犯人として見たくはないでしょうね」

「そうですね、考えられません。でも、そのような例はいくつも存在しますからね。事件を起こした犯人は、昔はいい人だつたとか、そんなことをしたなんて意外だつたとか……。もちろん、私だってそう思います。でも、やっぱり自分の立場を考えると、彼を犯人と

しても見ていかなければいけないと思います」

すると野田は「すごいな、」と感嘆した。

「私も以前同じようなことがあったと、この間言いましたよね。しかし、そのときの私は、澤田さんのような思考は皆無でした。警察としての立場ではなく、その友人として、無罪の証拠を捜そうと必死でしたからね」

そんなことは、と彼女は恐れ多いといつた態度になる。

「だつて、それでも警部は最後にその友人を逮捕したんですね。それだけでも、すごいことだと思います。私も先ほどそうは言いましたが、実際に逮捕となつてしまえば、そのように動けるかはわからりません」

「いや、それでも澤田さんはすごいですよ。……まあ、こんな話はもうやめましょうか。それよりも、事件のことですね」

彼女や彼のためにも、一刻も早く真犯人を捜さなければいけない。そう考えた野田は、雑談などしている暇ではないと思つた。

「そうですね。それで、この間話していた犯行の方法のことで思つたんですが……」

そう言つたのは、藤森だつた。

「何か、いい方法があつたんですか?」

と、野田が聞く。澤田も、期待して耳を傾けた。

「はい。私は以前、犯人ははじめから黒川の家に潜伏していたのではないか、と言いましたよね。そして、その時は難点が多く、その可能性の低さで否定されました。しかし、私はそれでもまだ納得できず、今までずっとと考えていたんですよ。それで、見つけました。その難点を開拓できる方法です」

その希望に満ちた発言に、二人はさらに注意して聞いた。

「黒川たちが一斉に帰つてきたら、失敗になつてしまつ。そう言いましたよね? しかし、家にいたとしても別に不自然ではない人だとしたらどうでしょう?」

「なるほど。犯人は、黒川隼人の顔見知りということですか。それ

なら、簡単に家に入れますね。しかし、もしそうして家に侵入したとしても、周囲に傷をつけずに四人を殺すことは、たとえ隙を突いたとしても、ほぼ不可能ではないですか？」

「ええ。それでは不可能です。しかし、はじめに一人でいる黒川から、という方法なら可能なんですよ」

彼は自信たっぷりに言つたが、「しかし」と野田が再び疑点を指摘する。

「それでも、三人同時に来る可能性と、殺害する時間のずれは回避できないのではないですか？」

藤森は、彼の予想通りの対応に少し笑みを浮かべた。

「いえ、それも可能です。犯人は、はじめに彼を殺すのではなく、捕まえるんですよ。一人でいるんですから、隙を見て飲み物などに睡眠薬を入れる、その他の方針にしたとしても、簡単に捕まえられると思います。そして、たとえ三人同時に帰ってきてきたとしても、彼をどこかに眠らせたまま隠しておいて、今は留守などと言い、加えて、コーヒーを用意しておきましたなどと適当に飲ませれば、それで四人は完全に犯人の手の中です。あとは殺害し、自分の犯行の証拠を消せばいいんです」

野田も、その考え方は思いつかなかつたようで、「なるほど」と感心した。だが、そこで澤田が反論する。

「でも、司法解剖の結果に、そんなものは検出されていないですね」

「そうでしたね、検出されていません。ですから、睡眠薬はないにしても、何らかの外傷を与えて気絶させたのかもしれませんね。バラバラにした理由も、その外傷を発見されないようにするための手段だったのかもしれません。その友人は、トイレに行つたときにでも不意を突いて、殺したんでしょう。残りは老人一人ですから、たとえ殺したことがばれたとしても、脅すなどして黙らせ、殺すこともできたと思います。その友人をバラバラにした理由も、その時に何らかの支障があつたからなんでしょうね」

「と言つことは、やはり、桐谷さんがますます怪しくなってしまいますね」

「そんな……」

そう呟いたのは、彼の友人でもある澤田だった。彼女としても、本心ではもう桐谷を犯人扱いしたくはないのだろう。一人も、彼女の気持ちは十分承知していたが、それでも犯人として疑うべきところは疑わなければならない。

うつむく彼女に、野田はそっと声をかけた。

「大丈夫ですよ。怪しいとは言つても、まだ犯人と決まつたわけではありません。それに、先ほどあなたと桐谷さんが会話していた時の彼の態度を見る限り、とても犯人が取るような態度、雰囲気ではありませんでした。藤森巡査も、本当は彼を犯人としたくはないはずです。しかし、今のところ他に何もないですから、仕方がないんです」

藤森も、野田の言葉を補うように言った。

「そうですよ。私だって、彼を犯人だと確信しているわけではありません。ただ、その可能性もあると言つてているだけです。星野という人の手がかりさえ掴めれば、きっと桐谷さんの無罪も証明されると思います。ですから、そんなに気を落とさないでください」

「……ありがとうございます」

澤田は、二人の言葉に深く感謝した。

眩しい太陽光線がさんさんと降り注ぐ快晴の真昼。その日は桜の開花日ということで、花見スポットのニュースなどが取り上げられていた。人々がその可憐に咲く桜を堪能しながら、ご膳を楽しんでいる。そんな光景がテレビの中で流れている。

野田は、大きな息をついた。

星野について調べはじめてから、一週間近く経っている。そのこと自体は特に問題ではないのだが、他の手がかりを探すつもりがまるで進展が見受けられず、深刻な状況だつたのだ。

限られた貴重な時間が、どんどんと過ぎ去っていく。野田は、そんな焦りを感じながらも、その色々な可能性について考えてみるのだが、それでいて何も思いつかなかつた。

やはり、桐谷耕介が犯人なのだろうか。

彼は最近、そう思うようになつてきていた。これほどに情報はあらか、手がかりさえ見つからないということは、桐谷が嘘をついている可能性は十分に考えられる。

しかし、と野田は頭を振つた。彼は、桐谷を犯人として見たくはないのだ。

だが、その脳裏には、どうして彼をそこまで庇おうとするのだろうか、という疑問も存在していた。彼は、桐谷に対する妙な情にも悩んでいたのである。

自分は、彼に対しても何か特別な感情、あるいは同情を抱いている。

野田は、それを否定しようとはしなかつた。ただ、その根源がわからないのである。

以前、友人が罪を犯したことに対する対しては、その友人として、彼を疑いたくなかった。だが、今回は友人ではなく、赤の他人なのだ。澤田の友人ではあるが、彼はそれを知る以前から、その感情

を持っていた。

どうしてだ？

彼は、頭の中で自分にそう投げかけた。

今まで、様々な事件を解決してきている。まだ二十歳になつたばかりの青年や、すでに六十を過ぎた老人、新婚したばかりの女性まで、多くの人間と対面してきた。そして、事件を捜査し、犯人とわかれれば誰と構わず逮捕してきた。

罪を犯すような人間は、絶対に許さない。それ一心だつたのだ。彼には、どんな犯罪に対しても赦免しないという断とした意志があつた。そして、その理由は、彼が警察官になるうとしたきっかけに繋がっている。

彼が警察官になろうと決心したのは、高校二年生の時だつた。当時の彼は、部活にこそ入つていなかつたが、そこそこ運動はでき、何より学力があつた。彼の通つていた学校は比較的名の通つた有名校で、そしてその中でも常に一位一位を争うトップクラスの成績だつたのである。人間関係にもさほど不自由はなく、友人も多かつた。だが、そんな彼にもまた、辛い過去が存在していたのである。そして、それは彼の人生を大きく動かす一大事だつた。

両親の死……。それがその形だつた。

その日から、彼を取り巻く環境が一変したのは、言つまでもない。それまでは、マンションに三人で暮らしていた。だが、両親を亡くした高校生の彼には、家賃を払うことなど到底できない。高校をやめて就職しようとも考えたが、ありがたいことに叔父に引き取つてもらい、その後の生活は一応保障された。だが、さすがに大学まで迷惑をかけることはできない。

そこで彼は、以前希望していた大学進学をあきらめて、就職を決めた。

そして、そのときに警察官を選んだのである。

理由は単純だった。その両親を亡くした事件によつて生まれた強い意志である。

その事件は、強盗殺人だつたのだ。休日、彼が友人の家へ遊びに行つてゐる間に起こつた事件だつた。

犯行の目的は金。ただそれだけのために、一人もの人間を殺したのだ。

……許せない。

はじめ、その事件によつて彼の心は、その犯人に對する憎悪だけに染まつていた。絶対に死刑にしてやる。そうさえ思つた。だが、犯人は結局死刑にはならず、無期懲役となつて終わつた。死刑を望んでいた彼にとつては残念な結果となつてしまつたが、そのとき、彼はあることに気がついてしまつたのである。

その犯人が死刑になつてもならなくとも、両親が死んだという事実に変わりはない。犯人が罪を償うという過去の清算よりも、それ以前の問題、つまり犯人が罪を犯すという事實に対して対処していくべきではないのか。

そう思つた途端、彼は殺人の起こらない社会、そして一度と自分のような不幸な人間を出さないような社会を望んだ。

その理想を實現させるために、彼は警察官になつたのである。

だが、現実はそんな簡単なものではなかつた。それを警察官になつてはじめて思い知らされたのである。

周りの人間だつて、そんな社会を望んでいる。だが、それはならない。犯罪はなくならない。だからこそ、警察官がいるのではない。自分の抱いていた理想は、いや、それは單なる妄想でしかなかつたのではないか。

彼の理想は途端に崩れ、彼はいつしか現實を見るようになつっていた。

……やはり、許せない。

彼の心は再び、罪を犯す者に對しての憎悪に染まりはじめていた。そんなとき出会つたのが、藤森だつたのである。

彼もまた同じく、理想を持っていた。だが、それは野田が持つていた理想とは、少し違つっていたのである。

「私は、罪のない世界を望んでいます。しかし、そんな世界はありません。人は罪を犯す弱い生き物なんです。しかし、だからこそ私は警察官にならうと思いました。犯罪は許せません。しかし、その犯罪を減らすことは可能だと思います。私は、そのことに少しでも貢献できればと思っています。そして、もし罪を犯した人間がいたとしても、彼らがしっかりと更生して社会復帰してくれれば、この上嬉しいことはありません」

現実を見ながらも、そこに自分の理想を入れていくという彼の考え方には、野田の共感を得るには十分なものだつた。

犯罪は許せない。だからこそ、自分たちは犯人を追い回し、捕まえる。そして、立派に更生することを望む。そうしなければ、社会が崩れるからだ。

そして、彼らをしっかりと逮捕することが、犯罪を減らすことにつ繋がる。犯罪は許されないということを、世の中に伝えるためだ。自分の理想に少しでも近付けたい。そのためにも、犯罪者を決して許してはならないのだ。

彼は、そう心に誓つたのだった。

そして、その思いがあつたからこそ、彼は自分の仕事をしっかりとこなしてきたのである。誰であろうと、罪を犯した者を許しはしなかった。

だが、この感情は何だ？

野田は再び、自分に訴えた。

桐谷耕介に対する思い。それは、一体どこから生まれたのだろうか。今まで、こんなことはなかったのだ。

だが、いくら考えてもその原因には辿り着けなかつた。

野田は溜め息をつくと、タバコを取り出し火をつけた。その煙をゆっくりと肺へ持つていく。

こんなことを考えていても、らちが明かない。今は事件の解決の方が先決だ。

そう思つたとき、突然電話が鳴つた。吸い込んでいた煙を吐くと、

タバコを片手に受話器を取る。

「もしもし、野田警部ですか？」

相手は、藤森だった。

「どうした？」

「星野について、少し絞り込めました」

「そうか。では、詳しく聞かせてくれ」

「はい。 都内の星野たちを何千人も調べて、まずはその中から犯人とは思われない未成年や学生、一般的なサラリーマンなどを消していきました。そして、残った人の中で、会社の上層部に当たる人間を探し、そこでも無関係だと思われる人はすべて消しました。最終的に残つたのは、十九人です」

「十九人か……。結構絞れたな。その中に女性はいるのか？」

「いえ。すべて男性です。女性は薄いだろうということで、最初から調べませんでした。調べておいた方が良かつたですか？」

「いや、それでいいよ。私も、その星野というのは男だと思つているから」

「それで安心しました。では、電話で話すのもあれですので、明日署の方へ行つて、もう少し詳しく話したいと思います」

「ああ。頼んだよ」

電話を切つたあと、野田は残り少なくなつたタバコを揉み消す。さて、ここからが本番だな。

彼の中では、新たな情報を得たためか、うずうずとした感情が湧き上がつていた。

野田がいつものように署に行くと、そこにはすでに藤森が待っていた。隣には、澤田もいる。そして、もう一人……。

「桐谷さん？ 桐谷さんも来たんですか？」

意外だった。容疑者ではあるが、事件の捜査とは無関係な彼である。わざわざこの場に来る必要はないし、言つなら来るべき存在ではない。

「どうして、桐谷さんが？」

すると、藤森が応対した。

「いや、澤田さんが呼んでほしいと言いましたね」

「澤田さんが？」

野田は彼女に振り向くと「どうしてですか？」と聞いた。

「いいじゃないですか。耕介くんは、事件と直接関係のある重要な人なんですよ。何か思い出すかもしれませんし、そのときは電話よりも直接の言つた方が伝わりやすいですよ」

「まあ、確かにそうではあるんですが……」

内心、彼がいることで事件の捜査について深く入り込めなくなるかもしれないといつ心配があった。もちろん、彼の容疑の可能性を追究することもできない。

「やっぱり、いるのは駄目なんですか？」

彼の態度を見て、澤田は少し不安になる。

「いや、別にいることが問題ではありませんよ。事件と無関係ではない、むしろ事件の解決にとつて重要な方ですからね」

「それなら」

「いいじゃないですか、と彼女は言おうとしたが、野田に遮られてしまった。

「しかし、彼をここまで巻き込んでしまつていいのか、といつ」とですよ。事件に関しては確かに重要な存在です。しかし、その捜査にまで足を踏み入れることは、行き過ぎではないですか？」

澤田は無言になる。そこで、今まで彼らの話を黙つて聞いていた桐谷が、遠慮気味に口を開いた。

「やはり、私はいい方がいいんですか？」

「いえ。いない方がいいと断言するわけでもありません。ただ、桐谷さんにも仕事があるでしょう。迷惑をかけているのではないかと思いまして」

やはり、彼は事件の捜査に関わるべき存在ではない。野田の、彼に迷惑をかけたくないといつ思ひは本物だった。

「いえ、そんなことはないですよ。迷惑だなんて……。私も、その星野については気になりますし、もともとその名前を挙げたのも私なんですから」

桐谷は、本当に氣になる様子だった。野田も心配はあつたが、大した不都合にはならないだろうと、「」ことで解釈した。

「それなら、別に構わないんですけど……」

「それよりも、私の方こそ迷惑をかけていませんか?」

「いえ、そんなことはないですよ。私たちとしても、桐谷さんが来てくれることはありがたいことなんです。と言つても、事件の捜査は私たちの仕事なんですから、無理して協力しようとはしなくていいですからね」

「はい。わかりました」

一応、積極的に協力してほしくはない「」と遠回しに伝えた。捜査に何か支障が出ないとも言い切れないからだ。

野田の意図を、彼が理解したかどうかはわからない。

「では、そろそろ本題の星野について入つてもいいですか?」

そう切り出したのは、藤森だった。野田が「そうですね」と頷く。澤田と桐谷も、黙つたまま頷いた。

「昨日、一応連絡はしましたが、念のためもう一度はじめから話しますね」

そう言つて、彼は一枚の紙を取り出した。おそらく、星野に関する資料だろう。

「まず、都内にいる星野という名字の方だけでも、三十人以上に及びました。しかし、女性は可能性が低いだろうと「」ことで、女性の名前と思われたものは調べなかつたので、実質は半分くらいになりますね。そして、その男の星野たちの中で、事件とは無関係だろうと思われる人物、つまり、未成年者や学生などの若い方や仕事をついていない方などを、まずは消していきました。そして、会社の中でも特に上層部に当たる人物と推測していますので、サラリーマンや自営業など、あと自由業の方も消しました。そして残つ

たのが三十名です。その中で、一年程前から海外に滞在していたという方が一名、事件以前から入院していた方が一名、あと事件とは完全に無関係だとわかつた方が九名いました。その方たちは除外して、最終的に残つたのが、十九名です」

「なるほど。まだ、その中に私たちの探している星野がいるかどうかはわかりませんが、確率は高いかもしませんね」

「はい。私もそう期待しています。まあ、会社の上層部の方だとう推測が正しいかどうかが少し不安ですが、もしそうなら、この中にいると思いますね」

「まあ、そうなつていることを祈るしかないですね。ところで、今はその十九人について詳しく調べているんですか？」

「はい。十九人と数も限られてきたので、現在は一人ずつ当たっています。この調子で行くと、とりあえずは四、五人に絞れると思いますね」

それは良かつた、と野田は微笑んだ。

だが、星野についての情報以外、今まで何の手がかりも見つかっていないのが現状である。そのことを考えると、素直に喜んではいられなかつた。

「そういえば、私たちも一人当たることになつています

「わかりました。どんな方ですか？」

「はい。星野義雄という方です。四十一歳で、現在はN社の監査役として勤めているようです。しかし、若い頃は少し悪かつたようで、重罪こそ起こしませんでしたが、高校生のときには何度も補導されたようですね」

「なかなか詳しく述べていますね。しかし、よくそれでそこまでの地位を確立できましたね」

野田は、感心するように言った。澤田も「そうですね」と同感の意を表す。

「彼は、相当の切れ者という話ですかね。会社の方でも重宝されただんでしょう」

「なるほど。しかし、そんな過去も持つていて切れ者ともなると、今回の事件に何らかの関係があるかもしませんね」「はい。私も彼は特に怪しいと思っています。ですから、私が推選して、彼に当たることにしたんですよ」

藤森が得意気に言つと、野田も満足そうに頷いた。

「乙社は、ここから近いんですか？」

「車で、一十分前後だと思います。すぐに出ますか？」

「そうしようか。澤田さんも、いいですね？」

「はい。構いませんけど……。あの、耕介くんは？」

澤田の質問に、野田は困惑した表情になる。

「……いや、桐谷さんをあまり巻き込むわけには」

「あの……私、行きたいです！ 行ってもいいですか？」

桐谷の突然の発言に、野田は少しうるうたえた。野田は断ろうとしたが、彼が真剣なまなざしで自分を凝視しているのを見て、本気のようだな、と少し思い止まった。

小考したあと、仕方がないと彼の同行を許可する。

「ありがとうございます！」

そう言つた桐谷の表情は、とても嬉しそうに見えた。

「しかし、よくそんな人数を調べたね」

運転席でハンドルを切つている野田が、横目で後部座席に座っている藤森を確認するように話しかけた。藤森の隣には桐谷が座っていて、野田の隣、つまり助手席には澤田が座っている。

「はい。大変でしたよ。各警察署に協力してもらつたとは言つても、数千人の情報を引き出すのには、多大な時間を使いましたね。一週間くらいですか。それでも、随分と早かつた方じゃないですか？」

「（）苦労だつたね」

全くです、と藤森は苦笑いをした。澤田も、それにつられて少しほこりぶ。すると、その彼女が口を開いた。

「あの、私も少し彼について調べたんですけど……」

彼女も、ここ一週間をただ漫然と過ごしていたわけではないらしい。

それを知つて、野田は自分に對して苛立ちを覚えた。藤森も澤田も、しつかりと事件の解決に向けて取り組んでいる。だが、自分はどうなのか。色々と考えることはしたが、結局は何も思いつかないということであきらめ、桐谷が犯人かもしれないという消極的な考えに走つたのだ。

「彼というのは、黒川隼人のことですよね？」

「はい。そうです」

藤森が、確認する。

「それで、何を調べたんですか？」

「彼の生い立ちや家族構成などについて、もう一度しつかりと確認してみたんです」

「なるほど。それで、何かわかりました？」

「はい。少しだけ……。生い立ちに至つては、すでに私や耕介くんが話した通りで、特に新たな発見は見られませんでした。でも、

私は調べた時にはじめて知ったんですけど、隼人には双子の弟がいるようですね」

そのとき、桐谷ははつと思い出したようだった。

「そうだ……そうでしたよ。隼人は双子だったんですよ。すっかり忘れていました」

「そのことなら、私たちも既知の情報ですね」

「そう言つたのは、野田だつた。

「え？ 知つていたんですか？」

「ええ。事件を捜査する上で、家族構成は確認しましたので」

「そうですか……。それなら、私が調べたことはあまり意味がなかつたんですね」

澤田は滅入つた様子で、肩を落とした。それをすかさず、藤森がフォローする。

「そんなことないですよ。詳しく述べたのなら、他にも手がかりとなる情報があるかもしませんし。第一、私たちはその双子の存在についてあまり触れていなかつたんですから、見直すのにいい機会をつくってくれましたよ」

「そうですね、と野田も賛同する。

「確かに、その双子についてはあまり考えていませんでしたね。行方不明だから、というのもありますけど

「行方不明なんですか？」

桐谷が聞くと、野田は少し驚いた顔になる。

「桐谷さん、知らなかつたんですか？」と言つことは、黒川隼人からは何も聞かされていなかつたということですよね？」

「はい。双子がいたことは知つていましたけど そう言えれば、その双子に会つた記憶もあまりないです。小中学校の頃には何度も遊んだ記憶はありますけど、高校では一度も会つていません、というよりむしろ、見ていない気がします」

「……妙ですね。同じ学校だつたんですか？」

「いや、それがあまり憶えていないんですよ。確か、小中学校の時

は一緒だつたと思つんですけどね……」

桐谷の記憶は、あいまいなようだつた。彼も、きっとその存在について特に意識してはいなかつたのだろう。

「そのことについてなら、私、知っていますよ」

澤田は、役に立つだらうと思ったのか、少し嬉しそうに言つた。

「本当ですか？」

「はい。その双子の弟について少し気になつたので、調べてみたんですよ」

「助かるよ。それで、どうだつたんですか？」

「はい。耕介くんの言う通り、同じ小学校で、中学校も同じですね。高校は違つたようですけど」

だから、高校のときは見なかつたのか、と桐谷は思つた。だが、小中学生の時にもあまり遊んだ記憶はない。仲が悪かつたわけでもないだらうし、一体どうしてだらうか。

「あと、親とは相当仲が悪かつたらしいですね」

「親と？ それは、彼の母親が元風俗嬢だつたことにも関係しているのでしょうか？」

「それは、わかりません。でも、彼は小中学時代、特に中学の頃はほとんど学校を休んでいて、いわゆる不登校だつたようですね」

「不登校か……」

野田は、そのことに思い当たる節があるのか、何かを感じたようで腕組みをして考えている様子だった。

そんなことを話しあつて、車はZ社のビルの前に着いていた。

ビルは二十数階建てのようで、最近新たに塗装されたのか、外装を見る限り新築の雰囲気さえ感じられた。と言つても、このビルは築二十年近くたつてあり、それほど新しいとは言い難い。

四人は車から降りると、早速中へ入つていった。

玄関ホールを抜けて、広いロビーに出る。資料を持って歩いてくる従業員や、受付のところで何やら話している人などの姿が目に入

つた。

「悪くないですね」

藤森がロビー全体を見回したあと、そう呟いた。ロビーは淡いブルーを基調としたつくりで、落ち着いた雰囲気である。

また、野田たち つまり警察の存在はかなりの注目を集めたようで、そこにいた半数以上の人人が、彼らを注視しているようだった。桐谷は周りの視線が気になり、少し肩をすぼめたが、他の三人は慣れているのか、堂々と中央を横切って受付の前まで歩いていく。受付係の女性も、かしこまつた表情になっていて少し緊張している様子だった。

三人は、警察手帳を示す。

「警察です。星野義雄さんに会いたいのですが……」

すると受付係は、「少々お待ちください」と言って奥の部屋に入つていった。

「彼、いますかね？」

「まあ、いることを願うしかないな」

しばらくすると、受付係は戻ってきた。

「今、役員の方をお呼びしましたので、あちらのソファの方で、もうしばらくお待ちください」

四人は言われた通りにそのソファへ行き、腰をかける。先ほどの受付係はというと、新たに来た客を相手に応対をはじめるところだった。

数分後、左手の廊下から背の高く少し偉そうな中年男が歩いてくる姿が見えた。

その男は、先ほどの受付のところまで行くと、その受付係に野田たちが待っていることを伝えられたようで、こちらの姿を確認し了解するように頷いた。

そのまま歩いてくる。四人が立ち上がると、彼はまず一礼した。

「はじめまして。私、こここの取締役をしている杉上と申します」

「警視庁刑事部、捜査第一課の野田です」

「同じく、藤森です」

「澤田です」

そのとき、桐谷は自分の立場を一体何と表現したらいいのだろうか、と考えていた。警察と一緒に、作家がいるのも妙な話だ。だが、そうは言つても、自分が事件の容疑者の存在だとは言い難い。

そんなことで、桐谷が一人逡巡していると、それを見た野田が、軽い笑みを浮かべて言つた。

「あと、付添い人の桐谷さんです」

桐谷は、その杉上という人への挨拶として どちらかというと、野田の援護に対する感謝の気持ちの方が強かつたが 礼をした。「とりあえず、応接室の方までよろしいでしょうか?」

「わかりました」

野田がそう答えると、杉上は来た方向でもある左手の方へ歩き出す。

「こちらです」

四人は、彼の後ろについて歩き、廊下を一つ右に曲ると、すぐに応接室と書かれた部屋が目に入った。

「ここが、応接室です」

と、杉上はドアを開けて中へ入る。四人も続いて入ると、当然だがそこには中央にテーブルがあり、それを挟んでその左手に複数人が座れる長椅子、右手には一人掛けのソファが一つ並べられていた。普通の応接室である。

「こちらに、腰かけてください」

杉上は丁重に言つと、野田たちが座る上座とは対峙する下座、つまり一人がけソファの方に腰をかけた。

四人が座ると、杉上は一つ咳払いをしてから、話しあじめる。その表情は、自嘲の中に多少の当惑があるような、そんな感じだった。「すみません。私、あまり状況を把握できていないものでして、少し乱雑な言い方になるかもしれませんが……」

そう言いながら、彼は四人をゆっくりと見回す。

「警察の方が、一体何の用件でお尋ねしたのでしょうか？」

彼の質問は、真っ当だった。野田たちは、何の連絡も入れないでここを訪れた つまり、押しかけたような形になってしまったのである。

「すみません…… そうでしたね。では、最初から話していくと聞いています」

そう言って野田は、事件の概要と今までの捜査のことについて、ゆっくりと話はじめた。

「なるほど。おおよそは、わかりました」

野田の話を聞き終わった杉上が、そう言った。

「つまり、その事件に関係のある星野という人が、もしかすると我が社にいる星野義雄かもしれないということですね？」

「はい。そういうことです」

「……わかりました」

と、杉上は突然立ち上がった。

「少々、お待ちください」

そう言い残して、杉上は部屋から出ていく。きっと、星野を連れてくれるのだろうと、四人が全員同じように思った。

数分後、杉上は戻ってきた。だが、その表情に何やら申し訳なさそうな感じがはつきりと見て取れる。

「すみません。今、星野義雄は本社にはいないようです……」

杉上が、そう詫びるよつに言つたところで、四人は彼の表情の理由を悟つた。

「しかし、昼過ぎには戻ると思いますので、そのときにも、お手数ですがまたお越しただけないでしょうか？」

現在の時刻は十一時前だったので、それまでには一時間ほど空いてしまつ。

「では、どこかで昼食でも取つて、また来ますか？」

そう案を出したのは、藤森だった。野田もこれには賛成する。

「そうですね、そうしましようか。澤田さんと桐谷さんも、それでいいですか？」

「いいですよ」

と、澤田が快く返す。桐谷も頷いた。空腹だったことは事実だが、それ以上に他人と一緒に食事をすることが、作家という仕事のせいか、いつも一人だった桐谷にとっては久しぶりだったのだ。

「どこにします？」

四人は今、車に乗っていて、どこか食事のできる場所を探していた。席順は、先ほどと変わっていない。

「私、良い店知っていますよ？」

藤森の質問に対して答えたのは、澤田だった。

「ラーメンですけど……」

と、数秒置いてから付け加える。

そのとき、車がちょうど信号に捕まつたので、野田は後ろに座っている藤森と桐谷の方へと振り返った。

「私はそこで構いませんけど、一人はどうですか？」

「食べられるなら、私はどこでも」

藤森は、笑いながらそう答えた。桐谷も頷く。と言つより、たとえ嫌だつたとしても頷くほかないと思つた。

「では、そこで決まりですね。どこですか？」

そう聞いて、澤田がその店の住所を伝えると、車は次の信号を右に曲り、その店のある方向へと走つていった。

「さつきの話の続きですが……」

と、澤田が話を切り出す。

「隼人の双子の弟 つまり、黒川誠が高校を都内にしなかつたのも、その親との関係があつたからだという話ですね

「都内ではなかつたんだ」

桐谷が、珍しく口を開いた。澤田は「うん」と笑顔で答える。

「しかし、小中学校は同じなんですよね？ それなら、何で澤田さ

んは彼のことを知らなかつたんでしょう？」

藤森は、それを疑問に思つていた。先ほどは聞き逃したので、今聞いてみる。

「それは多分、同じ小学校だつたとは言つても、私は一年ぐら이しかいませんでしたからね。それで彼も不登校でしたし、なかなか会う機会がなかつたんだと思います。もしくは、何度か会つていたとしても、単に私が忘れているだけかもしませんしね」

「なるほど。そういうことですか」

藤森は、納得したようだつた。

「まあ、その一年という短い期間の中でも、隼人と耕介くんとは仲良くしましたね」

「仲良くしていなかつたら、多分、憶えてないだろ?」

桐谷がそう言つたところで、野田が話を少し戻す。

「それで、彼の高校までの生い立ちはわかりましたが、その後のことはどうなつてているんですか?」

それが、と澤田は溜め息をついた。

「一応、高校を卒業したあとは、都内の民間企業に就職したらしいんですけど、なぜかそこをすぐに止めて、また都内を出たようなんですよね。それからは、もう親への連絡も全くくなつたようで、ほぼ行方不明というわけです」

「なるほど。親は、彼を捜さなかつたんですか?」

「いや、少しさは捜したようですが、結局見つからなかつたようです。それに彼は都内を出る前にも、捜すな、って何度も言つていたようですからね」

「そういうことですか。それにしても、両親もいないのに、よくそんなに情報が集まりましたね」

野田の言葉に、「そんなことは」と澤田は謙遜した態度になる。

「彼の両親が住んでいた家の近所の方に聞いたら、すぐに集まりましたよ。黒川さんとは長い付き合いだからね、などと言つていまし

たし

車は信号を次に左へ曲って、そのまま真っ直ぐと進んでいく。

「彼、今は偽名でも使っているんでしょうか？」

「そうかもせんね。そうでなければ、簡単に見つかると思いますし」

野田はタバコをくわえながら、藤森の質問にそう答えた。

「あっ！ あそこでです！」

澤田が突然、無駄に大きな声を出したので、野田はくわえていたタバコを落としそうになつたが、どうにか落とさずに済んだのでそのままライターで火をつけた。残りの一人も一瞬驚いたが、彼女はそのことに全く気がついていない様子で、ただ微笑んでいる。そんな彼女を見て、どこか抜けている部分があるのかもしれないな、と桐谷は思った。

野田は、彼女の指差した店の駐車場に車を入れていった。車から降りると、早速中へと入つていく。

「ここ、本当においしいんですよ」

そう言いながら微笑んでいる彼女を見て、少し呆れた表情になる桐谷だった。

四人は並んでカウンターに座り、店主だと思われる三十代の男に、それぞれラーメンを注文すると、今まで捜査ということで緊迫していた雰囲気とは一転して、和やかな雰囲気になっていた。

それは、桐谷にとつても嬉しいことだつた。こんなところまで来ても緊張していたら、この先身が持たない気がしたのである。

「そういえば、桐谷さんは小説家なんですよね？」

一番右側に座っている桐谷に向かつて、その真逆に座っていた藤森が、身を前に乗り出すような格好で、聞いてきた。

「はい。そうですけど」

「どんな小説を書いているんですか？ 例えば、ジャンルとか」  
すると、桐谷の隣に座っていた澤田も、興味の目で桐谷を見る。

「私も、聞きたかったんだよね。で、何書いてるの？」

二人に質問されたのなら仕方がないと、桐谷はあきらめた。実際、特に隠す必要もないのだが。

「そうですね。一応、ミステリーが主なジャンルですね。ホラーも、たまには書きますけど」

「ミステリーですか。桐谷さん、結構有名な作家さんなんですよね？ 失礼ながら、私は読んだことがありますんけど」

そこで、その藤森の隣にいる野田が、呆れたように言つ。

「藤森巡査は、その小説を読んだことがないのではなくて、もとから小説は読まないんですね？」

「はい。そうでした」

と、藤森は頭をかきながら苦笑いする。周囲もつられて笑つた。

「私も読んだことないんだよね。でも、今度買つつもり」

澤田はそう微笑んだが、桐谷は逆に少し寂しくなつた。多少有名だとは言つても、やはりこの程度なのか、と。

「私は、読んだことがありますよ」

「え？ そつなんですか？」

野田の発言に反応したのは、藤森だった。

「ええ。ベストセラーになつた……確か『永遠なる宴』でしたよね？ あれば、面白かつたですね」

桐谷は、その言葉に嬉しくならないはずがなかつた。さすが野田さん、と心の中で呟いたくらいである。

「ありがとうございます」

「へえ。なら、私もそれを買おうかな」

などと澤田が言つたことも、野田の言葉で気分が良くなつた桐谷にとつては、嬉しいことだつた。先ほど抱いた寂しさは、すでに消えていたのである。

そのとき、頼んでいたラーメンが運ばれてきたので、四人は箸を手に取つてそれぞれ食べはじめた。

「 そう言えれば」

おいしそうにラーメンをすすつていた澤田が、おもむろに口を開いた。

「耕介くんは、専業作家なの？」

その質問に、桐谷は一瞬たじろいだ。

作家を専業として食べていいのは、簡単なことではない。と言つより、今の時代は出版不況なので、よほど売れていなければ、ほぼ不可能と言えるだろう。多くの作家は、安定した収入を得るために兼業作家として、日中は本業に専念し、帰宅してから作品を書く、というのが一般的である。

たとえ売れている作家でも、突然売れなくなつたり、不測の事態で打ち切りになつたりすることがあるので、そういう意味でも、兼業作家が圧倒的に多数なのである。

桐谷も、デビュー当時こそ兼業だったが、売ってきたこともあって、専業としての道を選び、今までどうにかやつてきたが、最近は売れ行きも悪くなつてきていたので、少し心配だったのである。

そんなことで澤田のこの質問は、遠回しではあつたが、ある意味

で桐谷の痛いところを突いていた。だが、反対に專業を自慢できるところもある。だが、桐谷はあえてそうは振舞わなかつた。

「まあ、一応……」

桐谷は咳くように答えると、田の前にあるラーメンを大げさにす

すつた。

その行動の意味を全く理解できなかつた澤田は、不思議そうに首を傾げたが、桐谷もあまり話そつとしないので、三人と同じく食事に集中することにした。

唯一の女性である澤田が、当然のように最後に食べ終わると、野田が会計を済まして、四人は店の外へと出た。

「いやあ、本当にうまかったですね」

「ですよね？ 私、ここは気に入っているんですよ」

そんなやり取りをしながら、四人は車に乗り込んだ。席順は、一度目だが変わらない。

「時間も、ちょうどいいですね」

N社からこの店までが二十分程度だったのと、往復すれば約四十分かかる。食事が一時間ほどかかったので、二時間には満たないが、それでもすでに十二時は回つており、十分な時間帯だつた。

N社に向かつている間、話の主旨は再び黒川隼人の双子の弟つまり、黒川誠についてだつた。

「現在も、捜索中なんですね？」

その確信を持つてゐるからこそ、澤田は確認も含めて質問をしたのだろうと、野田は返答するのを少し躊躇した。実際、彼の捜索は事件後一週間で打ち切りになつてゐたのである。それを知つて彼女が不満を漏らすことは、野田にとつても対応し難いことだつた。

野田は、できる限りそつとならないうにと、妙に慎重になつて言

葉を選ぶ。

「……いや、できる限りの手は打つたのですが、見つかりそうもなかつたので、打ち切りとなつてしましましたね」

「そうなんですか」

自分よりも立場上地位のない澤田に対してだつたが、それでも彼女はなかなか鋭いところを突いてくるので、野田は思わず溜め息をついた。

「でも、私思うんですが……」

そんな澤田が、また口を開く。

「その黒川誠が、事件に関係しているんじゃないかと思うんですよ。もしかすると、犯人ではないかとも」

「確かに、その線はあるかもしませんね」

野田も、その可能性は考えているようだつた。念を押すように、

澤田は続ける。

「藤森巡査の言つていた犯行方法にも、当てはまっていますし」「確かに、当てはまりますね」

と、藤森も頷く。桐谷は、その犯行方法について少し気になつたが、彼らの話を邪魔するわけにはいなかいだろうと、あえて口には出さなかつた。

「しかしそうなると、白崎や星野についてはどうなるんでしょう？もし、黒川誠が犯人だつたとしたら、彼らの説明が難しくなりますよね？」

「まあ、それはそうなんですが……」

そう言いながら、澤田は後ろに座つている桐谷を横目でちらつと見る。桐谷は、まさかまだ自分が疑われているのかと少し焦つたが、大丈夫だらうと自分に言い聞かせて、押しとどめた。

「まあ、親と喧嘩していたということですから、その可能性は十分考えられます、黒川隼人との仲はどうだつたんでしょう？」

「それは……私がさつき言つたことは矛盾しますが、仲が悪かつたのは両親だけで、彼との仲は良かつたと聞いていますね。友人もたくさんいたようですし」

「なるほど。まあ、人間の気持ちなんてものは、すぐに変わってしまひますからね。反対に、仲が良かつたからこそ……というのもあ

ります

「ですね」

「…………と言つても、見つけられないのでは、確かめようもないですね

突然、藤森が呆れたように言つた。すると野田は、唸るようにな考  
える。

「やはり、もう一度搜索した方がいいかもしませんね」

「そうしましょうよ！」

澤田は、強調した。

「事件を一刻も早く解決するためには、たとえ少しの可能性でも追  
究するべきだと思います。星野という人を捜すだけでは、心細いで  
すし」

それに、と彼女は桐谷の方を見て続けた。

「耕介くんの容疑も、早く完全に晴らしてあげたいんですよ」

その言葉に桐谷は、やはりまだ疑われていたのか、と思つ前に、  
彼女に対して素直に感謝していた。

「そうですね。もう一度捜しましょうか」

野田がそう同意したところで、車はN社の前に到着した。

先ほど同様、四人は中のロビーへと入つていく。すると偶然な  
か、そこには杉上がいた。彼は四人の姿を確認すると、少し緊張し  
た面持ちで歩み寄つてくる。

「…………お手数をかけて、すみません」

「いえ。それより、星野義雄は？」

「はい。すでに本社の方に戻つております」

「そうですか。では、早速面会させていただきたいのですが」

「わかりました。では、先ほどの応接室の方でお待ちください」

そう言つて杉上は一礼すると、応接室とは反対の右の方へと歩い  
ていった。

四人は言われた通り先ほどの応接室に入り、彼が来るまでの間、  
しばし休憩する。

しばらくしてドアが開くと、杉上に続いて、桐谷よりは少し年上だと思われるくらいの比較的若い男が入ってきた。

「いらっしゃが、星野さんです」

桐谷は目を見張った。義雄という名前だから、もつとがつちりとした男らしい、四十を越えた中年男を想像していたのだが、目の前にいる星野義雄は、貧弱そうな体つきに背も少し低く、一見頼りなさそうな感じだったのである。だが、話によれば切れ者ということで、人は見かけによらず、それでいて名前にもよらないな、と桐谷は改めて思った。

「星野義雄です」

と、彼は見かけによらない太めの声で言った。これにも桐谷は少し驚いたが、よく見ると、その人はあの白崎と同じく、鋭かつた。

「一応のことは、伝えましたので」

「わかりました」

野田は短く答えると、長椅子に今一度座り直した。杉上と星野も下座の方に座り、対面する格好になる。

「では、早速お話を伺いたいと思います」

だが、そう言つた野田に対する星野の一言は、あまりに冷酷だった。

「話すことなんて、何もありませんよ」

星野は、きつぱりと断言した。その言葉を発するタイミングは絶妙なもので、相手を完全に突き放すような、そんな感じだった。

「……そう言われましても、しつかりと話を聞かなければ、あなたが私たちの捜している星野さんではないということを、確認できないんですよ」

野田がそう対応したが、星野は依然断然とした態度で、言った。

「確認ですか……。つまり、それは証拠ですよね？ 証拠なんてありませんよ。しかし、私はあなたたちの捜している星野ではない。その事実だけで十分ではないですか？」

なんて冷たい人間なんだ。その場にいる誰しもがそう思つた

「ことに間違いはないだろ?」

杉上も、「言い過ぎだ」と小声で注意したが、星野は「すみません」と軽く謝つただけで、その態度を崩そそうとはしなかった。

「しかし、やはり確認させていただかないと、ことらとしても帰ることができません」

野田は少し弱氣だったが、もつと強氣でいつてもいいのでないだろ?か、と桐谷は思つた。警察という立場なら、それが普通ではないか、と。だが、野田がそのような性格ではないということも、桐谷には少しわかつていた。

星野は少し黙つていたが、やがて溜め息をつくと、口を開いた。  
「まあ、いいでしょ。少しの時間なら構いませんよ。と言つても、事実に変わりはないんですけどね」

その皮肉な言葉に、藤森は一瞬、飛びかかりそうになつたが、さすがにそんなことはできないので、ビリビリか感情を押しとどめる。

「ありがとうございます」

やう言つて野田は、質問をはじめた。

星野が少しの時間と言つたからなのか、実際、質問は十分程度で終わつたが、それだけでも野田は確信していた。

この人は本当に白だな、と。それは話の内容からでもあつたし、どんな質問をぶつけても、動搖するしない以前に、表情を何一つ乱さずに平然と、そして自然に答えていたこともあつた。

「本当に申し訳ございません。星野には、私から少し言つておきます」

帰り際、杉上はやう言つて何度も頭を下げていた。野田も、あえて彼を庇うような真似はしなかつた。

四人は車に乗り込み、署へと戻る。

「何なの? あの人は! 常識つてものを知らないのかしら」

澤田は、今まで我慢していただろう不満をぶちまけた。藤森も憤然と頷く。

「本当にですね。あんな人が、よくあんな職務につけたと思いますよ」

そこで野田が、「まあまあ」とつて二人をなだめた。

「確かにそうは思いますが、まあ、人それぞれということでしょう。彼にしても、なぜ疑われなくてはいけないんだと思つたでしょ？」

「警部は、人が良すぎますよ」

野田は軽く微笑んだが、すぐに表情が真剣になる。

「……と言つても、本当に彼は白のようですからね」

その言葉で、それぞれの顔に緊張が戻つた。

「やはり、警部もそう思われましたか？」

「ええ、彼ではないでしょうね。態度、といつより雰囲気から見てもそうですし、しつかりとしたアリバイこそありませんでしたが、事件の日も仕事が入つていたそうですからね。彼は間違いなく白でしうね」

野田が断言すると、藤森は悔しそうに言つた。

「そうですよね。私は、彼が一番怪しいと踏んでいたんですけど……」

「まあ、そう簡単に見つかることでもないですよ」

野田は、なぐさめるように言つた。すると、隣の澤田が少し間を置いて口を開く。

「しかし、そうなると残りは十八人といつことになりますよね」

「そうですね。そう言えば、その残り十八人の捜査はいつごろ終わるんでしょうか？」

と、野田は後ろの藤森に横目で聞いた。

「……ええと、明日には終わるはずです」

「なるほど。明日は、大変な一日になるかもしませんね」

「大変……ですか？」

澤田が、おうむ返しに聞く。

「はい。見つかる つまり怪しいのなら、その人に直接会いに行くつもりですし、見つからないとなれば、それもまた大変ですからね」

「つまり明日は、今までの捜査が実るか、水の泡になるか、という

「」とですね？」

「そういうことですね」

と、野田は微笑んだ。だが、桐谷だけは、明日自分の容疑が晴れるかどうかの重要な日ということで、少し緊張していた。

翌日。空一面晴れ渡る、雲ひとつない快晴だった。

桐谷は、特別署に呼ばればしなかつたが、それでも当然、自分が人生が左右されるかもしれないこの日を、ただ漫然と黙つて過ごすことなどできるはずがない。桐谷は、自分から署に顔を出した。

「桐谷さん、来たんですか」

野田が、少し呆れ気味に言つ。しかし、その表情は昨日とは違つて穏やかだった。

「まあ、今日はいいでしょ。桐谷さんも気になるでしょうし」  
そういうことかと納得し、桐谷は周りを見て、野田しかいないことに気がつく。

「藤森さんと澤田さんは?」

「ええ。もう少しで来ると聞いてます。その情報も持つて」「そうですか」

と、桐谷はひとつ深呼吸して、どうしても聞きたかったことを質問してみる。署に来た理由は、これを聞いたかったことでもあるのだ。

「あの、野田警部」

「はい。何でしょうか?」

「……私はまだ、犯人として見られているんでしょうか?」

途端、野田の表情に緊張が宿り、一方で悲しそうな雰囲気も感じられた。それを見て、桐谷も確信する。

「そうですね。まだ、完全には晴れていません。証拠もないですかね」

「なら……もし、捜している星野が見つかることにでもなれば、私は犯人として逮捕される可能性はあるということですか?」

「……はい。その可能性は十分にあります」

そう言つて、野田は頭を伏せた。

桐谷も、それ以上は何も言わなかつた。そのことは、今までの流れの中から容易に察することができた。だが、今こつしてはつきりと断言させられてしまうと、どうにも焦りや恐怖といつものが生じてくる。だが、その焦りや恐怖は、自分でもどうしようもできない感情で、ただ、その心が動くままに煽られることしかできなかつた。数分の沈黙が続き、桐谷が少し耐えられないなと思はばじめたころ、ようやく藤森と澤田が到着した。

「すみません、警部。少し遅れてしまいました」

「いや、大丈夫だよ。それより、星野についての情報は？」

「はい。残り全員、調べ終わりました。それで、捜査結果は？」

思わず息を呑んだとき、桐谷は澤田が俯いていることに気がついた。そして、よく見ると藤森の顔もどこか優れていない。嫌な予感は、すでにこのときから存在していた。

「残念ながら、全員、白でした……」

誰かが、泣いている……。

そこは、ある教室の一角。床は木造で、その木目に沿つて机が規則正しく並べられている。前方には大きな黒板が、後方には個々のためのロッカーが備わっている。どこにでもありそうな、ただの教室だった。

でも、そこは何か懐かしさを帯びていた。夕日が差し込んでいるせいかもしれない。

そんな教室の隅で、誰かが泣いている。

誰だろう?

周りには誰もいない。そこには、僕とその彼しかいなかつた。

「どうしたの?」

僕は、声をかけてみた。

彼が、ゆっくりと振り向く。くしゃくしゃになつて涙を流しているその顔は、僕に大きな衝撃を与えた。

「どうしたの? 何かあったの?」

僕は、声が少しだきくなつていたと思つ。

「……耕介くん?」

彼の口からやつと出した言葉は、僕の名前だった。

「そうだよ! どうしたの? 隼人!」

僕も、そう言って彼の名前を呼ぶ。彼とは幼馴染で、仲は良かつた。

「僕……あの……」

そのまま、口籠つてしまつ。でも、僕には隼人が何かを言おうと一所懸命になつてゐることが、十分に伝わってきた。

「辛かつたの?」

僕は、優しく言った。隼人は小さく頷くと、震える口を懸命に開こうとする。

「僕……いじめられているんだ」

「そうなの？ なんで？」

よく見れば、彼の制服はボロボロとまではいかないが、ひどく傷ついているように見えた。誰か複数人に、何度も蹴られたようなどだった。

「なんで、いじめられてるの？」

「お母さんが……」

「え？」

「お母さんが、昔、悪いことしてたから……」

「悪いこと？」

「うん。風俗……やつてたから」

僕には、その風俗という言葉はよくわからなかつた。聞いたことあるような、ないような、そんな言葉だつた。

「耕介くんも、やつぱりいじめるの？」

「え？」

「……僕のお母さんが風俗だつたって知つたから、やつぱりいじめるの？」

僕にはその言葉はよくわからなかつたし、たとえ彼の母親が昔何をしていたとしても、彼をいじめる必要はないと思った。

「なんで、いじめなきゃいけないの？」

僕は、素直に言った。

「え？」

「だって、それは隼人の母さんのことで、隼人とは関係ないよ」

それを聞いた彼は、多少の 本当に小さな笑みを浮かべる。

「ありがとう……」

そして、そう言つてくれた。僕は、純粹に嬉しかつた。

そのとき。

突然、勢い良くドアを開く音がして、僕は身体が勝手にびくつとなつて驚いた。後ろを振り向くと、そこには男子生徒が三人いた。

「隼人！」

真ん中の男子が叫んだ。

「一樹……くん」

隼人は、怯えきつた表情で呟く。きっと、あの三人が、特にその真ん中の一樹がいじめているんだと、僕はすぐにわかった。

「なんだ……耕介もいるのか。何してんの？」

僕は、一樹とも仲が良かつた。でも、いつもの彼と何か雰囲気が違う。

「そうか！ お前もいじめてたんだな？」

一樹は笑つた。そのまま、続ける。

「だよな？ そんな汚い子供と仲良くできるわけないよな！」

汚い子供……。

僕はそのとき、ぴんとは来なかつたが、きっと隼人の母親とのことで関係しているのだろうと、何となくわかつた。

「違うよ！ 僕はいじめてなんかいない！」

すると、彼は途端に表情を変えた。

「は？」

そして、再び笑い出す。

「お前、そんな奴のこと庇つてんの？ 馬鹿か？」

その言動に、僕は感情を押さえ切れなくなつた。

「お前の方が馬鹿だよ！ いじめてるのはお前たちだろ？ なんでいじめるのさ！」

「だから言つただろ？ 汚いんだよ」

「汚い？ なんで！」

僕は風俗という言葉を知らなかつたから、汚いという理由もわからなかつた。

「……お前、風俗って言葉知らないだろ？」

そう言つて、少しずつ近づいてくる。周りの一人も、あとに続いて歩いてきた。

「それは……」

僕が何も言い出せないので見て、一樹はまた高らかと笑つた。

「知らないなら無理もないな！まあ、俺はお前と仲を悪くするつもりはないからな。今度教えてやるよ」

「教えていいよ！ そんなの！」

すると、一樹の顔がまた厳しくなる。

「人が丁寧に教えようつて言つてんだ！ 素直に聞いとけ！ お前だつて、それを知つたら隼人を庇うなんて真似、できなくなるさ」

一樹は、僕の目の前まで来た。後ろには、隼人がいる。

「どけよ！」

一樹は、そう言つて僕を無理やり横へ払いのけると、そこにいる怯えた隼人の顔を見て、また高潮に笑つた。

「わかつてんのか？」

一樹は、隼人の顔を睨みつけながら言つた。

「お前の母ちゃんは、金欲しさに股開いて何でもするような最低の女だつたんだぞ？ そして、お前はそんな最低の女から生まれた、最低の子供なんだよ！ そんな分際のくせに、俺たちの前にこの現れやがつて！ むかつぐ奴だな！」

ひどい……。

一樹の言つてていることは、僕にはすべてはわからなかつたが、とにかくひどい。そう思つた。

「……僕のお母さんは、そんな人じやないよ！」

隼人が必死に叫んで抵抗してゐる姿は、なんて哀れで、悲しいのだろう。僕はそう思い、彼をどうにかして助けてあげたい。そう思つた。

「うるせえ！ 自分の立場をわきまえろ！」

そう言つて、一樹の足が上がつたかと思つと、そのまま踏みつけるような格好で、隼人を蹴り飛ばした。

「やめろよ！」

気がつけば、僕は叫んでいた。

「やめろよ！ 隼人をいじめるなよ！」

「ああ？ お前も、いじめられたいのか？」

一樹は、僕を睨みつけた。彼は運動神経が良く、喧嘩も強い。僕のような人間がどう足搔いても、彼に敵うわけがなかつた。

「お前も、殴られたり蹴られたり、痛い思いしたいのかつて聞いてるんだよ！ 返事くらいしろよ！ それとも、怖いのか？」

僕は、何も言い返せなかつた。正直に、怖かつた。

「もう、いいよ……」

隼人が、今にも消え入りそうな声で呟いた。

悔しい。僕はそう思つた。

「お前みたいな弱い人間は、黙つて見てればいいんだよ！」

そう言って、一樹は再び隼人を蹴つた。

「…………」

僕は、何もできなかつた。

目の前で友人が、友人をいじめている。でも、僕には何もできなかつた。

悲しかつた。

辛かつた。

悔しかつた。

ごめんね……隼人。僕には何もできない。力になつてあげられない。

でも、いつか力になつてあげたいと思つた。

本当に、助けてあげたいと思つた……。

場面が、切り替わつた。なぜそうなつたのか、僕にはわからぬないし、意識もしていない。でも、とりあえず場面が切り替わつてくなつていた。つまり、さつきより高い場所にいるのだ。

今度は、教室に人がたくさんいた。

そこもまた、教室だつた。

でも、さつきの教室とは違う。外から眺められる景色が、広く遠くなつっていた。

「ありがとう。耕介」

僕の目の前の男子が、僕にそう言った。隼人だった。ただ、さつきよりも背が高く、顔つきも大人になっていた。

「耕介のおかげで、俺はここまでやつてこられたんだ。本当に感謝してるよ」

そう言つて、隼人は笑ってくれた。僕も自然に笑みがこぼれる。「でも……」

突然、表情が一転して俯くと、彼の拳にぎゅっと力が入った。

「でも、あいつだけは許さない」

彼は振り向き、教室の隅で楽しそうに笑つてゐる一樹を見て、そう言つた。

「あいつだけは絶対に許さない。いつか、復讐してやるんだ」

その表情は憎悪に満ち、歪んでいた。

「やめなよ。そんなことしたって、何も意味がないよ」

「ごめん、耕介。いくら耕介の頼みでも、これだけは譲れないんだ。俺をこんなにしたあいつを、そして、俺の母さんを罵倒したあいつを」

「隼人……」

「いつか、殺してやるんだ」

僕は、彼のそんな言葉を聞いた気がした。

はつとして、桐谷はベッドから飛び起きるような格好で田を見ました。

時刻は、午前四時過ぎ。

全身が汗でびっしょりとしていて、何とも気持ちが悪い。桐谷はベッドから出ると、近くのテーブルに置いてあつたタバコを手に取り、一本に火をつけた。

「夢、だつたのか……」

桐谷は、タバコの煙を吐き出しながら呟いた。また、桐谷はその夢をはっきりと憶えていたのである。何とも現実味を帯びた夢だつた。

だが、少し考えているうちに、いや、と桐谷は思い返した。あれは、夢であつて夢ではないのである。つまり、桐谷の過去の記憶だつた。

一樹と黒川とのあのやり取りも、桐谷の記憶にはしっかりと残つていた。まさに、あの通りだつたのである。

「ひどいよ……一樹」

桐谷は、思わずともそう呟いていた。

一樹とは、あの日以来から話さなくなつてしまつたのである。以前は、性格も合う良い友人だと思っていた。それに、黒川とも仲が良かつたのだ。黒川が一樹を家に誘つているのを何度か見たことを憶えている。

だが、あの出来事が起つてしまつた。つまり、それは黒川がいじめられるきっかけとなつた出来事である。多分、その現場にいたのは一樹だつたのだろう。

親の密談……。

それを隠れて聞いていた一人は　特に黒川本人は、愕然としたに違いない。

そして、その日から一樹は変わつてしまつた。黒川を偏見し、罵倒し、周りの友人にも言いふらす。そして、いつの間にか性格さえも邪道なものになつっていた。

そして、夢でも見たあの黒川の言葉。

そこまで言つていたかは、正直憶えていない。だが、復讐すると言つていたのは、事実だつた。今でも、はつきりと憶えている。

桐谷は、タバコの火を揉み消すと、居間へ行つた。そして、テレビの横にある本棚の一番下の段を探る。そこには、小学校や中学校、高校の卒業文集や今まで得た賞状など、自分の過去に関係するものが数多く入つていた。

その中から、中学校の卒業文集を取り出す。特に見る必要もなかつたが、あの夢を見たせいか、少し懐かくなつた気持ちがあつて、見たくなつたのである。

ページをめくり、懐かしい顔ぶれが目に入る。桐谷は、自分が何組だったのか憶えていなかつたので、順々に見ていくと、三組に自分がいた。

まだ幼く、我ながら可愛いものだな、と桐谷は自嘲氣味に思つた。黒川も、夢で見た通り全く同じだつたのが、意外で少し驚いた。過去の記憶はすごいな、と思つ。一樹もいるはずだと、その名前を探してみた。

「え……」

あまり、信じたくはなかつた。だが、そこにあるのは紛れもない事実。黒川が殺したいと言つた氣がする相手、一樹のことである。

「星野……一樹だと？」

それがあまりにも偶然で、それ故に必然だと思われるその組み合わせ。黒川と一樹との間に起つた過去の出来事。桐谷にとつては、それは单なる過去の思い出のひとつに過ぎなかつた。だが、今こうした状況に立つて、はじめて理解できる。

これは单なる過去の出来事ではなく、今も続いていることだと。あの出来事は、单なるきっかけにしか過ぎなかつたということを。桐谷は、あまりにも恐ろしい事実に対し、何か冷たく、肌寒いものを感じ、無意識のうちに自分の腕をさすつていた。

もちろん、これが真実とは限らない。だが、桐谷の直感はそれが真実だと言つていた。信じたくない。だが、信じざるを得ない。

桐谷はゆつくりと卒業文集を閉じると、それをもとの場所に戻す。一度立ち上がってソファに腰かけると、再びタバコに火をつけた。

深呼吸をするように、ゆつくりと肺全体にタバコの煙をめぐらし、吐く。

そして、桐谷は今日、署に行つてすべてを話すことを決心した。

昔の友人を裏切るような真似で決して本意とは言えないが、それでも不本意というわけではない。事件解決のため、すべてを知るため、そして自分の容疑を晴らすため、桐谷は言わなければならぬと思った。

夢を見たこと。そして、それが原因で卒業文集を見たこと。それらはすべて偶然かもしれない。だが、それこそが自分の運命なのだと、桐谷は思った。

その日、野田と藤森の二人は、早い時間から署に来ていた。

捜査の手詰まり。これ以上捜査を続けても、何も進展がないと二人は考えていた。唯一、期待されるのは黒川誠だが、その線も行方不明ということで簡単な問題ではないし、彼が犯人だという可能性も高いとは言い切れない。そうなると、必然的に桐谷耕介が怪しくなっててくる。

野田も、彼に対する情など入れている余地もなかつた。事件の解決は、結局は最初から何も変わつていないのである。

「甘く見過ぎたね」

野田が言った。それは、星野の捜査のことだつた。

「単に『さん』がつけられていたからと言つて、それで会社の上層部の人間であると決めつけたことが間違ひだつた。もう少し考えるべきだつたんだ」

「すみません。私がそんなことを言つてしまつたので……」

「いや、藤森巡査のせいではないよ。私もそう考えたから、捜査したんだ」

「しかし、今からまた捜査することはできませんよね。第一、人数が多過ぎますし、他の署の方もこれ以上は協力してくれないと想います」

「そりだらうね。黒川誠も見つかる可能性は低そうだ。そうなると、やはり桐谷耕介ということになる」

「何か、少し残念ですね」

「確かにそうだが、そう言つてもいられないだろ。手がかりが、全くないんだ」

「そうですよね。しかし、そうなると桐谷耕介は今までずっと嘘を押し通してきたことになりますよね？」

「そつなんだ。それが少し気にかかる。彼は、自分から積極的に捜査に関与しようとしていたし、何より、あれがすべて嘘だったとは考えにくい」

「私もそう思いますね。しかし、事件自体も妙なんですから、あれくらいの行動はできるとも思います」

「すべて、計画通りの犯行だったというわけか……。しかし、それならなぜ偽装の犯人を特定させなかつたんだ？」

藤森は、少し考える。それから、口を開いた。

「特定しなかつたのではなくて、できなかつたのではないかね？」第一、証拠がないので、無理に偽装の犯人を特定させてしまったら、不自然になると考えたんではないでしょうか」

「なるほど。しかし、では、いざれ自分が捕まる」と予想のうちに入れていたということか？」

「そうかもしません。彼は、簡単に捕まることは嫌だが、自分が罪を犯したことに対する謝罪の気持ちを持っている。だから、他の冤罪者が間違えられて捕まるのが最もいいが、結局自分が捕まえられても後悔はないということではないんですかね」

「それは一理あるな。とりあえず、その桐谷さんを呼んでからだな」

「そうですね。では、私の方から呼んでおきます」

「わかった」

そう言つと、藤森は部屋から出ていった。一人になつた野田は、胸ポケットからタバコとライターを取り出して、火をつける。

「……本当に、桐谷耕介が犯人なのだろうか？」

野田は天井を見上げながら、そう呟いた。

桐谷は夢のせいで早起きしたので、実際はそれで助かっただが、仕事部屋で小説の続きを書いていた。事件のことの方が気になるとは言つても、星野一樹の件で自分が無罪だと証明できる可能性が高いのだから、事件が無事解決しても小説が締め切り日までに書けていなければ、それはまた大変なことになる。

午前九時。桐谷は、小説が一段落したということで休憩を取り、テレビでニュースを見ていた。

当然、署には行くつもりである。だが、桐谷はその前に自分は呼ばれるだろうと思っていた。事件が難航し進展が見受けられないのなら、ついに自分が犯人だと思われても仕方がないと思ったからである。

それはもちろん、桐谷にとつてもあまり嬉しいことではないが、彼らの立場上、そうせざるを得ないということはわかつていて。そして、そこで星野一樹のことをすべて話すつもりである。

だが、もし星野一樹が犯人ではなかつたとしたら……。

その可能性は十分に考えられる。だが、桐谷はあえてそのことは考えないようにした。万が一そうだとしても、それならそれで、あきらめるしかないだろうということころまで、桐谷の考えは到達していたのである。

言つなれば、これは最後の賭けのようなものだった。それで良い方向に進むなら、それは素直に喜ぶし、その逆なら、それらすべてを受け入れるつもりである。

と、ニュースの天気予報が終わつたところで、電話が鳴つた。来た、と思いながら、桐谷は受話器を取る。手には、少し汗が滲んでいた。

「もしもし。桐谷さんですか？」

相手は、藤森だった。

「はい。どうしました？」

「ええと……。今日、署の方に来てくれませんか？」

「別に構いませんけど……。何かあるんですか？」

桐谷は、少し意地悪く聞いてみる。

「……はい。少しお話することがありますので」

思った通り、返答に逡巡があり、何かを隠しているような口ぶりだった。

「わかりました。あと、私も藤森さんたちにお話したいことがありますので」

「お話……ですか？」

「そうです」

「わかりました。では、昼前には来られますかね？」

「はい、大丈夫です。それでは」

そう言って電話を切ると、桐谷は、よし、と自分に気合を入れた。早速、出かけるために身支度をじょりと思つたが、朝早く起き、少し汗もかいていたので、ひとまずシャワーを浴びることにした。

桐谷に電話したあと、藤森は野田のところへ戻ると、そこには澤田もいた。何やら話していたが、野田は藤森を見ると「どうでしたか？」と聞いてくる。

「はい。昼前には、来られるということです。あと、桐谷さんの方からも私たちに何か話があると言つてこました」

「話……ですか。何の話でしょつか」

「面白、かもしだせませんよ?」

藤森が言った。

「確かに、その可能性は否定できませんが……」

と、野田もその可能性は考えていたようだ。だが少し残念そうに答える。

「もしかすると、新しい情報を持つてきてくれるのかも知れませんよ?」

今度は澤田が言った。だが、周りの人間はもちろん、彼女だって当然、その可能性が低いということは十分承知しているつもりである。だが、それでも、その可能性に賭けてみたいという思いは、誰しも変わらなかつた。

「そうだと、いいですね」

野田にとつても、彼を犯人として見たくはないというのが本音である。だが、もちろん手が尽きれば逮捕するつもりだつた。

「 そういうえば、黒川誠の捜索はどうなんですか？」

突然、話を変えた澤田のその質問には、藤森が答える。

「いや、まだ見つかっていない」というより、一向に見つかる気配すらないような状態ですね。やはり、捜し出すのは厳しいと思います」

「 そうですか……」

澤田は、消沈したような声で言つた

「他に、何か手がかりのようなものは？」

だが、野田も藤森も、黙つて首を横に振るだけだつた。

シャワーを浴び終わり、支度も終わつた桐谷は、早速署の方に行くことにした。現在、時刻は十時少し過ぎで、車で約三十分かかることを考えれば、十一時前には到着することになる。

桐谷は車を運転している間、ずっと星野一樹のことを考えていた。星野一樹とは、小学、中学時代の友人である。友人といっても、あの黒川との事件からは話さなくなつてしまつたが、それでも、一応友人である。高校は違うところへ行つたようだが、詳しくは知らない。

無邪気な性格で、勉強こそあまりできなかつたが、運動神経は抜群で、それ故に喧嘩も強かつた。無邪気で喧嘩というのも少し矛盾していそうだが、無邪気さ つまり考え方が単純で、悪気はないが実際は悪いことをしてしまうことがあり、故に他人の悪感情を買うことにも多かつたための結果である。

そのせいなのか、黒川の母親のことには素直な衝撃を受けたようだ、それで性格が少し歪んでしまったのかもしない。彼を特に庇おうというつもりではないが、それでも、中学時代の後半では、黒川に対しても謝罪の気持ちを持つて、謝つていたこともある。その点から見れば、本当に悪人というわけではなく、どちらかと言えば、良い人という印象もないわけでもなかった。

ただ、黒川にして見れば当然のように悪人で、決して許そうとはしていなかつた。桐谷からも、もういにだらうと黙つてみるのだが、まるで意味をなさなかつた。

そして、桐谷にとつては、それですべてが終わりだと思っていた。過去はすでに清算されたと思っていたのである。だが、事実は違つていたようだつた。

### 黒川の死。

白崎の電話の相手であつた、星野という人。

そして、偶然なのか、あの夢を見た。

それらの事実が組み合わさつて、はじめてあの事件の解決へと繋がつていいく。それは単に、桐谷の思い込みの可能性もある。だが、何度も言つた通り、桐谷にはそれが真実だとしか考えられなかつた。だが、単に星野が黒川を殺したとも考えにくい。彼の性格は、本当は良い人間のものなのだ。では、なぜあの事件が起きたか。

桐谷は、こう考えていた。

つまり、星野は黒川に対し、もういじめを起こそなどという悪い気持ちはまるでなく、反対に謝罪の気持ちを持っていた。だが、黒川は彼に対し、復讐しようという気持ちを持つてゐる。

そこで黒川は、何らかの方法で星野に対して嫌がらせや、その他復讐のような行為を続けてきたのだろう。星野は何度も謝るが、黒川は決して許そとしない。そのうち、星野はそれに耐えられなくなり、殺してしまつた。

何とも悲しいものではあるが、桐谷はこれが真実だと思っていた。そんなことを考えているうちに、車は署に到着した。早速中へ入

つていき、野田たちとまずは挨拶を交わす。

「それで、話というのは何ですか？」

桐谷の方から、先に言つた。その内容は大体わかつてていたが、一応、聞いてみる。

「……いや、それより桐谷さんから先に話してくださいよ」

藤森が、何か不自然な感じで返す。桐谷も、それほど意地悪くするつもりないので、この辺でからかうことはやめた。

「わかりました」

そう言つて桐谷は、星野一樹についてのことを一切何も隠さずにすべて話した。

話している間、三人は黙つて聞いていたが、その表情は少し安心していた。それは、桐谷が新しい情報を持ってきてくれたということもあるし、これで事件が解決されるかもしれないという思いもある。だが、それよりも、彼を犯人として逮捕する可能性が、また少し低くなつたことに対する喜びの方が大きかった。

「なるほど」

話をすべて聞き終わつた野田が、そう呟いた。

「では、早速調べてみましよう。藤森さん、お願ひします」

「わかりました」

藤森が部屋を出ていく。残つた三人のうち、澤田が口を開いた。

「それにしても、耕介くん、すごいね？」

「すごい？ 何が？」

「だって、こんなタイミングでそんな夢を見たんでしょう？ すごいよ。偶然としても、すごい」

断言させられて、桐谷は苦笑を浮かべた。

「何か、そんな力があるんじゃない？」

「まさか」

そんなことで談笑していると、野田が突然口を開く。

「……桐谷さん」

野田の真剣な表情に、一人は思わず無言になつた。

「何ですか？」

桐谷が、恐る恐る聞いてみる。

「私たちからも、話があると言つていましたよね？　そのことなんですが……」

そのことが、と桐谷は短く息をついた。

「わかつていますよ。私を犯人として白状させようと、そんな話をしようとしていたんですね？」

「わかつてたんだ……」

眩いたのは、澤田だつた。その表情は、少し寂しそうである。

「うん。星野が見つからないとなれば、ついに自分が疑われても無理もないかなって」

「そつか」

「でも、大丈夫だよ。そんなときにあの夢を見たんだから、まだ俺も神に見捨てられたわけじゃないってね」

桐谷は、少し無理をして笑つた。そんな彼を見て、野田は静かに咳く。

「神……か」

だが、その言葉は桐谷と澤田には聞こえなかつたようで、二人は再び話はじめる。いや、聞こえなくてよかつた、と野田は思った。

次の日。桐谷は、ぜひ星野一樹と対面したいということでの許可をどうにかもらい、再び署の方に顔を出すことになった。

前日、藤森から電話があつたとき、星野一樹は自分の罪を認めたということだつた。だが、自分はやつていないという矛盾した証言もあるとのことだつた。

電話では特に理解し難かつたので、それから野田に電話して、許可をもらつたということである。

昼過ぎに署へと行き、取調室に入ると、野田に澤田、あともう一人つまり星野一樹がいた。藤森がいないようだつたが、特に気にはしなかつた。

「お前が……あの耕介か？」

事前から知らっていたらしく、桐谷を見た星野の第一声が、それだつた。

「そうだよ、一樹……」

星野は、半袖のTシャツにジーンズというラフな格好で、その髪は茶色に染めてあつた。その服装も、今日は休日であり、その真昼に星野の自宅を野田たちが訪れ、そのまま署に行くことになつたとということからである。

「懐かしいな」

「そうだな」

星野は、憂鬱な表情だつた。それも無理はない。彼が犯人なのだから。

「いや、彼は教唆犯ですね」

「きょうさはん？」

野田の言葉に、桐谷は思わずおうむ返しする。

「はい。簡単に言えば、共犯ですね。彼は、他人に殺人を依頼して、黒川隼人を殺してもらつたんですよ」

「え？ ということは、つまり……」

「はい。彼の他にも、実際に黒川隼人を殺害した犯人 つまり、正犯がいるというわけです」

「じゃあ、その正犯っていうのは、まさかあの白崎？」

「そうでしょうね。本名は、宇田正則という男性だそうです。まあ、彼いわく殺し屋ということですが」

「殺し屋？ そなのが本当に実在するんですか？」

彼の真つ当な疑問に、野田は少し唸つた。

「いや、わかりませんが、彼がいるのは事実ですかね……」

「そうですよね。それで、もう調べたんですか？」

「いや、今調べているところです。藤森巡査に」

「だから、調べなくてもいいって言つてるじゃないですか」

突然、星野が言った。

「彼は、もう死んでいるんですから」

「死んでいる？」

桐谷が返した。星野は「そうさ」と言ひつ。

「彼は、もう死んでるんだ。間違いないよ

「どういふことです？」

と、桐谷は野田に聞いた。野田は、氣難しそうな顔をする。

「事件のとき、四人が殺害されましたよね。黒川隼人とその両親、あとその友人だと。彼は、その友人が宇田正則だと言つんですよ」

「……でも、どうしてわかるの？」

次は、星野に聞く。

「どうしてつて……そりやあ、直感だよ」

「直感つて」

星野の呆れた発言に、桐谷は肩を落とした。だが、星野は続ける。「俺は当然事件に関係してるから、そのニュースとかをしつかりとチェックしてきた。そしたら、変なんだよ。俺は黒川隼人だけを殺してくれと頼んだはずなのに、どうしてか彼の両親も死んでるんだ。それに、その友人もつて……。それに、そのうち二つの遺体は顔を刻まれ、その上バラバラだと聞いた。これなら、捕まればまず死刑だろ？なぜそんな真似をするんだ？俺はそう考えて、あるひとつ結論を導き出したのさ。それはつまり、俺と宇田の他に、第三者がいるとね」

「……その話は、聞いていませんでしたね」と、野田が言った。

「第三者ですか……。確かに、その話が本当なら、おかしいですね」「そうですよ。だから、その正体不明の友人が宇田であると、俺は直感したんだ」

「なるほど。一理ありますね」

「わかつてくれて嬉しいです。それで、だから調べなくてわかるんですよ」

「いや、一応調べてみないと、その遺体が本当に宇田正則なのかも

「わかりませんし」

「それなら、まあ、構いませんけど」

星野の表情は、少しの落ち着きと安堵を含んでいた。

「でも、どうして隼人を殺そうと思つたの？」

桐谷が聞くと、星野は途端に表情を歪ませ、溜め息をついた。  
「それは、お前なら大体わかるだろ？　俺は何度も謝つたんだ。でも、あいつは許してくれなくて、俺に何度も嫌がらせをしてくる。その度にも謝つたんだ。でも、許してくれない。そのうち、俺の方が耐えられなくなつてきちまつた。でも、自分では殺せない。だから、宇田っていう殺し屋に頼んだんだよ」

星野は、終始俯いていた。

「それに……」

「それに？」

「俺は、ほんせいやめてくれって、宇田に頼んだんだよ」

「え？」

桐谷は、思わず疑問を声にする。すると、野田が続けるように言った。

「どうこいつとか、その話を詳しく聞かせてもらひませんか？」

「…………わかりました。では、最初からゆつくりとお話ししますよ」

星野はそう言つて小さく頷くと、その口と手元にて、少しずつ話しあじめた。

俺は中学一年生のとき、同級生である黒川隼人を約半年間いじめた。彼の母親が元風俗嬢だつたという、ただそれだけの理由で。そのことは、紛れもない事実である。当然、反省しなければならない。ただ、それを知つたのも、彼が俺にとつて良い友人だつたらでもあつた。

まだ、夏休み前だつたと思う。

その日、俺は隼人に誘われて、彼の家に遊びに行くことになった。一年生のころからも仲が良く、以前も何度か行つたことがあつたが、その日はいつもと違つた、というより、違うことが起つた。

彼の家は街中にあり、その住宅街の一角、その白い一階建ての軒家が隼人とその両親が住む家だつた。弟もいると聞いていたが、見たことはなかつた。

俺はいつものように彼の家に上がり、「お邪魔します」と一言挨拶してから、彼の部屋が一階だったので、彼が階段を上るのをあとについていこうとした。だが、そのとき彼は階段を上る直前で急に立ち止まると、横にあつたドアの隙間から居間の方を見ていた。「どうしたの?」「どうしたの?」

俺は不思議そうに聞いてみると、彼の表情が少しほころんだ。

「なんか……話してるみたい」

そのこと自体、特別変でもないだろうと俺もその隙間から覗いてみると、なるほど何か深刻そうに話しているようだつた。

「少し、盗み聞きしちゃおうか」

と、彼は楽しそうに言つるので、悪い気がしてあまり乗り気でなかつた俺も、彼に従つことにした。

少し距離もあつたので、その細部までは聞き取れなかつたが、たまに大きな声で話すのを聞いて、その話の大体の内容はわかつた。

その話は、彼の母親が昔風俗をやっていて、そのことは、年ごろ

でもある隼人には、絶対に間違つても言つてはいけない、という内容だつた。

「いいか？ 絶対だからな」

彼の父親が、そう何度も言つていた。

「話すときはいざれ来るだらうから、そのときに話そつ。だから、今は間違つても口に出すなよ」

そんなやり取りを見て、その実の息子である隼人がどんな顔をしていたのかは、憶えていない、というより、見ていなかつたと思う。ただ、そのとき俺の頭の中では、色々な思考が巡つていた。

### 風俗。

その言葉に対する俺の印象は、とても悪いものだつた。それは、年ごろとあつてか、周りの人間から風のように流れてきた話で、ある程度その内容は知つていたことがあるが、それ以上に俺の母親から色々言われていたのである。

純粹な中学生にそんなことを教える、というより話すること自体、俺の母親がおかしかつたのかもしれないが、それが事実だつた。そんなことで、俺にとって風俗、または風俗嬢という言葉は、いやらしい、淫らなどといった表現はあまりピンと来ないものがあつたので、悪いことや汚いなどといった偏見にも似た印象で形作られていた。

その密談を聞いていたときも、俺の脳裏ではその悪いことや汚いといった印象が強く生まれていて、その印象は目の前の友人である黒川隼人にまで及んだのである。

それが、彼を罵倒し、いじめることへの原因となつた。だが、もしその間、一度でも冷静になれたら、いじめはすぐに終着したかも知れなかつた。というのも、俺の精神が少し狂つていた、というより歪んでいたのである。

俺は、自分で言つるのは少し変なことかもしれないが、無邪氣で素直な性格だつた。だから、だからこそ、その事実に素直に衝撃を受けたのである。そして、彼に対しても汚いという印象で、それが素

直な気持ちのままで維持されてしまった。

だから、いじめを続けてしまった。だが、そのいじめも約半年後に担任の教師にばれ、反省文も書かされ、それで終わったのである。そして、そのときになつて、俺ははじめて自分の起こした行動の愚かさを知り、彼に対して謝罪の気持ちを持った。

彼の母親が元風俗嬢。ただそれだけの理由で、加えて、それはもう過去の話である。そんなことでいじめを起こした自分が馬鹿馬鹿しくて、愚かで仕方なかつた。

だから、謝つた。彼に謝ろうとした。自分の愚行を、どうにか形だけでも謝ろうとしたのである。それしか、できなかつた。それが、精一杯の彼への償いだつたのだ。

だが、彼はどうしても許してくれない。何度も謝つても、何をしても決して許してはくれなかつた。だが、それでまた俺が苛立つたり、いじめたくなつたりすることは、一度もなかつた。こんなことをしてしまつたのだから、許してくれないのは当たり前だな、と思つていたのである。

だから、俺はせめて彼の手助けになることは何かと探し、実際はどうだつたかはわからないが、できる限りそうしたつもりだつた。だが、やはり卒業するその日も、許してはくれなかつた。

俺は憂鬱な気分だつたが、それよりも、この経験を活かして、これから的人生をしつかりと生きていこう、そんなふうにさえ思つたのだ。

だが、彼とは仲良くなりたかつた。だから俺は、自分の住所と携帯番号などを書いた紙をその卒業する日に渡した。

いつか、彼と笑つて話せることを夢見て……。

そんな希望を持つて、渡した。だが、結果的にそれが最悪の事態を招くことになつてしまつたのである。いや、たとえその紙を渡さなかつたとしても、結果は変わらなかつたのかもしれない。嫌がらせ……。それが彼の復讐としての形だつた。

最初は、何てこともない單なるいたずら電話だつた。そして、俺

もその相手が黒川隼人だとは知らなかつた。ただ、最近いたずら電話が多いな、とその程度の認識でしかなかつたのである。

だが、それが年を重ねることにつれて、特に成人を迎えてから、だんだんとひどいものになつてきた。知らないメールアドレスから送られてくるメールボムや、見覚えのない請求書などがその例である。

それでも、俺はそれらを無視し続けた。誰からのものかもわからなかつたし、どうせたちの悪い、最近よくニュースなどで問題となつてゐる詐欺のひとつだと考えていたのである。自ら干渉しようとななければ、そして騙されなければ、決して自分には被害が及ばないと思つていた。

だが、そんな楽観的な考えでは済まなかつた。そのいたずらは、無視できないところまで、行つてしまつたのである。それが、今から半年ほど前のことだつた。

俺は、二十五歳でひとつ歳下の女性と結婚し、子供もいた。本当に幸せだった。幸せ過ぎた。だが、それを黒川隼人に壊されてしまつたのである。

俺は、今から一年ほど前、中学校の同窓会に呼ばれた。そのときも、黒川隼人の存在は当然憶えていた。そして、きっと楽しく話ができるだろうと思っていたのである。

だが、事実は違つた。

「どうだ？ 俺の復讐は？」

彼が、俺に近寄つてきて唯一浴びせた一言。そのあと、またすぐに違うところへ行つてしまつたが、俺はその言葉を忘れることはなかつた。

最初は、意味がわからなかつた。彼から復讐された憶えはないし、むしろ会つてさえもいない。だが、彼の言葉が嘘だとは思えなかつた。

ということは、どういうことだろう。

俺は考えた結果、今までのいたずらなどは、すべて彼の仕業かも

しれないという結論に至った。だが、それが本當かはまだ断言できない。だから、俺はその真偽を確かめるために、同窓会が終わったあと、俺は自分で彼の住所を調べ、そこに行くことにした。

そして、そこでしつかり話し合おうと思つていたのである。

だが、彼の態度は素つ氣無かつた。

「何だよ？ 何か用か？」

俺も彼の態度に憤慨するわけでもなく、どうにか話をしようつと試みたのだが、彼は俺を家に入れる事もなく、ただ一方的に話されて終わりだつた。

「用がないんなら、帰つてくれないかな？ 言つとくけど、俺はお前を許す気は全くないし、復讐だつて続く。でも、俺ももう面倒になつてきたから、あと一回くらいで終わらせといてやるよ。感謝するんだな」

そう言つて笑い、玄関のドアを乱暴に閉めた。そのとき、彼が俺を睨んでいたのを憶えている。他にも、何か色々言つていた気がしたが、俺はただ漠然と彼の言葉を意味も考えずに浴びていただけだったのではつきりとは憶えていなかつた。

帰りの車の中で、彼に対しての苛立ちを少し覚えたが、それでも自分がやつたことを考えれば、と解釈した。そして、あと一回などと言つていたので、それを我慢すれば終わりだと思つたのである。だが、それは我慢ならなかつた。

俺の幸せを壊したのだ。

同窓会で、仲の良かつた一人の女子と一緒に飲んだり、楽しそうに話したりしている写真。それが、何枚も家に送られてきたのだ。それには当然、妻が怒つた。だが、俺はもとから同窓会に行くと伝えていたこともあつたし、誰かのいたずらだと正確には復讐だが、そう言つて、その場はどうにかしのげたのである。

だが、それだけでは済まされなかつた。

その同窓会の日、一度解散したあとに一次会もやろうとすることになつて、そのために歩いて場所を移動した。そこには俺もいて、

その送られてきた写真の女子もいた。彼女とは中学時代、他の男子並みに仲が良く、だからと言って恋愛感情などはない、ただの女友達の一人に過ぎなかつたが、偶然にもそのとき、酔つていた彼女を俺は手を引いて歩いていたのである。

そんな場面を写真に撮られた。夜の街を歩く、それもうまい具合にツーショットという形だったのである。

そしてその写真は、はじめの店での写真が送られてきてから、その三日後に送られてきた。そのタイミングが、絶妙だったのである。それが、はじめの写真と一緒に送られてきたのなら、どうにか対処できたかもしれない。だが、そのタイミングは妻にとって、違う日に撮られた写真だと解釈されてしまうのには十分だった。

そうなれば、もう終わりだつた。俺も何度も説得を試みたのだが、妻は浮気だと言って聞かない。妻は、その写真が誰から、何のために送られてきたのかなど考える余裕もなかつたようで、俺はありもしない浮気という濡れ衣を着せられた。

そして、結局離婚してしまったのである。

今までの幸せは、一瞬にして消え失せてしまつた。そして、残つたものは黒川隼人に対する復讐心だつたのである。

彼には、何度も自分の過ちを謝罪した。だが、結局こんなことまでされてしまつた。当然、ここまでされて許すことなどできるわけがない。

今までずつと我慢してきたのに、彼はそれを最悪の形で打ち碎いた。俺は、彼に対しこれ以上ないほどの憎悪を抱いたのである。

彼を殺したい。殺してやりたい。そう思つてしまつた。残りの一回をやられる前に殺さなければ。そう思つてしまつたのである。

そして偶然にも、本当に偶然に、宇田正則という殺し屋に出会つてしまつた。

俺がバーのカウンターで、気を晴らすため毎夜のように酒を飲み食らつっていたある日、その隣に座つた一人の男が宇田だつた。

軽い茶髪にジャケットを羽織つた、自分よりもやや若いと見られ

る男。そんな男が俺の隣に座って、話しかけてきたのである。

「どうしたんだい？ そんな暗い顔して」

優しく声をかけてくれたせいなのか、それとも多少酔っていたせいなのか、俺はそこですべてを、自分の不満も含めて話してしまった。

ある友人を中学時代にいじめたこと。

その友人からの復讐のせいで、妻と離婚してしまったこと。

そして、その話を真剣に聞いてくれた彼に、俺は感謝と安らぎさえ感じてしまったのである。

「あんた……そいつを殺したいのか？」

不意にも彼はそんなことを聞いてきた。話の内容と俺の心情を理解した上で、そう聞いてくれたのだと思い、俺は素直に言った。

「……ああ。殺せるならね」

すると彼はにやりと笑い、俺にしか聞こえないような小さな声で、耳元で囁くように言つたのである。

「俺、実は殺し屋つて奴をやっているんだ」

それを聞いた俺は、どんな顔をして彼を見たのだろう。驚愕と困惑、その中に微かな喜びさえ抱いていたのかもしれない。

「……こ、殺し屋？ 本当か？」

「ああ、本当だ。金さえ出してくれりゃ、殺してやるよ」

俺は思わずとも、身体の芯から震え上がつていた。

今ここに俺の希望が、俺の夢を実現に導いてくれるものが、目の前に存在する。そういう、願つてしまつた。そして、言つてしまつたのである。

あいつを、黒川隼人を殺してくれ、と。

今考えてみれば、そのときにもつと考へるべきだったのだ。

人を殺すといつことが、どうこうことで、何を意味するかといつことを。

そのときの俺は本当に何も考へず、田の前の そして、その先にある欲望のまま、答えを出してしまつた。

加えて、俺は相手が殺し屋ということで、捕まるることは絶対ないだろうという、異様な考え方さえも持ってしまったのである。

そして、そんな甚だしい考え方で俺は黒川隼人の殺害を依頼してしまった。

それが事件から一週間ほど前の話。

それから一週間ほどかけて、俺は宇田にそれ相応の金額を支払い、あと一週間ほどで黒川隼人を殺すということで話はまとまり、俺の依頼は完全に契約という形になつた。

俺は当初こそ、やつと彼を殺せると夜も眠れないほどに興奮していたのだが、その時間が近づいてくるにつれて、俺は違う意味で眠れなくなっていたのである。

本当にこれで良かったのか？

単に一言で表すとそういう意味だが、実際はもっと複雑で多々な考えが、俺の脳裏で巡り絡まつていた。

人を殺す？ それがどういう意味かわかつているのか？

それらはすべて自問であり、俺は頭が痛くなるほどにまで考えた。考え方続けた。

そして、俺は自分のやつたこと これからやろうとしていることに対する恐ろしさ、馬鹿馬鹿しさについてに気づくことができた。人の命は、金で埋められるほど軽いものではない。それに、俺も簡単に自分の人生を投げ出すような真似はしたくない。

それが俺の結論だつた。もちろん、黒川隼人は憎い。俺がいじめたという過去があつても、その復讐で妻と離婚させられたことは許せない。だが、俺が今からやろうとしていることは、それ以上に許されないことではないのか。俺はそう考え、そしてそれに気づいたのが、殺害を予定した前日のことだった。

そして、俺は当然のように殺人の依頼を取り消そうと、宇田に電話をした。だが、少し遅かったのか、きっぱりと断られたのである。「取り消したいだと？ ふざけるな！ 俺だって、生半可な気持ちでこの仕事をやっているわけじゃないんだよ！ 金も用意して、や

ると覚悟を決めたんだから、俺はもうあと戻りする気なんてさらさらないんだ！　お前だって、本当は黒川隼人が憎いんだろ？　殺したいんだろう？　でも、ただ怖いんだろ？　お前の気持ちはそんなもんだったのか？　それと最後にひとつ言つておくが、心配はいらぬ。俺は今まで何人と殺してきているんだ。失敗なんてあり得ない」俺は、彼の言葉を一方的に受けただけで　　あのときの隼人とのことと同じように　　結局何も言い返せず、そのまま電話を切られてしまった。

絶望。

それがあのときの俺の状態を表すに最も相応しかった言葉だろう。だが、それでも俺は人生を左右するかもしれないこの事態にあきらめを捨てず、最後の希望を持つて、もう一度彼に電話をした。そして、その日俺は彼に何度も電話をしたのか、そんなことなど憶えていない。ただ、そのすべてを無視された。その事実だけが残つていたのである。

当日。俺は半ばあきらめながらも、電話を繰り返した。

昼過ぎだつたと思う。その日何度もかのコールだつたが、やつと彼が電話に出たのである。俺はこれが最後のチャンスだと気合を入れたが、彼の口から出た言葉は、俺の最も恐れていた　いや、実際はわかっていたのかもしれない　　言葉だった。

「もう遅い」

一言だつた。だが、その一言こそ俺を絶望のふちに追いやり、精神を崩壊させるほどの威力を持つには、十分過ぎた。といつても、実際に精神が崩壊したわけではない。俺はただ、ほほ放心状態のままにそれからの数日間を過ごしただけだつた。

それでも、日にちが過ぎていくにつれ、俺は少しずつ平常を取り戻してきていた。そのころになつてようやく、その事件に関する記事などに目が届くよになつたのである。

だが、俺はその事件の内容を知つて驚いた。

確かに黒川隼人は殺されている。だが、なぜその両親と友人と思

われる人物まで殺されているのか。俺の疑問は、まずそこからはじまつた。それに、隼人とその友人の死体だけがバラバラにされていることにも当然驚く。

なぜだ？

そして俺は考え抜いた末に、その疑問を解決するひとつの仮説を考えた。

つまり、それは俺と宇田以外にも第三者的存在がいるという仮説だった。

単純に宇田の立場で、こんな真似をする必要がないということ。それだけの理由での仮説だったが、それでも俺は第三者がいることに間違いはないと思った。そして、その友人の所在が不明ということでも、それが宇田であるという可能性を考えたのである。

そして、それが時間の経過と共に妙な確信と変わっていた。

「なるほど。そういうことですか」

星野の話をすべて聞き終えた野田は、ひとつ溜め息をつくなりそう言つた。

「しかし、話を聞けて良かつたと思います。思わぬ収穫もありましたし」

「収穫ですか?」

澤田が、聞き返す。

「はい。話を聞く限り、星野さんは宇田正則の電話番号を知っているんですね?」

あつ、とその場にいた三人がそろつて声を上げた。

「そうです。その電話番号さえあれば、少なくとも宇田正則の所在はつかめると思います。星野さんの仮説の通り、すでに殺されているのかもしれませんが」

「でも……」

突然そう呟いたのは、桐谷だった。

「どうしました?」

「いや、もしかすると、一樹の会つた宇田と俺の会つた白崎は別人かもしません」

「どういうことです?」

野田が聞いた。捜査上、宇田正則が白崎竜輔と名乗つて桐谷と接触したと見ていたから、それは当然の疑問だった。

「ええと。一樹の会つた宇田という人は軽い茶髪だと言つていましたが、私の会つた白崎は黒髪で……それに、今まで染めたことがないようなほどの綺麗な黒髪でしたので」

「なるほど。しかし、そうなると

と、やはりそこで行き詰つてしまつ。もし、宇田と白崎と名乗つた男が別人だとしたら、彼の存在は一体何なのか。すると、そこで

星野の仮説が浮かび上がってくる。

「　白崎と名乗った男が、その第三者といつ可能性もありますね」「でも、それならもつと変じやないですか？」

そう言つたのは、澤田だつた。

「何が、変なんですか？」

「もしその二人が本当に別人なら、その白崎は星野さんとは完全に無関係な人つてことになりますよね？　でも、彼は電話で星野さんと言つたんですよ？」

はつとした顔になる三人に、澤田は満足そうに微笑む。だが、その直後に突然、星野が叫ぶように声を上げた。

「ちょっと待つてください！」

その顔は何か怖いものを見るような、そんな驚愕にも似た表情だった。

「どうしました？」

驚いた三人のうち野田が、咄嗟に声を出す。

「え？　だつて……おかしいな」

だが、星野は独り言を呟くように、そして何かを確認しているような様子だった。その様子はまるで、一人で混乱しているような印象を受け　いや、実際に星野は混乱していたが、三人は何か肌寒いものを感じた。

「少し、落ち着いてください」

野田の一言で、我に返つたよつにはつとした星野の口元は、僅かに震えていた。

「落ち着いて、何か思い当たることがあれば話してください」

「……はい。すみません」

多少は冷静になれたようだが、そこにはまだ落ち着かない雰囲気が見て取れる。

「それで、何か思い当たることがあつたんですか？」

野田が再び聞くと、星野は小さく頷いた。

「はい。俺は、宇田にもそなんですが、電話をした記憶なんてな

いんですよ

その発言に野田は目を丸くする。

「電話をしていない? といつ」とは……」

「その白崎つていう人の電話は、俺からではないと思います」「……」

誰もがその奇妙な事実に対し、呆然とせざるを得なかつた。

「ほ、本当に?」

桐谷が少し慌てるように聞くと、念のためか星野は携帯電話を取り出して、発信履歴を確認する。

「本当だよ。やっぱり発信履歴にもないし、それ以前に俺は知らない番号に電話なんてしない。もしその白崎つて名乗ってる人が俺の知つている人だとしても、履歴にないんだから、していよいよ」

「なら、家から電話したって可能性は?」

「いや、記憶にないな。いつも携帯電話を使ってるから、家の電話をわざわざ使うことなんてないんだよ。だから、ここ最近はずつと使っていない」

「そんな……」

桐谷も絶句し、沈黙が流れる。それを断ち切つたのは、野田だつた。

「 といつ」とは、あなた以外にも星野さんがいるといつ」とで  
しょうか

「そうかもしません」

「しかし、もしそうなら、黒川隼人を巡つてふたつのグループが動いていたということになりますよね」

「ふたつのグループですか……。そんなことが、あるんでしょうか?」

澤田が聞いた。野田は少し悩んだあとに言つ。

「……わかりません。とりあえず、宇田正則の電話番号はわかつたのですから、まずは彼を捜しましょう。話は、それからです」「そうですね」

同意して、澤田は続けた。

「あと、これで耕介くんの無罪は確定しましたよね？」

瞬間、桐谷は心臓が跳ね上がりそうなほどに緊張した。野田の返事に耳を傾ける。

「ですね。まあ、そのもうひとつのがグループに関係しているという可能性がないというわけではないのですが、ほぼゼロですね」

安心するようなしないような、だが、桐谷は十分安心していた。

念のためなのか、澤田が聞いてくる。

「耕介くん、違うよね？」

その間に、桐谷はほつきりとした意思を持つて、そして少し微笑みながら断言した。

「当たり前だ」

その日の捜査も終わり、夕日が沈んで夜が訪れるとき、桐谷と澤田の二人は街中の居酒屋へと足を運んだ。

以前、澤田が言っていたこと、つまり、桐谷の疑いが晴れたということで、実際はまだ僅かに疑われているのだが、その約束通り、飲みにやつてきたのである。

そして今、襖ごとに割り振られた部屋のひとつで、そのテーブルの上に注文したビールなどがあり、ちょうど飲んでいる最中だった。

「でも、良かった。耕介くんの疑いが晴れて」

澤田はぐびぐびビールを呷りながら、不意にそんなことを言った。

「いや、本當はまだ少し疑われているんだけどね」

と、桐谷は多少本氣で返してみたが、澤田は相変わらず「機嫌のよう」に見える。

「でも、もう耕介くんが捕まることはないよ」

「なんで？ まだ疑われているのに」

「だって、もう今までみたいに犯人が捕まらなくて、耕介くんが無

実なのに捕まるつてことはないからよ」「みや

だが、桐谷はまだ理解できないという様子で首を傾げる。

「だから、これからは耕介くんが犯人の一人だつて証拠が見つからなきや捕まらないってこと。わかる?」

そこで桐谷はやつと理解した。

「なるほど。つまり、今までは俺が罪を犯したつていう決定的な証拠がなくても、事件の捜査の進行によつては、俺が一番怪しいとされて捕まる可能性もあつたけど、今は一樹が犯人の一人とわかつているから、俺がその他のグループの一人だと確信がなければ、決して捕まることはないってことか」

「そういうこと。で、それはないんでしょ?」

澤田のまたの確認だつたが、桐谷は笑顔で答える。

「もちろん」

すると、澤田も笑顔になつて返してきた。

桐谷がそんな彼女を見て、可愛いな、と思つたのも束の間、彼女はいきなりテーブルの上に突つ伏したのである。あまり注文していくなかつたので、テーブルの上にはものが少なくて助かつたのだが、その振動のせいで少しこぼれそうになつたビールを見て、桐谷は大いに慌てた。

「お、おい! どうした?」

と、桐谷は不覚にも多少声を荒らげてしまつたが、彼女の様子を見て、それが杞憂だつたということに気がついた。

「ちょっと、飲み過ぎちゃつたみたい……」

そう言つて苦笑している、まだだるそうに突つ伏している澤田の姿に桐谷は呆れの溜め息をつくと共に、酒には弱いのかな、などとも考えていた。

「一度に飲み過ぎるからだよ」

「……はい。ごめんなさい」

澤田は突つ伏したままの姿勢で、今にも眠りそうな様子でそう謝つていたので、桐谷は少し安心し、一人で静かに飲もうとしたのだ

が、数分後、彼女は急に起き上がると、すでに酔っていたのか、また飲みはじめたのである。

「おい、また飲み過ぎると……」

そう注意したのだが、澤田は「大丈夫だよ」などと無責任なことを言い出して聞かず、桐谷は再び溜め息をつくのだった。

結局澤田は飲み続けたので、帰るときにはもうひどく甚だしい状態で、自力で立ち上がるがれない様子だった。仕方がないといや、実は少し嬉しかったのだが、桐谷は彼女に肩を貸してやり、彼女の家まで桐谷が車で送つていくことだったので、そのまま車に乗り込んだ。

「ありがとう……耕介くん」

運転中、助手席でだるそうに座つている澤田が言った。その言葉に、桐谷は素直に嬉しさを感じたが、桐谷はなぜか少し意地悪な気持ちが働き、皮肉気味に言ってみる。

「澤田さんって、酒癖が悪いっていうか、飲みはじめると止まらないんだね」

「……まあ、多分、昔からそういうのよ」

「多分つて？」

「何か、あんまり憶えていないのよね」

ああ、なるほどね、と一人納得し呆れる桐谷だった。

「あのね、耕介くん」

突然、澤田が妙に真剣味を帯びた口調で言ったので　　彼女は酔つてしているので、それほど感じはしなかったのだが、桐谷は少し身構えるように彼女を見た。

「何？」

「私、耕介くんのこと好きだったんだよね」

「え？」

桐谷は、彼女のいきなりの告白に動搖して思わず目をそらしたが、その言葉が過去形だったといつことに気づき、何というか複雑で恥ずかしい気持ちになる。

「へ、へえ……そうだつたんだ」

と、桐谷はあからさまに動搖を隠し平常心を保とうと必死になつてゐるのがわかるような、自分でも無様だと思いながらもそんな返事をした。だが、少し気になつたので横目で彼女をちらつと盗み見ると、彼女は何か遠い過去を懐かしむような顔で、夜空を眺めるように上方を向いていた。

「うん。耕介くん、優しかったから」  
それを見て、桐谷もなせが心休まり落着きを取り戻す

そのまゝ数秒間の沈黙が流れたが、

その辺の数種間の差異が薄れたが突然一を向いていた源氏がはつと何かに気がついたように桐谷へと顔を向けた。

あこめんせきそんとも優しいよ。

「そんなことどう根性は思って、同時に少し取てたしかかる  
気に障つちやつた？」

۱۸۹

一 大丈夫。  
氣にしてないよ」

言ふたあと少し冷たい言ひ方だったかなと桐谷は心配したが

澤田はそれでまた微笑み返してくれた。ほつと安堵する。

「？」

またまた恥ずかしいことを桐谷は思つたが、彼女はからかつた氣はないようだつた。そのことに再び恥ずかしくなつてしまつ。

〔 二〇一 〕

「あ、ありがとう」

と、少し良い雰囲気になつたといひで、車は澤田の住むマンションの前に到着した。

「着いたよ」

「うん。今日は本当にありがとう。楽しかったよ」

そう言って、澤田は車から降りた。窓越しなつて、今度は桐谷が

話しかける。

「それより、澤田さん。明日も捜査なんだよね？ 大丈夫なの？」

「大丈夫。私は寝て次の日になれば、酔いなんてなくなるのよ……」

「多分」

多分というのは、やはり記憶がなくなることが多いからあまり自信がないのだなと思ったが、あえて口には出さなかつた。

「そつか。じゃあ、お休み」

「うん。お休みなさい」

酔いのせいか、澤田は妙に丁重な礼をしてから、マンションの方へと歩いていった。桐谷は見送つて、その姿が見えなくなると車を動かした。

帰り道。桐谷は車を運転しながら、色々と思考を巡らせていた。

「結婚……か」

思わず、そう呟いてしまう。

桐谷自身、あまり意識はしていなかつたが、同年代の知り合いも次々と結婚していくこともあり、そろそろ考えるべき年ごろだとうことはわかつていた。だが、それは言つても、それがいつか訪れるだろう遠い未来の姿という形でしか捉えられない自分がいることも確かだつた。

そもそも、その相手が見当もつかなかつた。もともと女友達も少ない自分が、それでいて作家という人と触れ合う機会が少ない仕事の中で、自然と好感を持てる相手が見つからないのである。

そんなことを考えているうちに自然と澤田の姿が浮かんでくるのは、はたして好感を持つているということなのだろうか。

だが、それは単に自分の周囲という小さな範囲の中で、無理やりに選んだ結果ということではないのか。自分が本当にその人のことが好きで、なおかつ結婚したいと本当に思つてているのか。この人しかしないと本当に思える相手なのか。

そう考へると、やはり澤田は違つよつた気がする。もっとも、このような考へ方は欲張りや理想が高過ぎるなどと言われるかもしれない

ない。だが、それでも桐谷はその考え方を変える気はなかつた。

結婚してから、後悔はしたくなかったのである。離婚すればいい

じやないかと思うかもしれないが、それはもつと嫌だつた。

では、どうするのか。そう考えると、やはり自分の持つ範囲の中から選んでいかなければならぬといつ事実があるような気がして、陰鬱になつてしまつ。

そんな不確かな未来を想像して、桐谷はまた溜め息をつくのだった。

翌日は、編集者との打ち合わせがあつたため、桐谷はその帰りに署の方へ寄るつもりだった。今回も、事前に野田へ連絡をしておいたのである。はじめは反対されたが、白崎や宇田のことが気になつてと粘つた結果、どうにか許可をもらつた。

打ち合わせでは色々と言われて、気分が悪くなかったといえれば嘘だが、どちらかと言うと、やはり事件の方が気にかかっていた。澤田さんは大丈夫なのかな、などと考えつつも署に行くと、そこにはいつもの三人がいた。澤田も、すっかりいつもの様子に戻つている。

桐谷は早速、気になつていたことを聞いてみた。

「それで、宇田正則の所在は掴めたんですか？」

「はい。一応、所在というよりその存在は明らかになつたのですが……」

その妙な言い回しに、桐谷は違和感を覚える。

「存在？ それは、どういうことです？」

それが、と野田は息をついてから言った。

「宇田正則というのは本名ではなくて、偽名だつたんですよ。そしてその本名が、黒川誠でした」

「え？ 黒川誠？」

呆然とする桐谷に構わず、野田は一枚の写真を取り出した。

「はい。これが、黒川誠です」

桐谷も彼とはあまり会つていなく、それも小さいころの記憶だったので、写真を見て彼だと断定することできなかつたが、そこに写っている大人の黒川誠の面相に、何となく見覚えがあるような気がした。

「あれ？ 双子なのに隼人と似てませんね？」

写真を覗き込んでいた澤田が、そう言つた。

「はい。彼らは一卵性双生児なので、似ていなんですよ」「にらんせい、そーせーじ?」

澤田が繰り返した。野田は呆れるような表情になつてから、説明をはじめた。

「はい。双子というのには一種類あつて、別のふたつの卵が受精して生じた場合を一卵性双生児。最初はひとつ卵だったが、発生途中で何らかの原因でふたつに分かれて成長する場合を一卵性双生児と言つんですよ。一卵性の場合は遺伝子が同じなので、性別も同じで姿形も良く似るんです。双生児の場合は別の卵なので、姿形は似ないで性別も異なることがあるんですよ。そして、黒川隼人と誠はその一卵性双生児の方ということです」

「…………」

理解したのか、それともしていないのかはともかく、澤田は頷いていた。それを確認してから、野田は話をもとに戻す。

「しかし、これでやつと事件解決への糸口が見つかりました。つまり、なぜ両親も殺されたのか、ということです。黒川誠が、両親を憎んでいたということは知っていますよね?」

「それは、まあ……知っていますけど」

「つまり、黒川誠は最初から両親も殺すつもりで犯行を起こしたのです」

「なるほど。しかし

と、桐谷がもうひとつ気になつていたことは、やはりあの男の存在である。

「それでは、私の出会つた白崎はどうなるんですか?」

「そこなんですよ。黒川誠が事件の主犯ということはほぼ間違いないでしょから、当然その白崎とも何らかの関わりを持つているはずだと考えます。しかし、実際は星野一樹との関わりはなく、にもかかわらず白崎は、星野さん、と電話で言いました」

「やはり、それは変ですよね」

「はい。ですから、黒川誠は白崎とは関わりを持つておらず、白崎

は他の星野からの電話をもったということになります。そう考えると、やはりふたつのグループが事件に関係している可能性が高くなりますね」

そこまでの説明に皆が納得の表情を浮かべる中、桐谷だけは何か引っかかるものを感じていた。

「ちょっと、思つたんですけど」

そう言つたのも、やはり桐谷だつた。作家をやつてゐるためか、こういうときには妙に頭が冴えるのである。

「何でしちゃう?」

「なんで、その白崎はわざわざ俺に接触したんでしょうか?」

思わずいつもの一人称を使つてしまつたが、構わず桐谷は続けた。「白崎が、一樹ではない星野と関係してゐる可能性があることはわかりました。しかし、前々から思つていたんですが、どうして俺と接触したんでしょう?」

「それは、あなたに罪を着せるためではないですか?」

「でも、なぜ俺なんですか?」

「それは偶然だと思います。罪を着せるには、当然黒川隼人と関係のある人を選びますよね? それに彼は知り合いも少なかつたといふことですから、たとえあなたが選ばれたとしても、何も不思議なことではありません」

だが、それでも桐谷は腑に落ちなかつた。このような正当な説明を受けても、心の中にあるわだかまりは、一向に消える気配がないのだ。

「理屈はわかります。しかし、何か……何かが引っかかるんですよ」「気持ちはわかりますが、それが事実としての可能性が最も高いのですから、それ以上余計な考えを巡らせては、ことはより複雑になつて解決へは辿り着けません」

桐谷も深く考えようと試みるのだが、結局そこで思考は行き詰ってしまった。

「しかし、違和感があるのは私も同じですね」

そう言つたのは、藤森だつた。

「ふたつのグループは、互いに互いを知つていたんでしょ？」「

その言葉に、桐谷は自分の言つたことが少し含んでいるようを感じた。だが、そこから先が出てこない。

「わかりません。しかし、結局は桐谷さんが事件の現場へ出向かされることになつたのですから、少なくとも白崎たちの方が事件を起こしたことには」

そこで、野田も違和感を覚えたようだつた。そのとき鳥肌が立つたのは、桐谷だけではなかつただろう。

「やはり、変ですよ。もしそうなら、星野一樹たちの計画は、未遂に終わつたということになりますよね？」

「しかし、それでは両親を殺す理由、そしてバラバラにする理由もなくなりますね」

野田は、藤森に付け加えるような形で言つた。

「そもそも、どうしてバラバラにしたんでしょうか？」

「それは、黒川誠の黒川隼人に対する憎悪によるものだと考えていますが……」

「しかし、実際は白崎たちが殺害した可能性が高いですね？」

「つまり、白崎たちは星野一樹たちの存在を知つていたということでしょうか？」

「そうかもしません。しかし、それでもその奇妙な点は残りますよね」

「そうですね。どうこうことでしょ？」

「人が頭を悩ましているとき、桐谷は澤田が何か言つたげな様子だといつことに気がついた。

「澤田さん。どうしたの？」

「何か、わかりましたか？」

その様子を伺つた野田も、咄嗟に聞く。彼女は何かと頭が切れるので、何か言つてくれると期待していた。

「はい。今思ったことなんですが、白崎の電話相手については本当に

星野さんという人だつたんでしょうか?」「と、言いますと?」

「白崎が、わざと星野さんと言つた可能性はないんでしょうか? つまり、白崎はすでに一樹たちのことを知つていて、それで耕介くんに罪を着せるためにわざと言つたという可能性です」「では、実際に手を下したのは黒川誠ということですか?」「はい」

「しかし、それでは白崎の行動の意味がわかりませんね。実際は自分で殺さないのに、わざわざ桐谷さんに罪を着せるための行動をしたというのは、不自然ではないですか?」「確かに、と澤田が呟いた。だが、そこで藤森が言う。

「もしかすると、本当は白崎と星野一樹たちは繫がっていたのではないか? それなら、つじつまが合います」

「しかし、星野一樹は彼との関わりはないと言つていましたが」

「それですよ。本当に関わりがなかつたと言い切れますか? 彼が嘘をついているのかもしません」

はつとした野田は、藤森を見て一度頷いた。

「確かにそうですね。彼が嘘をついているのなら」「と、そこで今度は澤田が反対した。

「でも、一樹は罪を認めたんですよ? 嘘をつく理由なんてあるんでしょうか? それに一樹は宇田正則 つまり黒川誠の電話番号まで教えてくれたんです。もし白崎と繫がつていて、耕介くんを犯人したいのなら、そんなことはしませんよね? 一樹は、すべて正直に話していますよ」

少しきつい言い方だつたが、それは正論に違ひなかつた。二人も、それには納得せざるを得ない。そのまま、澤田が続けた。

「もしかしたら、一樹が知らないだけで、黒川誠とは繫がつていたのかもしれません」

「なるほど。しかし、それならどうして桐谷さんに対してものような真似をしたんでしょうか? 星野という名前を出してしまつたら、

間接的に自分たちの存在を教えるということになりますよね？」

澤田は数秒唸つてから、言った。

「さつき言つたこととは変わりますけど、黒川誠が星野という偽名を使って白崎に接近したということはないですか？ そして、白崎は本当に黒川からの電話をもらつて、偶然、名前を出してしまつたんですね？」

「しかし、そうなると黒川誠の考えがわかりませんね。殺人をするつもりで、わざわざ他人を使って偽装の犯人を仕立て上げるということですか？ そんな面倒なこと、しますかね？」

「まだわかりませんが、した可能性はあると思います。白崎はきっと、金で思うように動かされたんでしょうね。黒川誠にしてみれば、耕介くんがまず疑われて、その次に白崎が疑われることになりますから、自分には及ばないと思っていたのではないでしょうか？」

「しかし、白崎は星野さんと言つてしまつたというわけですか？」

「はい。そういうことです」

なるほどね、と野田は言つたが、まだ違和感は残つていた。それは当然、桐谷や藤森も同じである。

「でも、それなら一樹と接触した意味がないんじゃないかな？」

桐谷が聞いた。澤田が、即座に答える。

「いや、それこそ第三の布石なのよ。たとえ白崎が見つかってしまつても、彼が星野という人物から頼まれたと言つてしまえば、少なくとも警察は星野を捜すことになるから、結局自分には及ばないと考えたのよ」

「でも、そうして一樹が見つかってしまえば、今と同じ状況になるんじゃないの？」

「そうね。でも、きっと黒川誠は一樹が捕まらないと自信があつたんじゃないかしら？ 私たちも、耕介くんのおかげで彼を見つけ出すことができたんだから、その自信を持つていても不思議じゃなし、そもそも耕介くんに名前を晒すつもりじやなかつたんだろうから、白崎がそんなミスさえしなければ、まだ見つかなくて、耕介くん

が犯人扱いされていたのかもしれないのよ」

澤田は、自分の考えに少し自信あるようだった。

「ということは、結局ふたつのグループが動いていたということではなくて、黒川誠が星野一樹と白崎の二人にそれぞれ接触していたということですか」

「はい。 そうだと思います」

野田は、未だに消えない違和感を引きずつて少し考えていたが、結局何も浮かんでこなかった。

「まあ、黒川誠を捜すことに変わりはないでしょから、とりあえず、引き続き彼の捜索をお願いします」

と、野田は藤森に言い、彼もしつかりと頷いた。

その日はそれで解散し、桐谷も家へと向かった。

編集者との打ち合わせで指摘された部分を訂正するため、桐谷は家に着くとすぐにパソコンの電源を入れる。パソコンが立ち上がりしている間、桐谷はタバコの火をつけると、その煙をゆっくりと肺にもっていった。

与えられた仕事はしつかりとこなさなければならないが、頭の隅ではやはり事件のことが気にかかり、離れなかつた。

あの違和感が、いつまでたつても消えそうにないのである。澤田の言つていたことは、一見それが真実だと考えられるが、どうしてもすぱつと納得できなかつた。

白崎から感じられた妙な雰囲気や態度。そして、その失態と行動の意味。

黒川誠による星野一樹への接触。白崎への接触の可能性。

そして、黒川誠の本当の目的。バラバラにした理由。

それらすべてを考慮した上で結論を出すには、奇妙な点が数多く残つてしまつ。澤田の説も一理あるが、それではまだ解決とまでには達していないような気がした。

パソコンが立ち上がつたので、早速作業に取りかかる。事件のことは氣になるが、仕事は仕事と割り切つて行動するべきだと思い、

小説を書くことに専念した。

桐谷がこうして小説を書くこと つまり小説家になりたいと思った主な原因是、高校生時代に読んだ、ある一冊の本だった。もともと読書は趣味のひとつであり、色々と読み漁っていたのだが、桐谷はその本に魅せられ、いつしか小説家になりたいと思いはじめたのである。

そのころから小説を書き始めたのだが、最初は書き続けるという行為がこれほどの体力と精神力を必要とするのかということに責められ、加えて自分の語彙の少なさに思つたような文章を書けないということで、なかなか文章が進まなかつた。

だが、当然書くこと 자체は好きだつたので、一日少しづつでもと思い、試行錯誤を繰り返しながらも毎日書き続けていくうちに、どんどんと書くことに慣れ、文章力も向上していくことが自分でもわかり、驚いたのである。

だが、高校時代では大学受験といふこともあり、結局一作も書き上げることができなかつた。それでも、趣味の一環として大学時代にも書き続けて、やつと一作目 つまり処女作を完成させたのである。

それを何度も推敲し、訂正を繰り返して自分が満足できるほどの作品になると、次は誰かに読ませたいという欲が働いた。そういうわけで、親しい友人など一部の人にだけ読んでもらうと、妙に好評を得たので、駄目もとで応募してみたといふ、思いも寄らず、最優秀賞に選ばれたのである。

そして、桐谷は晴れて作家デビューといふことになつた。だが、その世界は自分が思つていたよりも厳しく、辛いものだつたのである。

だが、それでも桐谷は書くことをやめなかつた。必死に喰らいついていつたのである。その結果か、デビューから三年後、ちょうど文庫落ちしたようなところで、桐谷はベストセラーである『永遠なる宴』を書き上げた。

そして、それを機に今まで民間企業と兼業だったのを、専業作家として生きていくことに決めたのである。

最初こそ注目を浴び、雑誌などにも数多く取り上げられ、テレビ出演などの話も多かつたが、次第に売り上げが下がってしまいそれでも、普通の作家たちよりは優遇なのだが 最近少し心配になってきたのである。

だが、もちろんこの仕事は好きでやっているのであり、唯一の自分の誇りだった。これからも、ずっと書き続けていくつもりである。桐谷は指摘された部分を訂正したあと、そのまま続きを書いて、切りの良いことここまで終わらせる。一旦居間の方へ戻つてソファに腰を下ろした。前の円形テーブルの上有るタバコの箱を手に取り、一本取り出して火をつけて吸つてみると、疲れていたのか、いつも以上においしく感じられた。

一服したあと再び続きを書こうと思っていたのだが、急に眠気が襲ってきた。だが、締め切りが近いということもあり、そう簡単に寝るわけにもいかない。ということで、シャワーを浴びてすつきりしようとした。

事件のことも気にかかるが、最近署の方に顔を出し過ぎて、仕事の方が疎かになっている傾向があつたので、これから数日間は仕事を専念しようと、桐谷は浴室で身体を洗いながら思った。

それから四日が過ぎた。桐谷は自分が決心した通りにその四日間は仕事に専念し、自分で納得できるほどの成果を上げることができた。

一応、野田には何かあれば連絡をくださいと頼んでおいたのだが、彼のことだから、多少のことではきっと連絡は来ないと思っていた。だが、意外にもその日、彼から電話がかかってきたのである。

午前十時過ぎ。桐谷は八時ごろに朝食を終えて、部屋を軽く掃除したあとにそろそろ執筆をはじめようかと考えているときだつた。

「桐谷さん。今日、署の方に来てくれませんか？」

桐谷は、今日も用事がなかつた。というより、どちらかと言えば野田からの連絡を待つていた立場だつたので、当然断る理由はない。ただ、呼び出される理由は気になつた。

「わかりました。何かあつたんですか？」

「はい。事件で殺害された四人のうち、まだ特定されていなかつたつまり黒川隼人の友人の身元が、やつとわかつたんですよ。それで、桐谷さんにも少し確認したいことがあるので……」

「わかりました。では、一時ごろでもいいですか？」

「はい、構いません」

一時と指定したのは、今日はまだ仕事をしていなかつたので、せめて昼まで執筆しようという魂胆である。

電話を切つたあと、桐谷は冷蔵庫から缶コーヒーを取り出すると、それを持って仕事専用の部屋に入り、執筆を開始した。

執筆中は、それに集中するというのが当然であり原則だが、その日はどうにも落着きがなく、そわそわしていた。それはきっと、事件のことが気になつていてるからだろう。これでは良いものも悪くなると、仕方がなく執筆を中断し、その代わりにテレビを見て時間を潰すこととした。

「こんなことなら早く行けば良かつたな、などと多少後悔も感じるが、今更野田に連絡するのも気が引けたので、のんびりと過ごすことにする。

十一時になると、さすがに家に居続けることも退屈になつてきた桐谷は、食料も切れてきたといふこともあり、久しぶりに外食をすることにした。

身支度を整えると玄関から出て廊下を歩き、そのままエレベーターを使って一階まで降りる。駐車場に止めてある自分の車に乗り込むと、適当な飲食店を探すため、半ばドライブするような感覚で車を走らせた。

できれば警察署から近い飲食店をと、その辺りを適当に徘徊するよつに車で巡回していると、良さそうな店があったので、そこで昼食を取ることにした。あまり贅沢はできないので、比較的安いものを注文する。

昼食を終えると、一時十分前だったのをちよつと良かつた。

四日間の空白があつたとしても、すでに見慣れてしまつた署に入り、いつもの取調室に向かう。特に取り調べられるわけではないのだが、桐谷のような一般人で一応容疑者だつたといふこともあります。いつもそこだつた。

中にはいつもの二人と、あと星野一樹もいた。

星野にとつては、自分の教唆による殺人が未遂か否かも問題であり、それによつて罪の重さも変わつてくるのだろう。

桐谷はまず挨拶をすると、自分から本題に入つた。

「それで、隼人の友人の身元がわかつたんですね？」

質問には、野田が答える。

「はい。わかりました。予想していた通り黒川隼人の同期の友人で、有原智也という人でした。ご存知はないですよね？」

「有原ですか……知りませんね。それで、確認したいことといふのは何ですか？」

「はい。とりあえず、この写真を見てくませんか？」

そう言つて野田は、今まで氣づかなかつたのだが、横のテーブルの上に置いてあつた封筒を手に取ると、そこから一枚の写真を取り出した。

それを、桐谷に手渡す。

「一体誰の……その有原智也の写真だらうかと、そこに写つている人を見た桐谷は、途端に顔色を変えた。

「この人つて……」

その顔には見覚えがあつた。整つた顔立ちに綺麗な黒髪。そして、鋭い目つき。それはまさしく、あのとき桐谷が会つた白崎竜輔だった。

「……どうして、白崎の写真が？」

「はい。その人が、有原智也なんですよ」

「え？ ジゃあ、つまり、白崎も殺されたってことですか？」

「そういうことですね」

桐谷は言葉を失つた。驚きと、なぜか知り合いを殺されたときのような実際、そこまでではないが、そんな悲しい気持ちになる。その理由さえわからなかつたが、少なくとも、これで事件について奇妙な点が増えたのは事実だつた。

「あの白崎 つまり有原智也が隼人の友人だつたということは、彼も隼人を憎んでいたということですか？」

「それが、そうでもないという話なんですよ。彼は大学での友人だつたようなんですが、人嫌いだつた黒川隼人も、彼とだけは別段仲が良かつたということなんです。つまり、あなたと黒川隼人との関係に近かつたと思います。しかし、人間の気持ちなんていうのは簡単に変わってしまいますから、突然憎むようになつたとも考えられます……」

桐谷は、自分が黒川隼人を憎むようになることがあるのか、と考えたが、それはないだろうと思った。だが、それは当然断定できないし、人それでもある。きっと、その例も少くないというのが実態なのだろう。

「それで、黒川誠とはどうなんですか？」

それが、事件解決に向けての重要な要素だといふことは理解していた。もし関わりがないとすれば、それでまた厄介になつてくるのである。

「いや、それがまだ判然としていないんですよ。黒川誠から彼に接触した可能性はありますが、もともとはお互い知らなかつたようなんです。その情報も、確かとは言い切れませんが……」

なるほどね、と桐谷は納得してから、もう一度有原の写真を見た。確かにあの白崎と同一人物だったが、どこか雰囲気が違うように感じた。

「この写真は、いつ撮つたものなんですか？」

「ええと。彼が就職するときの写真と言つていましたから、二十三歳のときに撮つた写真ですね」

「ということは、私とも同じ年だから四年前の写真ですか。もう少し最近の写真はないんですか？」

「いや、ないと言わされましたので……。何か気づいたことがあるんですか？」

「なんか、少し雰囲気が違う気がするんですよ。それより、この写真をくれた人というのは誰なんですか？」

「彼の両親です。彼の身元が明らかになつたあと、その両親の家に行つたんですよ。そうしたら、それが最も新しい写真だと言われました」

「では、その四年間は両親とあまり会つていなかつたといふことですか？」

「いや、それでも毎年正月やお盆の日には帰つていたらしいです。ただ、写真を撮る機会というのは少ないのでしょうからね」

「なるほど。彼の友人には当たつたんですね？」

「はい。もちろん当たりました。しかし、彼は写真に写るのが嫌いだつたようで、全然ないということでした。あと、彼もあまり人は触れ合わないタイプだつたようです」

「隼人と似たような人間だつたということですか」

「そういうことになりますね。ですから、彼だけは良い友人になれたのではないかと思います」

「それなら、彼が隼人を憎んでいたというのも、少し考えにくくなりますよね？」

「まあ、確かにそうかもしだせんが、先ほども言ったように人間の心情なんていうのは、ひどく纖細で簡単に変化してしまいますからね。とりあえず、これから調べてみないとわかりませんね」

桐谷が頷くと、そこで澤田が口を挟んだ。

「有原智也をバラバラにしたことも、何か意味があるんでしょうか？」

「真意はわかりませんが、彼の殺人を隠したかったということではないでしょうか？」

「黒川誠ですか？」

「はい。その可能性は十分考えられると思います。まあ、重要なのは、その隠したくなつた理由ですが」

「理由ですか……。それなら、彼を殺すことは黒川誠にとつて、予定外のことだつたとは考えられませんか？　はじめからバラバラにする氣で殺すというのも、何か不自然な気がします」

野田は一瞬驚いた顔になつたが、すぐさま納得するように頷いた。「確かに、そうかもしませんね。そのことは考えていませんでした。それなら、黒川誠と有原智也は繋がつていたが、有原が不慮の行動にしてしまつたので黒川がやむを得ず殺害し、それを隠すためにバラバラにしたということも考えられますね」

「では、一人で黒川家に乗り込んだということですか？」

「その可能性は高いでしょうね。殺人現場が傷ひとつついていない理由も、一人だつたからこそ、ということかもしれません」

すると、そこで藤森が言つた。

「そう言えば、捜査しているうちにわかつたことなんですが」

「何ですか？」

野田が聞いた。

「黒川隼人と誠の関係なんですが」

「やはり、仲が悪かったと？」

「いえ、その反対です。一人はとても仲が良かつたということですよ。黒川誠が家から出て行方不明になつたあとも、隼人とだけは連絡を取り合つていたということです」

それを聞いて、野田はうんざりするように溜め息を漏らした。

「それは、もう少し早く言つて欲しかつたですね。これでまた、複雑になつてしましました」

「すみません。忘れていたもので……」

藤森は素直に謝つた。野田もそつたものの、特に怒つている様子ではなかつたので、藤森は安堵する。

「じゃあ、隼人は誠とも有原とも仲が良かつたということですよね？ それが急に二人とも殺意を持つなんていうのは、さすがに不自然ではないですか？」

桐谷が指摘する。それは絶対とは言い切れないが、それでも十分に説得力を持つた正論だつた。そのまま、続けて言う。

「誠と有原の関係は最初からはなかつたんだから、たとえ隼人に対してどちらかが殺意を持つことがあつたとしても、その両方が持つようになるのは、考えにくいですよね？ 例えば、誠の方が隼人に対して殺意を持つたとして、それで有原に接近し一緒に殺害しようと言つても、有原はそれに同意することはないと思います。そんな簡単に殺害を決意できるわけがないですね？」

「と言つて、その両者が黒川隼人に殺意を持つようなことが起きる確率なんていうのは、ほぼゼロに近い……そういうことですね？」

「はい。その通りです」

野田は、桐谷の解釈は正しいと思つた。確かに、そんなことが起ることは考えられない。では、一体どういうことなのだろうか。だが、いくら考えても思い浮かばなかつた。

桐谷と星野、それと澤田も帰つて、残つた野田と藤森の二人は、事件に関する資料をもう一度確認していた。

「それにしても、桐谷さんも澤田さんも、鋭いものを持っていますね」

藤森が感心するように言った。それには野田も同感する。

「確かにそうだな。澤田さんは前からそう感じていたが、桐谷さんも高い見識を持つているよ。特に最近はなかなか鋭いところを突いてくる。今までは、あまり話していなかつたんだがね」

「今まで容疑者として疑われていたから、あまり口出ししないようにしていたのではないですか？ それが、容疑が晴れたためにプレッシャーがなくなり、深く考えられるようになつたのかもしれませんね」

「そうかもしだれないな。しかし、私たちも当然彼らに頼るわけにはいかないから、考えなければいけない」

「事件の真相ですか。今回の事件は、色々と複雑ですからね」

藤森はそう言いながらも、どこか神妙な顔つきでいることに野田は気がついた。

「何か、気になることでもあるのか？」

野田の言葉にはつとめた藤森は、少し躊躇つてから口を開いた。

「はい。少し前から思つていたことなんですが……」

「何だね？」

「犯人は、本当に黒川誠なんでしょうか？」

彼が犯人だとほぼ決めつけていた野田にとって、それは突飛な発言だった。

「と、言つと？」

「桐谷さんの指摘した通り、彼や有原智也が黒川隼人に殺意を持つ可能性というのは、低いと思います。しかし、そう考へるとどうにも犯人の名が浮かんできません」

「まあ、確かにそうだが、それでも黒川誠が犯人だという可能性が最も高いと思うのだが……」

「しかし、彼の所在は一向に見つかる気配がありませんよね？」

「それは事実だが、と野田は頷く。

「なら、彼はすでに殺されたということはないですか？」

「殺された？」

野田は思わず、繰り返した。

「どういうことだ？」

「つまり、事件で黒川隼人だと思われている遺体は、本当は黒川誠だということですよ」

「何だつて？」

野田は、絶叫に近い声を上げた。その可能性は、今まで考えたこともないことだった。

「では、黒川隼人はまだ生きているということか。そして、彼こそが真犯人……」

「はい。あくまで推測ですが、そう考えるとすべてが説明できるんですよ。彼は黒川誠と有原智也の一人と仲が良かつたからこそ、彼らを動かすことができたんです」

藤森は話しながら、自分の中でその考えがどんどんと確信に変わつていくのを実感した。やはり、話せば話すほど、思考が今までよりも先へ進んでいく。今まで気がつかなかつたところまで、解明されていくのである。

「では、一人を動かした方法も予想がついているのか？」

その質問にも、藤森は迷わずはつきりと答えることができた。

「はい。まず、黒川誠を動かした方法ですが、それは彼が両親を憎んでいたことに手がかりがあると思います。つまり、黒川隼人は彼に両親を殺せるという口実をつくって、彼を動かしたんだと思います。彼が両親に対する憎悪は、殺意にも十分達していたと思いますので。そして、黒川隼人は彼に宇田正則と名乗らせて、星野一樹と接触させたんです」

「しかし、どうして星野一樹と接触させたんだ？」

「それは、彼に対しての復讐のためでしょ。黒川隼人は、彼を犯

人に仕立て上げたかっただんです」

「なるほど。それで彼に自分の殺人を依頼させて、罪を持たせると  
いうわけか」

「そういうことです。次に有原智也への方法ですが、これは単純に  
金だと思います。特にその目的 つまり、他者を殺害するという  
ことを教えずに金だけをちらつかせ、彼に白崎竜輔と名乗つてもら  
い、桐谷さんと接触させたわけです」

「理屈はわかるが、それでは黒川誠でもできることではないのか?」  
「確かに、可能ではあります。しかし、仮に黒川誠が有原に接触し  
たとしても、赤の他人からいきなり金を出すから協力してくれと頼  
まれて、はたして普通の人間が承諾すると思いますか? 少しは、  
というより大いに疑いますよね? まあ、その額によつては承諾す  
る人もいるかもしませんが、黒川誠は調べたところどこにも就職  
していないようですから、きっとフリーターです。そんな彼に、そ  
こまでの金を用意できるとは思いません。有原も一般的なサラリー  
マンで独り身ですので、そこまで金には苦労していなかつたと思  
います。そう考えると、やはり黒川隼人という友人からの誘いの方が、  
乗りやすいのは明らかなんですよ」

藤森は自分で言つていて、それが妙に恐ろしくなつた。実際そこ  
まで考えてはいなかつたのだが、話していくうちにどんどんと浮か  
んでくるのである。

野田も、感心しながら話を聞くばかりだった。

「それで、彼を桐谷さんと接触させた理由というのは?」

野田は、そこで質問を入れてみた。自分でもその答えはあつたの  
だが、一応聞いてみる。

「それは以前、澤田さんが言つていたことでほぼ間違いないと思  
います。つまり、自分に保険をかけるためですよ。まあ、違うところ  
と言えば、彼が、星野さん、と言つたのは、わざとだということく  
らいですかね」

「わざと?」

「はい。黒川隼人は星野一樹を犯人に仕立て上げるつもりだったんですから、その前に疑われるはずの桐谷さんにその情報をわざと与えたんですよ。たとえ、桐谷さんが嘘をついていると警察に見なされて彼が逮捕されても、それはそれで構わないと思つたんでしょう。友人だが、自分が捕まるよりはましだと。そして、桐谷さんの証言が信じられて星野を捜索することになつても、以前澤田さんが言った通り、星野一樹は搜し出せないと自信があつたんだと思います。そして見つかれば、予定通り彼が教唆犯となり逮捕され、その正犯は見つからない。それが黒川隼人の筋書きだったんじゃないでしょうか」

「なるほどね。いくつも罠をしかけておいて、そのどちらかにはまれば許容範囲。それで星野一樹が捕まれば予定通りということか」

「そういうことです。どうでしようか？」

藤森は、自分の推理に対しての自信は十分だつたが、それでも控え目に聞いてみた。

「いやあ、本当に素晴らしい推理だつたよ。私もそれが真相のような気がする、というより、今はそうとしか考えられないな」

野田は感嘆した。今まで残っていた違和感は、すっかり消えていたのである。

藤森は、そんな言葉に対しても有頂天にはならず、自重して礼を言つた。

「ありがとうございます」

だが、すぐさま藤森は、少し場違いだつたかな、と思つた。

次の日一人は、澤田は当たり前として、桐谷と星野も呼び出して、その藤森の推理について、最初から詳しく説明した。

その推理をはじめは驚いた顔で聞いていた三人だったが、それを裏づける理由をしつかりと説明していくうちに、合点したようだつた。

誰からも「反対や疑問の声などは上がらない。それほど、その推理は理に適っていた。

「では、犯人の可能性は黒川誠よりも隼人の方が遙かに高いということですか？」

説明を聞き終わった桐谷が、確認するように言った。

「そういうことですね。遺体はバラバラにされていて、確たる証拠はないですが、黒川隼人と誠の血液型は同じで、当然両親との血縁関係もあります。あとは、そのバラバラにされている部位を見て、何か特徴があればいいのですが。身長や体重もほぼ同じということなので、それ以外に見極める方法がないんですよ。何か、外見的に大きな特徴はないんでしょうか？」

桐谷と星野は、そのために呼ばれていたようだつた。彼の特徴を知っているのは、他ならない彼の古い友人である。

「隼人の特徴ですか……」

「はい。あと、桐谷さんには、黒川誠の特徴の方も教えてくれませんか？　この中で彼と関わりがあるのは桐谷さんだけですし、彼の特徴がわかれれば、その見極めがもっと確かなものとなりますので」「わかりました」

そう言つて桐谷は、腕を組み考え出した。だが、浮かんでこない。そうしていると、星野の方が口を開いた。

「そう言え……隼人の額には、縫つた跡があると思います。何針かは教えてくれませんでしたが、お前のせいで縫つたんだよ、と怒

鳴られた記憶があります

その記憶は、星野にとつても良いものとは言えないだろう。現にそう言っている星野の表情は、どこか悲しげに見えた。

「わかりました。少し調べてみます。他には、何かありませんか？」  
そのとき、桐谷は突如として思い出した。

「 そう言えば、誠は膝を手術したってことを隼人から聞いた気がします。確かに、階段から落ちたときに膝をおかしくしたと。それで、心配だと隼人は言っていました」

「わかりました。それは大きな情報ですね。それでは、早速調べてみたいと思います。藤森巡查」

野田がそう呼びかけると、藤森は頷いて部屋から出ていった。いつもながら大変だな、と桐谷は思う。

「あの、野田警部……」

そう言つたのは、澤田だつた。

「どうしました？」

「あの、仮に事件の犯人が本当に隼人だつたとして、どうして彼は有原智也を殺したんでしょうか？」

その質問に、野田は一息ついてから答える。

「それはまだわかりませんね。前に言つていた通り、彼が不慮の行動に出た可能性も考えられますし、他の可能性もあります。もしかすると、彼は事件の内容を知らされていないままに事件現場へ連れていかれ、その事実を知つてそんな行動に出てしまい、やむなく殺されたかもしませんね」

「なるほど。そうかもしませんね。バラバラにした理由というのも、そこに関係がありそうですし。あと、誠を殺した理由というのは、隼人が自分と偽装させるためと見て間違ひありませんよね？」  
「それは間違いないでしようね。彼の目的は星野さんを犯人に仕立て上げることでしようから、たとえ事件が起こつたとしても、自分が殺されていることにならなければ、少なくとも星野さんは未遂となりますからね」

「ですね。私も、その推理は正しいと思います。隼人が真犯人だったということには、少し残念ですけど」

それは同感だな、と桐谷は思った。

今まであつた違和感は、その推理を聞いていく中で解消されていった。そして、桐谷もその推理で間違いないだろうと思ったのである。だが、そうなると黒川隼人に対しては複雑な気持ちになってしまふ。黒川隼人とは長い付き合いであり、彼の性格も桐谷はよく理解しているつもりだった。当然、彼が星野一樹を憎んでいたことも知っていた。だが、その復讐のためにまさかここまでことを起こすとは、考えもしなかった。というより、考えたくもなかつた。たとえどんなに憎んでいたとしても、そのせいで人嫌いになってしまったとしても、決して人を殺すような人間ではないと、桐谷は思っていたのである。

それが、まだ確定していないとはいえ、残念だつた。結局、自分が彼に対して尽くしてきた行為は、すべてこの事件のためだつたのかと思えてしまう。

桐谷はそんな思考の果て、深い溜め息をつくのだった。

それから一時間ほどたつたとき、突然部屋のドアが開くと、藤森が入ってきた。手には何か資料を持っていて、そのまま野田へと近づく。

「わかりましたか？」

野田が聞いた。

「はい。ええと、確かに遺体には膝に手術した跡が残っていました。額も調べてみましたが、やはり縫つたような跡は見受けられなかつたとのことです」

それを受けて、野田は確信するように頷いた。

「間違いなさそうですね。やはり、殺されていたのは黒川誠でしたか」

桐谷は黙つたまま、何とも言えない、妙な気持ちになつた。それ

は、澤田も同じことだらう。彼女も、黙つて一人のやり取りを見ているだけだった。

「では、早速黒川隼人の捜索だな。令状は？」

「はい、早急に手配します。あと、桐谷さんたちには警部の方から伝えといてくれませんか？」

「わかった」

「ありがとうございます。では」

そう言って、藤森はまた部屋を出ていった。

少し沈黙が続いたが、野田はそれを咳払い破つてから、桐谷へと向き直る。

「桐谷さん。あなたには、色々と迷惑をかけていました」  
野田が急に改まって礼を言つてきたので、桐谷はどうしていいのかわからず、慌てて礼を返すだけだった。

「事件の真相もわかり、あとは黒川隼人を探し出し逮捕するだけなので、ここからは完全に警察の仕事となります。まあ、本当は最初から警察の仕事だったのですが、桐谷さんには特別に色々と協力させてもらいましたので……」

「い、いえ。私が無理言つて、ただついて歩いただけですよ。警部さんたちこそ、迷惑ではなかつたんですね？」

「そんなことはありません。実際、桐谷さんに助けられたことはたくさんあります」

「そうだよ。星野さんが見つかったのだって、耕介くんのおかげだし

と、澤田が割つて入った。

「そ、そつか……」

桐谷は、少し恥ずかしかつた。

「はい。しかし、もう桐谷さんに協力されることないでしちゃうから、少し冷淡な言い方になりますけど、これ以上、署にわざわざ来る必要もなくなると思います」

「そうですか。わかりました」

何だか少し物寂しい氣もするが、それが当然だらうといふこと

桐谷も納得した。

「……でも、もし隼人が見つかったら、そのときには連絡をくれませんか？ 彼には会いたいので」

「はい、わかりました。黒川隼人が見つかれば、私から連絡します」と、そこで澤田が言つた。

「そう言えば、私耕介くんのアドレスとか知らないよね？ 教えてもらつてもいい？」

「ん？ ……ああ、いいよ」

そう答えて、場違いではあつたが、一人はメールアドレスと携帯番号を交換した。野田が微笑んで見ているのが、少し気になる。

桐谷は、携帯電話をポケットにしまつてから一息つくと、星野が部屋の隅の方で黙つていることに気がついた。

「あの……一樹はどうなるんですか？」

「星野さんは、たとえ黒川誠が宇田という殺し屋を名乗つて接近していたとしても、他人の殺害を依頼つまり、教唆したという事実に変わりはないですからね。当然、その罪で捕まることになります」

「そうですか……」

そう言つて、桐谷は星野へと振り向く。寂しげな表情をしている桐谷に、星野は苦笑いで返した。

「まあ、それも当然さ。俺は、たとえ騙されていたとしても、隼人を殺してくれつて頼んじまつたんだ。人間として最悪なことをしたんだ。仕方ないよ。それに、本当は死刑になる可能性もあつた身なんだ。そうならなかつたことだけでも、感謝するべきだよ」

心から反省しているんだろうな、と桐谷は思つた。

「それほどの悔い改めがあるのなら、あなたの罪も少しほ軽くなるかも知れませんね。しかし、自分のやつた行為というのをしつかりと反省してくださいね」

「わかりました。ありがとうございます」

この世界は、これほどにも辛いものなのか、と桐谷は思わずとも感じていた。

その日の夜は、朝から快晴だったといつこともあり、そこには一面の星空が というのが理想だが、ここは東京なのでそういうわけにもいかなかつた。空気中のほこりや水滴などの微粒子が、地上から発せられる人工的な光に反射して、本来は美しいはずの星空を見えにくくしてしまつてゐる。また、汚染がひどいと反射する光も多くなるようであり、ここでは特にひどいのだろう。

野田は自宅に帰ると、今まで溜まつてゐた疲労を流すため、シャワーを浴びることにした。最近歳のせいなのか、疲れが溜まりやすくなつてゐるような気がした。

シャワーを浴びながら、考える。

野田は、以前桐谷に感じていた特別な情の正体について、掘みかかつてゐた。

それは、人間が持つてゐる優しさ、またはそれに類する雰囲氣に關係があると、野田は踏んでいた。

つまり、犯罪者が持つ特有の雰囲氣というものを彼には感じられなかつたにも関わらず、彼を犯罪者として見ていたことに違和感を抱いたのだ。それは、長年何人もの犯罪者たちと対峙してきたからこそ感じられる、言わば感性のひとつだつた。

人間には誰しも優しさを持つており、それは各々において様々な形で存在している。だが、それを一度犯罪という悪事に染めてしまふと、その本来の純粹な優しさではなく、偽物の優しさに変わってしまうというのが、野田の考え方だつた。

つまり、罪を犯す前後では、その優しさ つまり雰囲氣が変わつてゐるよつに感じるのだ。それは決して合理的には説明できないが、野田はその違いを雰囲氣から何となく察することができたのである。

それは、星野一樹を見てもわかつた。彼にも優しさが存在してい

るのだが、それは桐谷のものとは何かが違う。一度人を殺そうと決意し、行動さえしてしまった彼の心には、一度と純粹な優しさは戻つてこない。そして、それはたとえどれほど悔い改めても、変わりはしないのである。

その違いに、桐谷が犯人だということに対する違和感を持ち、それが彼を捕まえたくないという情に変わった。

野田は、そのように考えていた。とは言つても、すでに彼は犯人ではないと判明しているのだから、心配は無用である。

シャワーを浴び終わった野田は風呂から上がり、そのままベッドの脇に腰かけ、そこに置いてあつたタバコに火をつけた。

正午。まだ昼だというのに空は厚い雲に覆われていて、雨こそ降つていなかつたが辺りは薄暗く、気分さえも落ち込んでしまいそうだった。

黒川隼人が真犯人だという事実がわかり、捜索をはじめてから、すでに一週間がたとうとしていた。だが、未だに野田から彼が見つかつたとの連絡は来ない。

桐谷ははじめこそ彼の連絡を心待ちにしていたが、時間がたつにつれ、そのこともあまり考えなくなつていた。様々なことが起こつたために忘れかけていた今までの日常を、取り戻しはじめていたのである。

また、桐谷はその日常をそれまでは退屈と感じていたはずだったが、事件のあとではそれほど感じなかつた。むしろ、安心できる平穀な日々の中で生活を送ることが嬉しかつた。それほどにあの事件に関しては、色々と大変だつたのである。

今にも雨が降り出しそうな空模様を眺めながら、桐谷はいつものようにタバコをふかしていった。

五月中旬。六月には梅雨が来るだらうし、毎年のことながら、鬱陶しいと言つたら他ならない。といつても、来るものは来るのだから覚悟しなければならない。

桐谷は居間のソファに腰かけると、リモコンを取つてテレビをつけた。だが、チャンネルを変えても特に見たい番組がなかつたので、適当にニュースを見る。

毎日当たり前のように流れる殺人やら強盗やらの事件を、世間の人々は一体どのよつに捉えているのだろうか。桐谷はふと、そんなことを思つた。

命は何よりも重いと言われながらも、毎日淡々と消えてなくなつていくたくさんの命。それらを奪う犯罪者たちの命も平等だと言わ

れながらも、それを死刑という形で奪うことだつてある。

それらをあの事件を通じて色々と触れ渡ってきた桐谷だったからこそ、そう簡単には無視できなくなっていた。だが、そうは言つても自分には何もできない。その事実が桐谷は悔しかつた。

また、桐谷は人を殺すということに関して、その中でも特に自殺について多少の関心を覚えていた。だが、それは自分が自殺したいというところから来るものではなく、単純な興味によるものだつた。

調べてみたところ、日本の年間における自殺者の数というのは、昔と比べて遙かに多くなつたとのことだつた。特に一九九八年からは三万人を超え、それまで約二万から一萬五千人程度だったのが、その年を境に急増し、それ以降三万人超が続いている。

そして、その自殺者の約七割が男性であり、一九九八年以降、自殺者の数が急増した要因も男性　特に中高年男性による自殺の増加によるものということだつた。

また、年齢別に見ても、四十代から六十代前半にかけての自殺が最も多いとのことだつた。四十代から五十代にかけては、特に経済的な理由などから生活苦に陥り、それによつて自殺に追い込まれる場合が多い。そのために過労自殺を行うのも、この年齢層には多いとのことだつた。

だが、六十代以上になると、その理由も多少変わつてくる。つまり、経済的な理由よりも健康面での不安が自殺の理由になる場合が多いのである。

そして、それは世界的に見ても、日本の自殺率といつのは世界の国々の中でも上位に位置しているとのことだつた。

考えてみれば、何とも恐ろしいことである。年間に三万人以上ということは、単純に計算して一日に百人近くが自殺していることになるのだ。

なぜ、自殺するのか。

そのとき、彼らの心理は一体どうなつてゐるのか。

最期の瞬間、一体何を思うのか。

彼らに救いの道はなかつたのか。

そして、自分がそんな考えに至つてしまつことがあるのか。

桐谷の頭の中では、考へるほどに次々と疑問が浮かんできた。そのうち、どんどんと憂鬱になつてくる。

桐谷は、それらを振り払おうと頭を振り、気を取り直して立ち上がりた。台所へと向かい、冷蔵庫から昨日買っておいたコンビニ弁当を取り出す。それを電子レンジで温めると、再びソファに座つて食事をはじめる。

と、そのとき不意に携帯電話の着信音が鳴つた。それは電話ではなく、メールの着信音だった。

一体誰からだろつか、と桐谷は思つた。野田から連絡が来る場合は、家の電話のはずであり、ましてメールなどではない。携帯電話では、最近誰とも連絡を取つていなかつた。

では、澤田さんか？ とも思つたが、まさか、とすぐに思い直した。瞬時に色々考えたが、結局答えの出ないまま、携帯電話を開いて差出人を確認する。

桐谷は、目を見張つた。普通考へられないような名前が、画面には表示されていた。

黒川隼人。

一瞬呆然としたが、すぐに本文を確認する。件名はなかつた。

『警察が俺を捜してるとこりを見ると、すべてわかつちまつたんだな？』

そのとき桐谷は、これは本当に隼人だろつか、と思つた。だが、今はそれを確認する術はない。とにかく、相手を黒川隼人だと思つてメールを返すことにした。

『わかつた。だから自首してくれ。お願ひだ』

短いが、気持ちは十分伝わると思った。それ以前にメールをしてくれるということは、それなりの覚悟を持っていると見て間違いないだろう。いずれ自分は捕まると、だからメールしてきたのだろうと、桐谷は考えた。

だが、そこで彼は突然要求をしてきたのである。

『待ってくれ。その前にお前と一緒に話がしたい。今日の午後五時にある公園だ。わかるだろ？あと、警察は呼ぶな。俺はお前と二人で話がしたい』

『自首してからでも俺とは話ができる。だから、先に自首してくれ』

桐谷は、彼の要求では自分に危険が及ぶ可能性もあると考え、そ  
う返信したのだが、しばらく待つてみても、彼からの返信はなかっ  
た。おそらく、これ以上何を言つても無駄だろう。彼は、すでに覺  
悟を決めているのだ。

あの公園というのには、覚えがあつた。きっと、小中学時代によ  
く寄り道で訪れ、遊んでいた公園のことだろう。

なぜそこを選んだのか、という疑問は浮かばなかつた。もしかす  
ると、彼は一人だけにしかわからない場所を選ぶことによつて、本  
人だと気づかせたかったかもしれない。

桐谷はしばらく考えたが、結局野田に連絡することにした。たと  
え相手が大切な友人だとしても、そして何を言われようとも、これ  
を警察に連絡することは必要事項であり、何より野田たちに黙つて  
行動することには嫌気がさした。

野田に連絡すると、すぐに署へ来てくれ、とのことだった。

桐谷は急いで支度を済ませると、そのまま家を飛び出した。

午後五時。いつもなら、真っ赤な夕日が辺りを綺麗な橙色に染め  
ている時間帯だが、今日の空はあいにく雲に覆われているせいだ、

まだ暗くはないにしる、辺りは陰性な雰囲気に包まれていた。

桐谷と黒川が、落ち合つと約束した 実際は黒川が一方的に要求したのだが その公園は、比較的大きな公園だった。その中央には噴水やベンチが設備され、その周りを円形で大きく取り囲むよう、そして公園全体にまでたくさんの木々が並んでいた。また、中央からは何本かの道が延びており、それが公園の外へと繋がっている。

その噴水の前に、一人の男が立っていた。黒川隼人である。彼は、黒のTシャツに黒のジャケットを羽織つて、その上黒のジーンズという全身黒尽くしの奇妙な格好だった。

彼は、腕時計で時刻を確認してから、辺りを見回す。すると、ちょうど彼から右方向に延びていた道の奥から、誰かが歩いてくる姿が目に入った。

桐谷だった。彼は、やがて黒川に声が届くほどの距離になると、耳を澄ませばどうにか聞こえるくらいの声で呟いた。

「隼人……」

だが、黒川はそれを無視するように言った。

「こっちだ。ついて来い」

そう言って、黒川は桐谷が来た道とは反対の 左側の道へと入つていった。桐谷も、黙つて彼のあとについていく。

少し歩くと、公園の外ではなく、木々の生い茂る中で少しだけ開けた場所があった。道から外れて地面の草を踏み、そこへ向かう。

そのちょうど中央辺りに到着すると、黒川は急に振り返った。辺りはたくさんの木々に覆われているので、人に見つかる可能性は低い。

桐谷は少し身構えたが、黒川はそんな様子を気にすることなく、言つた。

「お前に一度、すべてを話したかつたんだ。そうすれば、俺の覚悟も決まる」

「そ、そうか……」

だが、桐谷はまだ警戒を解かなかつた。彼がまだ何かをして来ないとは、限らないからである。

桐谷は、署に行つて野田たちと話し合つた結果、念のため、野田たちが近くで様子を伺うということになつた。つまり、今もどこかで一人の様子を監視しているのだ。幸い、この公園は木々が多いので、隠れるのにも好都合である。そして、もしも黒川が不審な行動に出たら、野田たちがすぐに飛び出してくるはずだつた。

黒川も、当然そうしてくる可能性は考えているはずである。だが、彼は警戒するような素振りなど一切見せなかつた。

「あの計画は、実は何年も前から考えていたことだつたんだ」

そう言つて、黒川は事件の真相について、話しあじめた。

その真相が、藤森の推理にほぼ間違ひがなかつたということに驚いた。

事件の真犯人 黒川隼人は、この計画を何年も前から考えていた。そして、星野一樹に対しても復讐という名で行つてきた嫌がらせのすべては、実はこの計画のための布石だつたのである。

最初は小さな嫌がらせから、それをどんどんと大きくしていく。それが、星野が自分に対して憎悪を抱かせるための作戦だつた。

そして、約一年前、中学校の同窓会が催されることを知つた。絶好の機会だつた。黒川は星野に歩み寄り、自分が復讐<sup>レ</sup>をしているということを告げた。すると、願つてもないことに星野は自ら黒川の家に訪れたのだ。そこで黒川は、自分はあと二回の復讐をやると断言した。嘘ではなかつた。

それから半年後、黒川は計画通り、その二回目の復讐を遂行した。星野とその妻との間で騒動が起つて、それによつて星野が自分を憎むようにと仕向けた計画だつたが、結果は離婚といつこれ以上ないほどに最高の形になつた。

やり過ぎたかな、などといつ実感はなかつた。これで計画が確実なものになるといつ満足感しか抱かなかつたのである。

そして、事件の一ヶ月ほど前、黒川は最後の復讐のため、二人の人間をそれぞれ呼び出した。

まず一人目は、黒川隼人の双子の弟 黒川誠だった。双子とは言つても、彼とは一卵性双生児だったので、顔は似ていない。それもまた、好都合だった。

隼人は、誠が両親をひどく憎んでいたことを知っていたため、その両親を殺すための手伝いをしてほしいなどと言うと、最初は驚いていたが、すぐに了解の返事が来た。

誠には、星野一樹に殺し屋の宇田正則として接触させることにした。これで星野が隼人の殺しを依頼した瞬間、彼は罪を問われることになる。そして、当然そうなると自信を持つていた。

そして、誠を自分の身代わりとして殺すつもりだった。

二人目は、友人 有原智也を選んだ。別に友人なら誰でも良かつたのだが、彼は隼人よりも性格上少し弱い立場にあつたため、彼を利用することにした。

最初は事件のことなど一切教えず、ただ手伝えと言つた。だが、それではさすがに抵抗してきたので、少しの金を用意してやつたら、了解してきた。

有原には、桐谷耕介に私立探偵の白崎竜輔として接触させた。それは不必要と思われるかもしれないが、一応の布石だった。桐谷には事件現場へ直接行つてもらい、第一発見者として、まずは容疑を疑われる。そこで、桐谷はすべてを話し、有原にわざと星野さんと言わせるつもりなので、当然星野の調査が進むだろう。

そして、星野が見つかれば、それで計画は完遂のはずだった。桐谷の無罪は証明され、星野は逮捕される。だが、それまでは順調だったのだが、事件当日、予期せぬ出来事が起こつたのである。

隼人の当初の計画では、殺害するのは三人の予定だった。つまり、誠と両親である。

事件当日。隼人と誠の二人は、隼人の家に呼び出しておいた両親を殺害した。まさか、息子たちに殺されるなど思つてもいなかつた

のだろう。そんな老人の背後を取るだけだったので、それに一人だけたので簡単だった。

両親を殺害したあと二人になったところで、隼人は計画通り誠を殺した。彼は半ば呆然と立ち尽くしているだけだったので、狙いを定めて一突きで殺すことができた。

それが、事件現場に傷ひとつなかつた理由である。

「……裏切つたな」

誠は最期にそう言つたが、隼人にとっては計画を成功させるための犠牲のひとつに過ぎなかつた。

そして、隼人は誠を自分の身代わりとするため、嫌な気持ちだつたが、その遺体をバラバラにして、次いで顔も切り刻み、誰ともわからぬようになつた。

そのとき、家へ来るよにと事前に連絡しておいた有原がやつて來た。彼が来たタイミングも完璧だつた。あとは彼にすべてを話して、家をあとにするつもりだつた。

だが、彼は話をすべて聞くか聞かないか、突如逆上した。いきなり、隼人の胸倉に掴みかかつってきたのである。

「ふざけんな！ 僕はこんなこと聞いてない！」

隼人は身の危険を感じ、手にナイフを持っていたということもあり、思わず彼を殺してしまつた。それが、失敗だつたのである。

だが、そうは言つても仕方がない。そう思つて、隼人は彼の存在もばれるとまずいと感じ、誠同様、顔を切り刻んでバラバラにした。そして、隼人は証拠になりそうな携帯電話やその他色々なものを押収してから、家を出た。そのとき、有原には万が一の場合に備えてタクシーで来いと命令していたので、車は自分のものと両親のもとのどがあり、その両親の車を使つた。

だが、もうひとつだけ問題が残つていた。

それは、桐谷を家へ呼び出すための人材 つまり有原を殺してしまつたことだつた。連絡しないとも考えたが、やはりそうもいかないと、隼人は有原の携帯電話から桐谷の家へ電話をかけた。

彼が、寝起きだつたことに助けられた。少しは疑われたかもしれないが、それでも彼は家へ行つてくれたのだ。

これで、ほぼ遂行した。多少悪事は起きたが、それでも問題ないだろうと思つた。

だが、警察は自分を捜している。

最近、隼人はその事実に気がついてしまった。

そして、捕まるのは時間の問題だと思つた。

時間がない。それならせめて、桐谷にだけでもすべてを話そうと思つた。そして、そこで覚悟を決めるつもりだった。

「これが、真相のすべてだ……」

話し終わつた黒川は、そう言つた。

「嘘だ……」

呆然としていた桐谷から出た最初の言葉が、それだつた。

「嘘じやない。これが真実だ」

「嘘だ！ どうして！」

桐谷は叫んだ。だが、黒川は冷静を保つてゐる。

「俺は、心の底から悪い人間なんだよ」

「なら、もう一度やり直そよー 自分の罪をしつかりと悔い改めて、もう一度はじめから……な？ そうしようよー」

だが、そのとき黒川から発せられた言葉は、あまりにも重く響いた。

「捕まれば、俺の死刑判決は絶対だ」

「

それは、わかつていた。桐谷は死刑について以前調べたので、あの事件が十分死刑に値する内容だということはすでに知つていた。だが、それでもまだあきらめきれない。

「どうして！ なんで絶対だなんて言い切れるんだよ！」

「言い切れる。俺の死刑判決は動かない。それは、いくら改悛の情を見せてても同じだ。それに……残念だが、俺は事件を起こしたことに対して、何ひとつ後悔なんて感じないんだよ。むしろ、達成感しか抱かない。まあ、星野が死刑にならないことだけが後悔として残るが、それは違う意味だ。そもそも、俺に悔い改めなんてできないんだよ」

桐谷は言葉を失つた。もう、何も言い返せない。

「わかつたか？ 俺の死刑は決定であり、絶対なんだよ」

「……」

「結果は、変わらないんだ。それなら」「

そう言つと、黒川は桐谷にだけ見えるような角度から、ナイフの刃を出して見せた。

その瞬間、桐谷はその場に凍りついた。

「

身体は動かなかつたが、思考の方が異様なまでの速さで展開されていた。

どうして、ナイフを持っている？

人を殺すため？ 誰を？ 僕なのか？

どうして、俺を殺すんだ？ 何のために？

野田さんたちは気づいていないのか？

気づいてくれ！ 早く助けてくれ！

そんな考えが、一瞬で頭をよぎる。

だが、野田たちが出てくる気配はなかつた。ちょうどビ、死角になつてゐるのだろう。

そう思つ間にも、黒川は少しずつ桐谷に近づいてきていた。

「 っ！」

桐谷は叫ぼうとしたが、それは声にならなかつた。極度の恐怖と緊張のせいだ、思考以外の機能がすべて停止しているような状態だつたのである。

「 どうせ死ぬことに変わりはないのなら」

黒川はすでに、桐谷の目前まで迫つていた。

ああ、俺は殺される。ここで殺されるんだ。

桐谷は本心からそう感じた。黒川が足を止める。

野田たちがその様子の異変を感じ取つたのか、がさつと草の擦れるような音が聞こえ、こちらへ駆け寄つてきた。もちろん、桐谷には目を向けるような余裕などなかつたので、それは雰囲気と音から感じ取れたことである。

「 もう、遅い……」

黒川が呟く。その通りだつた。野田たちは意外にも遠いところに

隠れていたのである。全力で走っても、地面が不安定なせいもあり、十秒近くはかかりそうだった。

桐谷は最後の力を振り絞つて、どうにか逃げようとした。

えつ？

だが、無残にも桐谷は地面に尻餅をついてしまった。つまり、腰が抜けたのである。加えて、全身の力も完全に抜けていた。くそつ、と叫ぼうとしても、それは無音の振動として空気を震わせるだけだった。

ああ、もう駄目だ。

黒川が、ナイフを斜め下に突き出す。その刃先は、まさに目と鼻の先にあつた。彼が一步踏み出せば、途端に桐谷の顔面から血が吹き出ることだろう。

「死が必然なら」

桐谷は、自分が失禁し、下腹部が濡れていることにさえ気づかなかつた。

「それを自ら選ぶ!」

黒川が叫んだ。

桐谷は目を瞑る。

ナイフが刺されたとき、どんな感触がするのだろうか。

冷たいのか。それとも、ただ痛いだけなのか。

痛みすら、感じないのか……。

「」  
数秒間目を瞑っていた桐谷は、異変に気がついた。自分に何の被害も出ていないような気がするのだ。現に、振動さえ伝わってこない。

おかしいな?

刺されても、痛くないのか?

それとも、もう死んでいるのか?

桐谷は思考の末、そつと目を開いてみた。

「……え?」

そこには、血まみれになつた黒川の姿があつた。

彼はふらふらとした足取りで数歩あとずさると、そのまま地面へと仰向けに倒れた。

その光景を、桐谷は呆然と見ていた。

「桐谷さん！」

そのころになつて、ようやくやつて來た三人のうちの野田が、そう叫んだ。

「桐谷さん！ 大丈夫ですか？」

その言葉にはつと我に返つた桐谷は、今の状況を理解するのに数秒を要した。

「大丈夫です！ それより、隼人が！」

桐谷は立ち上がりつて彼に駆け寄らうとしたが、それはできなかつた。未だ、全身に力が入らない。何とも情けないな、と桐谷は思つた。

「これはやばい……。救急車を！ 早く！」

と、野田が黒川の状態を見て言つ前に、澤田はすでに携帯電話を使って、救急車を呼び出しているようだつた。さすがに、対応が早い。藤森は肩を貸して、桐谷を起き上がらせた。

桐谷は、藤森の肩を借りながら、黒川へと近づいた。

「どうしてだよ……隼人」

黒川は、自分の腹を一突きしていた。刃の根元まで食い込んでいて、出血は多量。助からないのは、素人が見ても明らかだつた。だが、まだ意識はあるようだつた。

彼は、苦痛に歪んだ顔からどうにか苦笑いを作つた。

「仕方……ないんだ……。これが、俺の……辿るべき、道……運命」

そのとき、電話を終えた澤田が、倒れている黒川へと駆け寄つた。

「隼人！」

そう叫んだ彼女は、今にも泣き出しそうだつた。

「誰、だ……？」

「澤田よ！ 澤田臘月！」

「なんだ……皐月ちゃんか…………久しぶり」

その言葉を受けてか、澤田は膝をついて泣き出してしまった。

「隼人……」

桐谷が呟いた。黒川の意識も、すでに限界のようだ。

「最期に……いいか?」

「ああ……何だ?」

「ああ……何だ?」

澤田も、うんうんと何度も頷いている。

「悪かった……色々と……迷惑を、かけて……でも、俺は……後悔は……してない……」

「そうか……」

黒川は、たとえその形がどうであれ、最期まで自分の意志を貫き、曲げなかつた。

後悔はしていない。それは、本音に違ひなかつた。

「ありがとう…………じゃあ……な…………」

黒川は最期にそう言つて、息を引き取つた。

「…………」

底知れぬ絶望感、喪失感。

そして、涙……。

そこに残るものは、ただそれだけだった。

一夜が明けた。

その日は、昨日とは打つて変わった晴れ晴れしい天気だった。まだ残っている微かな湿気が、爽やかな風と共に類を伝う。そのせいか、太陽の光もそれほど強くは感じない。夏の暑さでありながら、まるで春先のような涼しささえ感じさせた。

だが、そこにある人たちの気分は、まさにその逆を辿っていた。そのあまりにも切なく悲しい昨日の出来事の余韻が、当然のように残っている。

皆、俯いていた。その中で、桐谷は昨日野田が呟いた言葉を思い出す。

「すべて、私の責任です」

それは、救急車が到着し、黒川が運ばれていたとき吐いた言葉だった。そして、その言葉は桐谷の中で幾度となく反芻され、色々な形となつて彼を痛めつけたのである。

すべて、野田の責任？ そんなわけがない。責任があるのは、俺なんだ。

桐谷は、そう思いながらもわかつていた。あの出来事の責任を誰かに　たとえ、それが自分にだとしても、押し付けようとすること自体がそもそも間違っている、と。何の意味も持たない、と。だが、それでも自分の責任だと思わずにはいられなかつた。

桐谷は、しばしあのときのことを思い出した。

それは、黒川からメールが来たときのことである。あのとき　黒川から公園に来いとの要求を出されたとき、桐谷はすでに色々な可能性を考えていた。

黒川が、自分を殺そうとする可能性。

ただ、本当に話がしたかつただけであり、そのあとに自首する可能性。

そして、黒川が自殺する可能性さえも浮かんでいた。

そこまで、考えていた。だが、実際に自分がその状況に立たされたとき、桐谷は何もできず、ただ自分の死のことだけを考え、彼の言葉さえ聞こえなかつた。

だが、実際桐谷に何ができたのかと言えば、何もできなかつたのだろう。黒川が自分の腹を刺し、死んでいくことに変わりはなかつたのだろう。たとえ、桐谷がどれほど説得を試みたとしても、彼の意志に変わりはなく、自ら死を選んだことだろう。

それでも、何かしたかった。

桐谷は、下唇を噛んだ。

死という恐怖に怯え、目の前で腰さえ抜かした自分に、黒川は一体何を思ったのだろう。滑稽だったのか。それとも、そんなことは眼中になかったのか。

彼が自分に刃先を向けたとき、彼は何かを訴えたのだろうか。止めてくれ。

そう訴えていたのではないか。

桐谷は、力を入れていた拳をさらに深く握り締めた。溜め息をついて、その手を開いてみる。手のひらには、しつかりと爪痕が残っていた。

桐谷は、再び溜め息をつく。

深い悲しみに打ちひしがれる田は、まだ何日も続きそうだった。同じくその日、野田たちは星野に黒川の死を、そしてそのすべてを伝えた。

聞き終えた星野は涙を流し、泣いていた。

それを見て、桐谷は思つ。星野は、本当は彼を殺そうとなんて一瞬たりとも思つてはいなかつたのだろうな、と。

彼は、ただ黒川に許してもらいたかつただけなのだ。それが、思いも寄らない不幸な出来事が続いたせいで、自分は黒川を殺すことを望んでいると、勘違いしてしまつたのだろう。そして、その本意とは言えない思いのまま、彼は利用された。

現実は、なんて辛いんだ。

桐谷は、心底からそう思つた。現実は、誰もが思うようには動かない。誰かが幸福になれば、それに応じて誰かが不幸になる。そして、その幸福のために誰かを利用したり、犠牲を出したりさえする。そんな相対的とも言える世界で、自分たちは生きている。

また、人がそこにいれば、その周囲には様々な関係が築かれ、絡み合い、ときには断ち切られ、構成されていく。自分が意識しないうちに、その関係という糸に絡まれ、利用された末に結局断ち切られたり、その罪をなすりつけられたりさえする。

現実は、あまりにも残酷なのだ。

それに耐えられなくなつた人々が自殺をする気持ちも、今の桐谷には理解できるような気がした。

では、黒川もそうだったのか。

違う、と桐谷は思った。

彼は、その糸を操っていた側の人間だった。だが、それは決して良いこととは言えない。むしろ、それで彼が起こしたことは、許されないことである。それでも、彼は自分の意志を最後まで貫き通した。そのことにだけ関して言えば、認めるべきなのかもしれない。その意志の強さを、もっと違つところで活かせれば、彼の人生も大きく変わつていたことだろう。

桐谷は、泣いている星野と、その周りで黙つている野田たちの姿を見た。

野田たちも、同じようなことを考えているのだろうか。

そして、その罪をなすりつけられたとある意味言つてもいい星野は、今どんな気持ちでその現実を見ているのだろうか。

桐谷は、そんなことを思った。

## 第六章 想念

桐谷は、街の東側に位置するある居酒屋へ、微雨の中、車を走らせていた。この地域周辺では、夜の八時ともなると、歩行している人の姿も少なくなる。その代わりと言つてか、仕事を終えたサラリーマンたちなどが居酒屋へと向かう姿の割合は高かつた。明日から土曜日なので、思う存分飲めるのだろう。

あれから、三ヶ月近くがたつていた。

八月上旬。梅雨も終わり、人々の気分もそれまでの異様な湿気と長雨に耐え抜き、やっと快適に過ごせるということで、高調だつた。桐谷もその例外ではなく、気分は良かつた。あの出来事での陰鬱さも、時間の経過につれて薄れていき、今では以前と変わらない生活を送つていた。

仕事の方では、以前締め切りに追われていた小説を無事書き上げ、今は新たな執筆に追われている。何とも休む暇のない仕事だが、それでも桐谷は純粹に小説を書くことを楽しんでいた。

それにしても、今の桐谷は異様なまでに気分が良さそうである。その理由は、澤田とのことにあつた。以前メールアドレスを交換して以来、度々メールすることがあつたのだが、ついにこの間、彼女の方から交際を申し込まれたのである。

急なこともあり、桐谷は多少悩んだが、結局受諾した。広い視野から理想を目指したいという気持ちがないでもなかつたが、それでも彼女は十分理想の女性だつたのである。決して、軽い気持ちから交際を受諾したわけではなかつた。

そして、今日がその初めてのデートだつたのである。と言つても、夜の八時に居酒屋とは友人同士が飲み語らうような時刻と場所だが、彼女は仕事の都合であまり時間が取れないらしく、それに彼女からそこを指定してきたのである。

桐谷は浮かれた気分で、下手な口笛を吹いてみせた。

そして、約束の時刻の十分ほど前に、桐谷はその居酒屋に到着したが、すでに澤田は来ているようだった。彼女が、店の前に立っていたのである。

「お待たせ。随分と早いね」

「うん。場所はもう取つたから、ついてきて」

笑顔で言つたあと、彼女は店の中へと入つていつた。桐谷もあとに続く。

ついていつて、部屋の襖を開けると、中の様子に桐谷は驚いた。そこには、野田と藤森の姿があつたのである。

「桐谷さん。お久しぶりですね」

「すみませんね。二人の邪魔をするみたいで」

桐谷を見るなり、野田と藤森はそれぞれ言つた。

驚いた顔のまま、桐谷は澤田を見ると、彼女はいたずらつぽく微笑んだ。

「ごめんね？　でも、驚いたでしょ？」

「うん」

一人きりではなかつたのか、と少し残念な気がしないでもないが、それでも悪い気は全くしなかつた。何せ、この二人である。それが澤田の友人や他の人たちなら、桐谷もさぞ不愉快に思つただろう。だが、野田と藤森だけは特別だつた。

「桐谷さん。邪魔をするみたいで、すみませんね」

藤森が、また同じことを言つた。彼は、單にからかつて楽しんでいるように見える。

「いえ。むしろ嬉しいくらいですよ。またこうしてお会いできましたんですから」

桐谷は素直に答えた。

「桐谷さんも、元気そうで何よりです。三ヶ月ぶりですかね？」

野田が言つ。彼も変わっていらないな、と桐谷は思つた。まあ、当然のことだが。

「そうですね。あのときは、本当にお世話になりました」

「いえ、じゅらこや。最近、小説の方はどうなんですか？」

野田は、何か書くようなジェスチャーをしながら聞いた。

「なかなか順調だと思いますね。この間も、一作書き終わりましたし。今は、新しい作品に取りかかっているところです」

「その作品は、ぜひ読ませてもらいたいですね」

「ありがとうございます」

「私も読もうかな」

藤森が、呟くように言った。

「藤森さん。本当に読むんですか？」

「確かに」

と、皆が笑つた。そんなこんなで談笑していると、そのうち話の趣向は野田たち警察のことへと変わつていった。

「そう言えば、あれ以来何か大きな事件はあつたんですか？」

桐谷が、聞いた。最近あまりニュースも見ていなかつたので、そのことが少し気になつたのである。

「いえ、大きな事件というはないですね。事件があつたとしても、すぐに犯人が見つかるようなものばかりですし。まあ、あの事件が複雑過ぎたんですよ。あのような事件は、当分の間は起きないと思ひます」

「そうですか。まあ、あんな事件がそう何度も起きていたら、警部さんたちも身が持ちませんよね」

「確かに、その通りですね」

野田は微笑んでいたが、隣で藤森が何か悲しそうな顔をしているのが、桐谷は気になつた。だが、あえて聞こうとはしなかつた。

それから、一時間ほどたつたころだった。

「では、私たちはこの辺で」

「そうですね」

突然野田がそう言って、立ち上がつた。藤森も頷き、それに続く。

「もう、帰るんですか？」

「はい。明日も色々とありますので」

「そうですか。大変ですね」

「まあ、二人の邪魔をしないように、ここへ」とですよ」

と、藤森がまたからかうように言った。桐谷は苦笑いする。

「今日は久しぶりに桐谷さんとお話ができる、随分と有意義な時間を過ごせました。ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ。帰りは、気をつけてください」

野田は礼をすると、「では」と言つて帰つていった。藤森も「楽しんでください」と相変わらずなことを言つて、野田のあとについていく。

「耕介くん……」

二人きりになつたところで、澤田が口を開いた。それがどこか深刻そうな様子だったので、桐谷も真面目に彼女の方へと顔を向ける。だが、彼女は俯いていた。

「どうしたの？」

澤田は、少し躊躇つてから言つた。

「あのね……野田警部、やめるかもしないんだって」

「やめるって、警察を？」

「うん……」

桐谷は一瞬、言葉に詰まつた。野田が、警察をやめる？

「どうして？」

その質問に対しても、彼女はやはり俯いたまま答えた。

「なんか、やっぱり自分にはこの仕事は合わないって……」

「そんな……」

「あの事件からずっとと考え込んでいたみたいだから、直接聞いてみたんだ。そしたら、そう言つてたの。あの事件で、色々と思いつらされたんだって」

「その場に、藤森さんはいたの？」

「うん、いたよ。でも、相當にショックを受けてたみたいだったから……まあ、それは私も同じだったんだけど」

だからあのとき、あんなにも悲しそうな顔をしていたのか、と桐

谷は思った。

「でも、もつたといないよ」

「うん。私もそう思つたから、言つたんだ。でも、もう耐えられないんだつて。とりあえず、刑事部はやめて違うところにでも入れたらと言つてたけど、そんな簡単に「まへいくとも思えないし、もし」とか言つてたけど、そんな簡単につまへいくとも思えないし、もし

それが駄目だつたら

「もし駄目だつたら、本当にやめるつて？」

桐谷は、澤田がすべて言い終わる前に聞いた。

「うん。でも、それは言つてたけど、本當かどうかはわからぬい。野田警部には家族もいるから、そのことも考えたら、やめられないと思つたの。でも、本当に辛そつだつたから…………」

「そつか……。澤田さんは、やめたりしないよね？」

「私は、やめない。あの事件は色々と辛かつたのは本當だけじ、やっぱり、警察官でありたいし、大変なこともあるけど、私はこの仕事を誇りに思つてるから…………」

「そう言えば、澤田さんはどうして警察官にならうと思つたの？」

桐谷は、何気なく聞いた。だが、途端に彼女の表情が暗くなつたのを見て、しまつたと思う。

「私、小さいころに父親を殺されたんだ……。そのこと、耕介くんには話してなかつたね。詳しく聞きたい？」

澤田は、暗い顔を桐谷に向けて言つた。最後にそう聞いたのは、強がりなのだろう。本当は、そんな悲しい過去のことなんて、話しあくもないはずだ。

「いや、いいよ。」「めん……」

桐谷も、それ以上彼女にかける言葉が、見つからなかつた。

俺はまだ、澤田さんことを何も知らない。

そう思つた。彼女とは小学時代の友人だつたとは言つても、所詮それだけの関係だつたのだ。

だが、だからこそ知りたいと思つた。これから付き合つていいく中で、彼女について少しでも多くのことを知つていきたいと思つた。

そして、彼女にも自分のことをもつと知つてもらいたい。

桐谷はそう思い、そこにいる彼女を見るのだった。

桐谷は、結局そのあと酔い潰れた澤田を家まで送つていぐ」と云ひ言つた。桐谷は、マンションに着いたので、彼女を降ろした。

彼女は今までずっと眠つていたので、多少は酔いが醒めたようだつた。

「ごめんね？ なんか暗い話になっちゃつて」

「うん……いや、いいよ。それより」

桐谷が言い切る前に、澤田は悟つたように言つた。

「でも、今度はちゃんと一人でデートしようね」

彼女は、にっこりと笑つた。桐谷も、それで安心して微笑み返す。彼が言おうとしていたことは、まさにそのことだつたのだ。

「あと、帰りは気をつけてね」

「うん、ありがとう。じゃあ、お休み」

「うん。お休みなさい」

そう言つて、二人は別れた。

帰り道。桐谷は、やはりいつものように思考を巡らすのだった。

野田が、警察をやめる……。

それは、あの事件が様々なものを巻き込んだ証拠だつた。そして、それは人々の心に影響を与える、行動にまで現れたのである。そのわかりやすい例が、野田だろう。

桐谷も、同じだった。あの事件によつて 特に黒川の死によつて、色々なことを考えさせられた。

ただ、それは野田のように悪い方向へと動いたのではなく、良い方向へと動くきっかけとなつたのである。つまり、それは、しっかりとした意志を持つて、後悔のない人生を送りたいということであり、自分を表現できる小説という仕事をもつと頑張りたいということでもあつた。

黒川の「後悔はしていない」という最期の言葉が桐谷は特に印象

に残っていた。

彼の起こしたことは、人間として許されないことだつたが、それでも、彼は最期まで自分の意志を貫き、決して後悔などしていなかつた。

自分も彼のように、後悔はしたくない。

彼の場合、結果は最悪と言えるべきものになつてしまつたが、彼自身にとつてはそれで良かつたのかもしれないが、桐谷は、彼の考え方については認めていた。

そのためにも、自分は小説という分野をもつと頑張つていきたい。桐谷は、そう思ったのである。

車が、信号にひつかかつた。

桐谷は珍しくも、車に乗りながらタバコに火をつけると、そのままゆっくりと煙を吸い込んだ。それを吐いて、白い煙が次第に薄くなつていく様子を眺める。と言つても夜で暗いため、闇に消えていくようだつた。

まあ、とりあえずは今度の澤田さんとのデートを楽しみに待とうかな。

信号が青になつたので、車を発進させる。

これからも人生は、まだまだ続くはずだ。それでも、今を楽しみ、決して後悔などしないように、生きていきたい。

あの事件から得たものを、決して無駄にしないように。

彼の死を忘れず、そこで生まれた感情を無駄にしないように。

暗い夜道の中を自宅へと向かいながら、桐谷はそう心に誓つた。

## あとがき

皆様、はじめまして。

今回は、『不覚の運命』を最後まで読んでいただき、誠にありがとうございました。

自分はこれが初投稿であり、最後は何か妙な終わり方になつた気もしますが、何はともあれ、どうにか完結することができました。しかし、恥ずかしながら、自分は語彙也非常に少ないことながら、警察はおろか、社会の仕組みなどについての知識は全くの皆無であり、様々なホームページなどを見て参考にしてもらつたのですが、それでもまだ奇妙な点、不可解な点は多々見受けられると思います。表現の仕方においてもまだまだ不十分であり、途中に主観の入った妙な考え方など、他人から悪評をもらつても不思議ではないような部分も数多くあります。

その点につきましては、どうかご了承ください。  
これからも少しずつ訂正を加え、できる限り良いものにしていく  
う思います。

話は多少変わりますが、実際、自分は受験生ということもあり、本当は勉強の方に熱を入れるべきなのでしょうが、どういうわけか、こちらの方を優先してしまいます。

特に後半になつては、一気に書き上げてしましました。

そうは言つても、これからも新たに書いていくつもりなので、そちらも読んでいただければ光榮です。

また、何か気になることがあれば遠慮なくコメントを、そして評価をよろしくお願ひします。あと、もし気に入つてくだされば、ランキンギへの投票もよろしくお願ひします。

最後にもう一度、感謝の言葉をもって、終わらせていただきます。  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5773e/>

---

不覚の運命

2010年10月8日11時57分発行